

---

# とある異能の六道輪廻

紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある異能の六道輪廻

### 【Nコード】

N4312P

### 【作者名】

紅

### 【あらすじ】

一人の少年がとある事によって死んでしまった。少年は転生する前、孤独だった。

だが、転生してからも何も変わらず、待ち受けていたのは孤独だった。強すぎる上の孤独。

そんな少年は孤独を受け入れた。少年はとあるの世界で変われるのか？

注）原作が崩壊していきますので、そういうのが苦手な方は引き返してください。後、オリジナル設定やオリジナル展開などもあるの

で、そう言ったものが苦手な事も引き返してください。最後に作者は文才が無いので、駄文になる恐れがあります。それでも良ければ、どうか読んでいってください。

## プロローグ（前書き）

勢いで書いてみたくなってしまった作品です。今回は文字数はもの凄く少ないです。

それでは、プロローグをどうぞ。

## プロローグ

転生しても何も変わらない。

（神様。アンタは死んだ俺に転生させてくれると言った。その時、希望の能力も聞いてくれて、全て希望した能力を与えてくれた……でも、転生してから俺を待っていたのは　　）

孤独だった。

（俺は人を助ける為に最強と言ってもいい能力を神から貰った。俺が居なくてもとある人物によってこの世界　　学園都市がくえんとしに居る者たちは助けられたと思う。だが、自分の手でも人を守りたかった。ただ、それだけなのに　　）

その強さ上に孤独だった。

だから、少年、春風優人はるかぜ ゆうとは心に誓った。

孤独でもいい。皆を助けられるのなら、孤独でいい。これからは孤独に生き、影ながら皆を救ってやるっ！！

春風優人は孤独を受け入れた。

この時から物語は始まった。

プロローグ(後書き)

## 第一話 とある銀行強盗と一つの能力

一人の少年はお金を下ろすために銀行に向かっていた。

容姿は整っていて、それなりにもてそうな少年の髪は黒髪で至って普通だ。だが、少年は持っている物と目が変わっていた。

少年の右目は赤く、数字が書かれている。

少年の右手には先が三叉に分かれた槍が持たれている。

共に『家庭教師ヒットマンREBORN!』の六道骸が持つものだ。赤い目の名は『六道輪廻』ろくどりんねで、先が三叉に分かれた槍の名は『トリアイナ三叉槍』である。

そんな彼に周囲の視線が集中しているが、そんなこと気にも留めずに少年、春風優人はるかぜゆうとは銀行に足を運ぶ。

春風は銀行に入る時、三叉槍が邪魔になると思い、長さを縮小する為に付いている青いボタンを押す。

三叉槍の槍部はロッド部に吸い込まれるようにして消え、ロッドの長さは手の平サイズにまで縮小される。

この機能は春風を転生させた神が普段の生活で邪魔になるからと付けた機能だ。拡大する時には青いボタンの上に付いている赤いボタンを押せば元の大きさサイズに戻せる優れものだ。

春風が青いボタンを押したのとほぼ同時に何故か下りていた銀行のシャッターがバキバキバキッ！ と音を立てる。

春風が音に気づき、シャッターの方に向き直ると同時にシャッターを何かが砕く。

貫通した物体は地面に落ちる。

春風は落ちた物体に視線を向ける。銀色の球体が落っこちていた。おそらく、パチンコに使用される玉だ。

なんでこんな物が？ と思いつながら視線を銀行の中に向ける。

銀行の中では一人のツインテール少女が一人の男と向き直り、な

にかを話していた。

転生する前に読んだはずの原作知識を神に『原作知識があると色んな感情が入り混じってしまう可能性がある』と言った理由で記憶から消されている春風は何を話しているのかが気になり、近づこうとした。

瞬間。

「お願いです、白井さんを、白井さんを助けてください」

そんな声が下から聞こえてきた。

なんだあ？ と思いながら春風は視線を下に落とす。

足元には花飾りを付けている少女が居て、涙を流しながら春風に必死に頼み込んでいた。

何が何だか分からない春風は首を傾げながら、

「分かったよ。助ければいいんだろ？」

「お、お願いします」

花飾りの少女は涙を拭いながら返事を返す。

とりあえず、状況は分からないが助ければそれで済むだろう？ と考えながら春風は能力を発動させる。

春風の右目の数字が一瞬にして『一』に変わる。

六道輪廻には六つの能力があり、数字によって能力は変わる。

一、地獄道……相手に幻を見せ、永遠の悪夢により精神を破壊する能力。幻術に該当する。

二、餓鬼道……相手の技を奪い取る能力。

三、畜生道……相手を死に至らしめる生物の召喚する能力。

四、修羅道……右眼から闘オーラ気を出し格闘能力を上昇させる能力。

五、人間道……体から黒い闘気を出し、修羅道以上に格闘能力を上昇させる能力。

六、天界道……相手をマインドコントロールして、意のままに操る能力。

春風の能力は全て神によって強力にされている為、その気になれ

ば幻術だけで人を殺す事が簡単に出来る。

そんな春風はたった一言、

「眠れ」

瞬間。

ツインテールの少女と向かい合っていた男の体が傾き、倒れる。

春風は男が倒れるのを確認すると、

「もう、大丈夫だぞ」

「っへ？」

花飾りを付けた少女は何が起こったか分かっていないのか首を傾げている。

「ほら、行つて来い。友達なんだから？」

そんな少女の背中を軽く叩く。

花飾りを付けた少女は春風に一礼すると、ツインテールの少女の

元へ駆け寄る。

春風は手を振って花飾りを付けた少女を見送ると、アンチスキル警備員が来る前に撤退する。

今日、良く良く考えれば金を下ろせなかった！ 何のために銀行に行ったんだよお！？ と言う声が学園都市に響いたとか、響いていないとか。

## 第一話 とある銀行強盗と一つの能力（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。感想などがあれば待っています。

## 第二話 日常

放課後の学校。

右目に髑髏ドクロの模様が描かれている眼帯（クローム髑髏の眼帯に似ているが少し違う）の少年は窓際に肘を突き、ふあくと欠伸を漏らす。

「どうした？ 夜更かしてもしたのか優人？」

誰かが少年、春風優人はるかぜ ゆうとの名前を呼ぶ。

眼帯をしていたのは春風だった。

彼が眼帯をしている理由は能力を隠すためだ。春風が付けている眼帯は神からの贈り物で右目を隠すのと同時に眼帯が六道輪廻ろくどうりんねの能力を封印しているのだ。

彼はそんな眼帯の他に口ザリオを首から下げている。この口ザリオもとある能力を封印する為のものだ。

春風は声をかけた人物の顔を見る。

声をかけた人物はツンツン頭が特徴の少年、上条当麻かみじょうとまだ。この世

界に来た春風が心から親友と思える人物の一人だ。

「なんだ当麻か。どうしたんだ？」

「いや、今日一日ずっと眠たそうにしてたから夜更かしてもしたのかなあと思ってさ」

はあくと春風は溜息を吐き、

「あのなあ。夜遅くに俺の部屋から音していなかったら？」

「まあ、そうだけど」

話の内容から分かる通り、春風と上条は隣人だ。

春風は隣に置いておいた空っぽの鞆を肩に担ぎ、

「それより、帰ろうぜ」

「ん？ そうだな」

上条は横目で時間を確認しながら了承する。



マジでかー！！ と春風は心の中で叫ぶ。

二人はチラリと背後を振り返る。

まだ、九人。ほとんど減っていなかった。嫌な現実を突き付けられた二人は、

「不幸だあああああああああ！！！！」

本日二度目の絶叫が学園都市に響き渡った。

「疲れたあ」

春風と上条はとある学生寮の七階の通路をとぼとぼと歩きながら呟いた。

春風と上条はあの後、2・3キロ走り、やっとの思いで不良達を撒く事に成功したのだ。

だが、撒くのに結構な時間がかかったらしく、もう日は沈んでいた。それを裏付けるように空は暗く、辺りの家や店は暗闇を嫌うかのように光を灯していた。

「マジで、疲れたわあ」

「ホント、疲れた」

彼らは、はぁ~~~~~と盛大にため息を吐きながら自分の部屋に入っていく。

春風はシャワーを浴び終わるとボスツとベットに倒れた。

今日布団を干していた為、布団はふかふかでいて、尚且つ布団からは太陽の優しい匂いが漂う。

太陽独特の匂いに背を向けるように春風はゴロンと転がり、天井を見る。

「この日常はいつまで続くのだろうか？」手を伸ばし、「いや、いつまでだって続くさ。絶対に、な」

（そうだ。絶対続く。仲間とふざけ合い、人助けをして、笑い合う。そんな日常はいつまでだって続くさ。やっと、孤独から抜け出せたんだ。再び孤独になるのは嫌だからな。あんな、場所に戻るの

は……)

春風の意識は闇に呑まれた。

こつこつして、今日も無事に平和な日常が終わる。

## 第二話 日常（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

ものすごい勢いで孤独から抜け出してしまう……タイトル  
変えた方がいいかもしれない。

### 第三話 とある科学の遭遇 (初)

適当に学校に行つてバカをやり、適当に授業を受け、笑い合つていればあつという間に夏休みになってしまふ七月十六日。

今日は午前中で学校で終わりだ。

何故午前中で終わったのかと言うと、システムスキャン身体検査が行われたためだ。皆は今頃、早く終わった事に喜びを感じているはずだ。

なのに、右目に髑髏どくろの模様が描かれている眼帯を付けている少年、はるかぜ ゆうてい春風優人は銀行強盗に遭つていたりする。

「何でこんな事になつてるんだらうか？」  
ポツリと呟く。

俺つて確か、さつきまでクレープ食つてたよな？ つで、金を下ろす為に銀行に来たんだよな？ なんて、銀行強盗と出くわしてるんだらうか？ いや、銀行なのだから銀行強盗と出くわすのは当たり前か？ いや、当たり前ではないよな？ と春風の頭に色々な疑問が飛び交う。

「おい、金はもういいか？」

三人の銀行強盗のうちのリーダー格つばい一人がそう言う。

他の二人はこくりと頷く。それが合図と言わんばかりにリーダー格つばい男は手の平に炎の玉を作り出す。

原作知識を神によって消されている春風の眉がピクリと動く。

(パイロキネシス発火能力者？)

リーダー格つばい男は思いっきり炎の玉を防犯シャッターに投げつける。

瞬間。

ドゴンッ！ と何かが爆ぜるような音と一緒に防犯シャッターが激しく弾け飛ぶ。



「そう慌てんな。今から見せてやるよからよ」  
瞬間。

春風の右目の数字が『四』に変わる。つまり、修羅道だ。  
春風は男の手を振り払い、二人の男に思いつきり回し蹴りをブチ込む。

それだけで二人の男はその場に倒れる。

春風は男達が倒れたのを確認すると、ポケットから髑髏模様の眼帯を取り出し、つけ直す。

「ふう〜。これで安心だよな？」

そう呟きながら春風は男たちの首根っこを掴み、固まっていた白井の前にまで行って、男達を離す。

「ガハッ」と言う男達を横目に見ながら、

「なあ。これで……って、おーい？ 聞いてますか？」

白井の前で手をひらひらと動かす。つが、白井は一向に動こうとしない。

「う〜ん。困ったなあ」

「そう春風が呟いた瞬間、

「く、クソッ！！ 捕まっつてたまるか！！」

金髪の男は力を振り絞り、車に向かって走り出す。

「あ、テメエ！！ 逃げるな！！」

少し力を抑え過ぎたか？ と後悔をしている春風に追い打ちをかけるように、

「あ、なんだお前！？ 丁度いい。一緒に来い！！」

茂みから出てきた男の子が捕まっつてしまう。

「ツチ！！」

舌打ちしながら春風は男に向かって走る。

「良いから来いって！！ 早く！！」

走りながら春風は眼帯を取り、再びポケットにしまつると同時に、一人の女子が男の子を抱きつく。

「ッ！！」

春風の表情に焦りの色が出る。

「ああ！！　なんだテメエ！！　離せよ！！」

そう男が叫んでも黒髪が印象に残りそうな女子、佐天<sup>さてん</sup>涙子<sup>なみこ</sup>は男の子を離さない。

「ダメえ！！」

佐天の行動にイラついたのか、男の足が佐天を蹴り飛ばす為になる。

「クソツ！！　間に合いやがれ！！」

瞬間。

春風の右目の数字が『一』に変わる。幻を見せる事が出来る地獄道だ。

？

男が佐天を蹴る為に足を上げた瞬間。

男の周りが白一色に染まる。

「な、なんだよ、一体何が！？」

男は慌てながら静かに足を下ろし、視線をさまよわせる。その行動にこの場に居た全員がキョトンとしているのだが、今の男からはそれすらも分からない。

「の、能力者の仕業か！？」

男は叫ぶ。だが、返事は返ってこなく、その代わりと言うかのよう

うに、

「な、なんだよ、これは？」

男は自分の頭上を見上げる。頭から二〇メートル離れた所にはギロチンに使われる大きな刃を持つ斧<sup>おの</sup>が浮かんでいた。

「だ、誰か助けてくれ」

そう言いながらペタンと男はその場に座り込んでしまう。

ここで、初めて男に誰かの声が届いた。たった一言、届いた。

「眠れ」

瞬間。

高さ二〇メートルに浮かんでいた刃を持つ斧は重力に逆らう為に付いていた糸が切れるように勢いよく落下する。

「うわああああああ!!」

男は叫びながら、その場で気絶する。

?

男が気絶するのを確認した春風は静かに眼帯をつけ直し、未だに何が起こったのか分かっていない佐天に近付き、

「大丈夫か？」

「あ、はい」

佐天は春風から差し出された手に捕まり、ゆっくりと立ち上がる。

春風は佐天を立ち上がらせると、気絶した男の首根っこを掴み、

白井の元へズルズルと引き摺って行く。

春風は男の事をリーダー格っぽい男の隣へポイツと投げ捨てる。

気絶していなかったリーダー格っぽい男の顔から血の気が一気に引いて行く。

「うーん。ちよいと、やり過ぎちまったかな？」

気絶してしまった男を見ながらそんな事をポツリと呟く春風に、

「あ、貴方」

不意に声が掛けられる。

春風は声のした方に振り返る。そこに居たのは白井だった。

「ん？ なんだ？」

「貴方、一体何をしましたの？」

尋ねる白井の目は真剣そのものだった。それに気づいたのか春風は言う。

「何って、幻を見せたんだ」

「はい？」

白井は春風の言っている事がどういいう事か分からず、間拔けに

返事を返してしまふ。

「いや、だから、幻をだな……」

白井はまだ春風がなにを言っているのかが分からずに目をぱちくりと動かす。

困ったなあ。なんて説明すればいいんだろうか？ そんな事を春風が思っているのと、

「あー……！！ アンタ、やっと見つけたわよ！」

そんな叫び声が春風に飛んでくる。

今度はなんだよ？ と思いながら声が飛んできた方に振り返る。

そこには茶髪のショートヘア娘、御坂美琴みさか みことが髪からバチバチと火花を散らせながら、春風の事を人差し指で指していた。

（うーん。向こうが俺の事を知っているって事はどこかで会っているんだろっけど、分からないものは分からないよな？）

そう思った春風はたった一言、

「……………誰だっけ？」

瞬間。

春風に電撃の槍が襲いかかった。

### 第三話 とある科学の遭遇 (初) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございます。感想などがあれば待っています。

第三話 とある科学の遭遇 (終) (前書き)

更新がものすごく久しぶりになってしまったのに、文字数は少ないです。でも、楽しんでいただければ幸いです。

### 第三話 とある科学の遭遇 (終)

?

日が沈み、学園都市は暗闇に吞まれていた。闇を拒むように光が灯っている建物の一つ、風紀委員第一七七支部。

「……ん？ 一体、何が起きたんだ？」  
起き上がり、周りを見渡しながら春風は呟く。

「え。それについては、こちらから説明させてもらいますわ」  
不意に掛けられた言葉に春風は驚く。

誰だ？ と思いながら、声を掛けてきた人物を見る。声をかけてきたのはツインテール少女、白井黒子だが、春風は知るはずもなく、正確に言えば忘れていたので、

「誰？」

「ん？ そうですわね。先ずは自己紹介をしなくてはいけませんわね。わたくしは風紀委員第一七七支部の白井黒子ですわ」

「白井黒子、ね。俺は春風優人。っで、本題だけど……何で俺はこんな所に居るんだ？」

白井は困った笑みを浮かべ、

「お姉様が貴方を気絶させてしまったので、とりあえず第一七七支部に運んだんですの」

お姉様？ と春風が首を傾げたのが分かったのか、白井はその場から数歩横にズれる。それによって、白井の後ろに居た茶髪のショートヘア娘、御坂美琴が現れる。

「この方がそうですの。っで、お姉様。謝ってくださいな。勘違いだったのでしょうか？」

勘違い？ と春風は首を傾げる。

春風が首を傾げている理由が分かったのか、白井は美琴の事を一歩前に出した。

「勘違いと言うかね……私はアンタが『誰だっけ？』なんて言うから電撃を放つただけで、その後で思い出したのよね。私が一方的にアンタを知っているだけだから、アンタが私の事を知らないのは無理ないってね」

「なんだ？　じゃー俺はコイツの勘違いで電撃を食らう破目になったのか？　納得いかねーぞ。」

「ん？　そういえば、と春風は言う。」

「お前、何で俺の事を知ってるんだ？」

「ん？　なんでって……」

美琴は春風を知っている理由を語り始めた。

数日前。

『おい、謝れよ』

美琴の耳にそんな言葉が届いた。

美琴はその言葉のした方へ足を向けた。

足を向けた先は路地裏で、美琴はその路地裏を除く様に見える。

そこでは一人の少年と一人の少女の計二人が数人の男達に囲まれていた。

『はあ？　謝る？　どうして謝るしかないんだ？　無能力野郎が俺達にぶつかつたんだぜ？　だから、そっちが謝るのは当然でも、俺達が謝る筋合いはねえな』

一人の男子の言葉に周りに居た男が笑い出す。

『なに言ってるんだ？　俺は見てただけ。ぶつかったのはそっちだ。しかも、わざとぶつかりに行ってただろ？　拳句の果てに「遊びに行こう」と言い、断られた」から路地裏に連れ込んだ。お前らが謝るのは当然だろうが』

『百歩譲って、それが本当でもよ。弱い奴は強い奴に逆らわない。これ、当然だろ？　っで、何回も言うようだけど、お前達は弱い者で俺達は強い者。だったら、そっちが謝るのは当然だろ』

男の言葉に再び周りに居た男達が笑い出す。

その光景に少年は鼻を鳴らし、

『お前達が強い者？ 違うな。お前達こそ弱い者レベル0だろ？』少年の目が鋭く細まる。『人として teme 等は無能レベル0だ。作られた力超能力でいい気になってんじゃねえぞ。中には人を守りたいのに、超能力が使えない奴もいるつてのによ。 teme 等は超能力を持つている。なのに、 teme 等は人を傷つけてる。そんな teme 等を無能レベル0と呼ばないで、誰を無能レベル0と呼べばいいんだ？』

『 teme ！！ 調子に乗ってんじゃねえぞ！！』

少年の言葉に逆切れした男達が二人に襲いかかる。

一人の男の拳が少年の顔に近付く……だが、男の拳は少年をすり抜け、後ろにあったコンクリートの壁に当たる。

ゴキツ、と嫌な音が響き渡る。

『残念、残念。もう、お前達は俺の世界の中に居るんだよな。俺が能力を解くまで、お前達はそこから出られないぜ。まあ、俺が能力を解いた時にはもう、お前達から結構離れた位置に居るから、見つけるのは難しいぜ。んじゃ、さよなら』

「……ってなわけ。分かった？」

「ああ。よく分かった。お前が勘違い野郎だと言ったことが」

「何よその言い方！？」

まあまあ、お姉様、と白井が美琴の事を鎮める。

「俺、帰っていい？」

「ダメに決まってるでしょ！ 勝負するのよ！」

「……さよなら」

春風は窓の近くへと走り、窓を開け、そのまま飛び出る。

「ッッ！！」

その行動には二人とも驚いた。まさか、窓から出ていくとは思わなかったのだ。

春風はさも当然のように着地し、そのまま帰ろうとするが、

「まさか、窓から飛び出すとは思いませんでしたの」

「本当ね」

春風は突如目の前に現れた二人に足を止める。

「どうしても勝負しろ、と？」

「その通り！ 勝負よ、勝負！」

はぁ、とため息をつく。

「分かった。だが、お前は負ける事になるぞ。それでもいいなら、勝負を受けてやるがどうする？」

春風の言葉に美琴の背筋が凍る。

春風は自分が上で、美琴が下。この勝負は自分が勝つのが当たり前。そう言うようにさも当然に告げたのだ。涼しげに告げたのだ。背筋が凍りつかない訳がない。

だが、そこは流石の御坂美琴。

「ふん。負けるのはアンタよ！」

その言葉にニヤア、と笑う。

「悪い。もう、お前の負けだ」

「「っへ？」」

美琴と白井が間抜けに声を出す。

春風は『もう、お前の負けだ』と言った。

春風の能力を理解していない二人の頭が混乱するのは当たり前だ。

「そんじゃ」

春風がそう言った瞬間、春風の体が消える！

「「ッ！」」

二人は互いに顔を見合わせる。

「く、黒子。今の、何が起きたの？」

「わ、分かりませんわ。ただ、言えるのは。ただ者じゃないと言うことだけです。あの方は、何らかの巨大な能力の持ち主ですわ」  
美琴は目を見開く。

春風には何のそぶりもなかった。何かをしようともしていなかった。ただ、話していただけた。それなのに、行き成り体が消えた。それはつまり、それほどの実力を備えていると言うこと。

だが、美琴も白井も春風と言う名を聞いた事がなかった。ここから導き出される答えは、二つ。春風の力は超能力ではない別の能力と言うことか、学園都市そのものを欺くほどの実力だと言うこと！ゾー、と美琴と白井は血の気が引いて行くのを感じたのだった。

第三話 とある科学の遭遇 (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

## 第四話 とある事件の解決

「電気系統の故障、ね」

右目に眼帯を付けているお馴染みの少年、春風優人が呟く。

春風はたまたま通りかかった店、セブンスミスから人が一斉に出てきた事に『どうしたんだ?』と思い、足を止めて放送を聞いていた。

どうも、電気系統の故障がどうのこうのらしいが、本当にそうだろうか?

春風がどうでもいいかと踵を返そうとした瞬間にそれが起こる。ズドオン、とセブンスミストの一部が爆発したのだ。

そして、春風は見逃さなかった。皆が悲鳴を上げる中、その光景を見て笑みを浮かべながら、立ち去る怪しい人物を。

春風はその人物を尾行する。

人物の名は介旅初矢<sup>かいたひはつや</sup>。風紀委員を無能として、その無能な風紀委員<sup>ジャッジメン</sup>に恨みを持ち、風紀委員を標的とした虚空爆破事件<sup>ケラヒトン</sup>と言う名の事件を引き起こしている張本人だ。

しばらく尾行していると、介旅はとある路地裏へと消えていく。そして、尾行されている事に気づいていない介旅は本性を現す。

「くははははは。もうすぐだ。後少し数をこなせば、無能な風紀委員<sup>ジャッジメン</sup>も、あの不良共もまとめて吹き飛ば

「ほほう。なるほどなるほど。怪しいとは思っていたが、お前が犯人なんだな?」

突如聞こえた声に介旅は勢い良く振りかえった。

「あ、あれって……」

介旅を追い掛けてきた御坂美琴<sup>みさかみこと</sup>は路地裏に入らず、様子を窺っていた。

先程から、自分以外に介旅を追っているような少年が居たが、美琴はただ偶然に同じ方向へ言っているだけと思っていた。だが、介旅に続く様にして路地裏に入っていったことからして、偶然ではないだろう。

もしも、協力者なら一気に尻尾を出した所で出ていった方がいい。もしも違っていたとしても、自分に危害を加えないとは分からない。だからこそ、御坂は様子を窺うのだ。

そして、ついに少年は動いた。

介旅は春風を見ながら言う。

「な、何の事を言っているのか、僕にはさっぱり」

ほほう、と春風は目を細め、介旅の事を見ながら告げる。

「良い事を教えてやる。全員無傷だ」

春風の言葉に介旅が驚く。

春風は見ていたのだ。御坂と一緒に、上条当麻かみじょうとまがセブンスミストへ入っていくのを。

入って行くのを見ていたから、その場に居合わせなくとも確信を持って言える。

だが、介旅には分からない。何故、目の前の少年がそんなことを言えるのか。どうして、自分の最大出力で全員が無事なのかを！

だから、叫んでしまった。

「そんなバカな！！ 僕の最大出力だぞ！！」

「ほう。最大出力か」

言いながら、春風は眼帯を取る。

そして、一瞬で能力を発動させる。

春風以外には春風が眼帯を取っていない時の姿が映し出される。けれど、実際には春風の右目は地獄道の数字である『一』が描かれている。

そう。もう既に、介旅は春風の世界の中に居るのだ！

だが、そんな事を知らない介旅は口走った事を隠すのと同時に春風を油断させる為にとぼける。

「いやあゝ。外から見ても、凄い爆発だったんで、介旅は靴からスプーンを取り出し、

「中の人はとても助からないんじゃないかってえ!!」

そう叫びながらスプーンを投げる為手を振り上げた所で、それは起こる。

「な、なんだこれは!?!」

地面から飛び出した黒い物体が介旅の体に纏わりつき、身動きを取れなくしたのだ。

実際は黒い物体など幻にすぎない。だが、脳でそれを『存在していない』と認識できていなければ『存在している』事になる。

どのみち、分かったから簡単にどうする事も出来ないが、実際には『存在していない』と分かっているのと分かっているのとでは、恐怖心が比べ物にならないほど違うのも事実。

春風は分かっているからこそ、口を開く。

「俺が今、能力を操ったらどうなるだろうな?」

ゆっくりと。恐怖心を増幅させる様にハッキリと言った。

ゾー、と介旅はいつかの御坂達のように血の気が引いて行くのを感じる。

それに春風は追い打ちをかける。

「黒い物体が触れてる部分がボンッ! と爆発したりするかもな。

そうなったら、間違いなく血が溢れ出すだろうな。まあ、血が溢れ出す程度で済めばいいけどな。もしかしたら、死ぬかもな」

春風はそう言い捨てた。

戸惑いもなく。そう言ったのだ。つまり、春風はそれだけの事を成し得る能力を持つているのだ。いや、もしかしたら、そう言った事を日常のように繰り返す非日常で生きてきたんではないか?

そんなありもしない恐怖心が介旅を支配する。

それを見計らったように春風は言う。

「お前がやってきた事でどれだけの奴が恐怖を覚えただろうな？  
いつどこで爆発が起きるか分からない恐怖。そんな恐怖の中でも人  
を守るうとしている風紀委員ジャッジメントを本当に無能だと思えるか？」

「そ、それは……」

介旅は言葉を無くす。

当然だ。いつ爆発が起きるか分からない場所で人を守る為に行動  
する風紀委員ジャッジメントを誰が無能だと言えるだろうか？ 誰も言えるはずが  
ない。恐怖と闘っている者を無能だと言える者はいない。

そろそろだな。

春風は空を見上げ、口を開く。

「強さつてのは、何なんだろうな？ 能力の強さ？ 力の強さ？  
否。そんなの、強さじゃない。能力が強くても、力が強くても、そ  
の力を誰かを傷つける為に使う場合、その強さは弱さに変わる。だ  
が、能力が弱くても、力が弱かったとしても、誰かの為に戦う場合、  
その弱さは強さに変わる」

春風は視線を介旅に戻し、つまり、な。と言葉を紡ぐ。

「強さつてのは誰かを守る為に立ち向かうことなんだ。能力が弱か  
ろうが力が弱かろうが、誰かの為に戦う奴は強いんだよ。お前は誰  
かの為にその能力を使おうと考えた時があるか？」

介旅はあると言えなかった。介旅は能力で風紀委員ジャッジメントや不良に仕返  
しをすることしか考えていなかったのだから、言えるはずがない。

介旅は気付く。自分のやっていた事が、どんなに馬鹿げていたか  
を。

カラン、と介旅の手からスプーンが抜け落ち、地面に落ちる。

「分かったなら、いい。もう、こんな馬鹿な真似は止めることだ。  
そして、自分で名乗り出る。まずは、そこから始める」

春風は眼帯を付ける。

同時に能力が消える。

春風は座り込む介旅を置き去りにして、路地裏から抜け出す。

そして、

「いつまで隠れてる気だ？」

春風は隠れている御坂に言う。

「アンタ、いつから分かってたわけ？」

「お前が追って来てたのは最初っから気付いていたぞ。それと、白井だっけか？ お前も居るんだろ？」

春風の言葉に反応するように白井黒子しろいこくろこが姿を現す。

「貴方、凄いですわね」

「何が？」

春風は本当に分からずに言う。

白井は何を言っているのか？ それが分からない。

白井はそれを悟ったように口を開く。

「言葉だけで相手を正しき道に戻すなんて、簡単なようで難しいです。それを、ああも簡単にやってのけてしまうなんて、本当にすごいですわ」

「そう言うものか？」

「そう言うものです。っね、お姉様？」

御坂は一瞬、自分に振られた事に驚くが、一度頷いてから言う。

「確かにそうね。なかなか出来るような事じゃないわ」

「ふ〜ん。つま、どうでもいいか。俺は帰るからな」

春風はそう言い残し、人込みに紛れて消えていく。

「本当に、凄いですわ。あの殿方は」

「そうね。本当に、凄いわね」

春風の背を見ながら、二人は呟く。

その呟きは人込みの中に消えて行くのだった。

白井はこの後すぐに、もう一度驚く出来事に合う。

御坂達が居た場所だけ無事という、不可思議な能力の使い方の前に。

#### 第四話 とある事件の解決（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

## 第五話 とある始まりの前日

「しつこい奴らだな」

はるかぜ ゆうと 春風優人は走りながら右目の眼帯に手を伸ばし、呟く。

春風は六道輪廻を発動させようとしているのだ。

「ちょ、待て！ 春風！ お前、能力使おうとしてるのか!?!」

春風と一緒に走っている人物、かみじょうと じゅうま 上条当麻が叫ぶ。

上条当麻。右手に『イマジンプレイカー 幻想殺し』と言う特殊な能力を兼ね備えてい

る少年だ。その右手は異能の力ならば、神の軌跡システムですら打ち消す事が出来る。

「だって、当麻よ。あいつら、しつこすぎんだろ」

「ちょいちよい、と後ろを指差す。」

『待てや、コラア!』

『止めれつつってんだろうが!』

叫びながら、二人を追いかけているのは不良だ。

何故、二人が追いかけられているかと言うと、少し前への話になる。

二人は、明日から夏休みに入るので、尋常じゃないハイな気持ちになっちゃった事が全ての原因だ。

春風もやはり、学生。夏休みとは嬉しいもの。

夏休みの魔力って、凄いなだな。

まあ、そんなこんなで、ハイな気持ちになっちゃ二人は夏休みを祝ってパァ っと食いに行こうぜっ! や今日だけは腹は減っていないが一丁豪快に無駄食いしてやるぞーっ!! などと思い、ファミレスに言ったのだが、ファミレス内では一人の女子が不良に絡まれている、助けた結果が今の状況だったりするのだ。

「当麻。俺に任せろ」

「だからダメだったの! お前が能力使ったら、助けた意味が無くなっちゃうだろうが!」

そう。別に、絡まれていた女子を助けたわけではない。助けたのは不良の方だ。

「大丈夫だ。俺の能力は幻術を見せて、精神を破壊するだけだから」  
「だから、精神破壊したらダメだろうが！ あいつより立ち悪いぞ！」

「でも、こつもあれじゃーな」

「でもこつもあるか！ とりあえずダメだつての！」

「いや、まあ、もう、あれか。追いかけてきてないからいいか」

「そうなのか？」

「ああ。つつか、結構走つたみたいだな」

春風は足を止める。それに釣られるようにして、上条も足を止める。

二人はいつの間にか都市部を離れて、大きな川に出ていた。大きな川には大きな鉄橋が架かっている。長さにしておおそ一五〇メートル。車はない。ライトアップもされていない無骨な鉄橋は、夜の海のような不気味な暗闇に塗り潰されている。

そんな鉄橋に二人は立っている。

二人は後ろを振り返る。

不良は追いかけてきていない。

「やつと、撒いたのか」

上条はポツリ、と呟く。

その呟きは闇へと消えていき、静寂が訪れる。

だが、その静寂も長くは続かなかつた。

「つたく、何やってんのよアンタ達。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですか？」

そう言いながら、本来ならば不良が追いかけてくるであろう、二人が走ってきた五メートルほど先から、闇を斬り裂く様に女子が歩いてきたからだ。

少女は灰色のブリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターと言う格好の、何の変哲もない中学生ぐらいの女の子だ。

彼女がファミレスで絡まれていた少女であり、学園都市でも七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>の第三位で超電磁砲<sup>レールガン</sup>の異名を持つ少女、御坂美琴<sup>みさかみ</sup>だ。

春風と上条は溜息をつく。

「……つか、俺らがなにをしたって言うんだよう」

「ホント、俺らがなにをしたんだか」

「私は、自分より強い『人間』が存在するのが許せないの。それだけあれば理由は十分」

春風は美琴の言葉に呆れる。

何だ、こいつは。天下統一でもしたいのか？ とマジで考えてしまっただけに呆れている。

「けどアンタ達もバカにしてるわよね。私は超能力者<sup>レベル5</sup>なのよ？ 何の力もない無能力者相手に気張ると思ってるの？ 弱者の料理法ぐらい覚えてるわよ」

上条が再び溜息を吐く。

「あの、それな？ お前が三二万八五七一分の一の才能の持ち主なのは良く分かってるけどさ、長生きしたかったら人を見下すような言い方はやめた方がいいぞ、ホント」

「うっさい。血管に直接クスリを打って耳の穴から脳直で電極ぶっ刺して、そんな変人じみた事してスプーンの一つも曲げられないじゃ、ソイツは才能不足って呼ぶしかないじゃない」

才能に不足もくそもあるか。

春風は心の中で呟く。

だが、美琴が心の中を読むはずもないので、そんな心のつぶやきは何の意味もなさない。

「つつかよお。スプーン曲げるならペンチ使えば良いし火が欲しければ一〇〇円でライター買えば良い。テレパシーなんてなくてもケータイあるだろ。俺は必要ないと思うんだよなあ。春風はどうだ？」  
「必要、な。別に、どうでもいいだろう、そんなの。ようは、使うヤツ次第だからな。まあ、超能力なんてなくても困りはしないだろ

うけど」

「ああ。困るわけない。外には超能力なんてなくても、普通に生活してるからな」

と、これは学園都市の身体検査で機械センサーどもに『無能力つかえないもの』烙印を押された二人の言葉なのだが、その言葉には説得力があった。

確かに、超能力があれば便利だ。だが、別になくても困りはしないだろう。元々、超能力なんてものは使えないのだから。

まあ、逆に、超能力がある事によって困る奴は出るだろうけどな。春風がそんな事を考えてる中で、上条が口を開いた。

「大体、どいつもこいつもおかしいんだよ。超能力なんて副産物で税に入りやがって。俺達の目的ってな、その先にあるもんじゃなかつたっけか？」

対して、美琴は唇の端を歪めて、

「はあ？ …… ああアレね。何だったかしら、確か『人間に神様の計算はできない。ならばまずは人間を越えた体を手にしなければ神様の答えには辿り着けない』だっけ？」

少女は鼻で笑った。

「は、笑わせるわね。一体何が『神様の頭脳』なんだか。ねえ知ってる？ 解析された私のDNAマップを元に軍用の妹達シスターズが開発されるって話。どうやら、目的よりも美味しい副産物だったみたいじゃない？」

と、そこまでしゃべって、唐突に美琴の口がピタリと止まる。

音もなく、空気の質が変わっていく感覚。

「……ていうか。まったく強者の台詞よね」「は？」「

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手にいれ、そこに辿り着くための辛さをまるで分かってない マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ。アンタの言葉」

そんな美琴の言葉に、春風が口を開く。

「お前のも不敵で残酷な台詞だぞ」

は？ と美琴が目を見開く。

「それ、どういうことよ？」

美琴は少しいらだつたように訊く。

だが、春風は気にも留めずに肩をすくめ、めんどくさそうに言う。  
「だって、そうだろ？ 確かに、努力次第では低能力者から強能力者<sup>レベル1</sup>ぐらいにまではなるかもしれない。だが、低能力者<sup>レベル1</sup>から超能力者<sup>レベル5</sup>になれるんなら、それは、元から才能<sup>ちから</sup>があるって事だろ？ 中には努力をどれだけでも、レベルが上がらない奴もいるんじゃないか？ なのに、『生まれ持った才能だけで力を手に入れ、そこに辿り着くための辛さをまるで分かってない』っておかしくないか？ お前こそ、そう言った奴らの気持ち、分かってないんじゃないのか？ 他の奴からしたら、結局、お前も才能に恵まれた一人でしかないと思うぞ」

「ッ！」

春風の言葉が美琴へと突き刺さる。

だが、春風はそんな事は分かっている為、元より、鈍感な為、追い打ちをかけてしまう。

「だから、才能どうのこうの言うの止めた方がいいぞ。才能のある奴がない奴に『才能なんて関係ない。努力が大事なんだ』なんて話をしてみる。ウザいと思われるだけだから。それと、な。見下すのも止めた方がいいぞ。能力のレベルが上がらない事を気にしてる奴もいるんだからさ」

「う、うううう」

美琴が唸り始める。普段は勝気で活発であつても、寂しがり屋な所もあり、やさしい人物だ。そこまで言われて、何も感じないはずがない。

どんどんと美琴が涙目になって行く。

それでもなお、その事に春風は気付かず続けようと口を開こうとするが、

「お、おい。その辺にしとけて」

上条にそう言われたので、言うのを止める。

そして、そこでようやく気付く。美琴が唸っている事に。

「っへ？ あれ？ もしかして俺、言い過ぎた、か？」

春風は上条に尋ねる。

「もしかしてじゃなくて、実際に言い過ぎだつて。マシンガンのように次から次へと言葉を出しやがって」

春風は俯いている美琴を見る。

流石に、可哀想なことしたな。

春風はそう思い、美琴の傍まで行き、肩に手を置く。

「わ、悪い。言い過ぎた」

謝るが、美琴は聞いちゃいなかった。

「う、う……」

「う？ 何だ？」

「うるっさー……いッ……」

美琴は勢いよく顔を上げ、そう叫ぶ。

春風は突然の事に驚き、数歩離れる。

そんな春風にビシっ、と人差し指突きつけ、美琴は言う。

「勝負よ！ 勝負！ 勝負しなさい！」

「なんでそうなるんだよ！？」

「ム力つくからに決まってるでしょ！」

何て理由だ。

「さー！ 来なさい！ どこからでもいいわ！ ボコボコにしてあげるから！」

「当麻、助けてくれよ」

春風は上条に振り向き、数歩移動しながら助けを求める。

「わ、悪い。俺は、帰らせてもらっ」

上条は危険を察知してからか、そう言うが、美琴は上条の事も逃がす気はないようだ。

「アンタも帰ろうとするな！」

そう叫ぶなり、御坂の髪から角のように青白い火花が散る。

瞬間、槍の如く一直線に雷が上条に襲い掛かる！

「ぬわっ！」

上条は咄嗟に右手を前に突き出す。

電撃の槍は、上条の右手に当たるなり、打ち消される。

「ちよ、テメエ、行き成り何しやがる！」

「うるっさい！ 勝負しろって言ってんのよ！ アンタ達、本気で来なさい！」

ビシッ、と再び二人に人差し指を突き付ける。

はぁ、と上条は溜息をつき、今日一日、七月十九日の終わりをこ  
う締めくくった。

たった一言で、本当に世界の全てに嘆くように。

「オマエ、本当についてねーよ。」

そして、春風もまた、自らの七月十九日をことう締めくくる。

「後悔するなよな」

瞬間、鉄橋に天から巨大な電撃が滝のように流れ落ち、学園都市  
に巨大な爆音が響き渡った。

## 第五話 とある始まりの前日（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。

感想など待ってます。

それと『願いと言う名の想い』の方も読んでくださると、助かります。読む時間がある方は、読んでみてください。

## 都市伝説 幻想御手へレベルアップ

七月十九日。その日の夕方。

「見つからないな。幻想御手。レベルアップ。やっぱり、噂は噂なのかね」

一人の少女はパソコンに向かいながら呟き、マウスから手を離すと代わりに音楽プレーヤーを手に取る。

「なんか、新曲でも入れとくか」

そう思った時だった。

隠しリンクを見つけたのは。

少女は左クリックする。

すると、画面には『TITLE:Level Upper

ARTIST:UNKNOWN』と出てくる。

「これって……」

――

七月十九日の夜1:30分。正確に言えば、七月二十の午前1:30分。

都市は闇に吞まれている時間帯。

とある学生寮のとある部屋。

一人の少年は椅子にすわり、パソコンと向かい合っていた。

右目に眼帯を付けた少年、はるかぜ春風優人だ。

春風はコーヒが入ったカップを手に取り、一口飲んでからカップを置き、何だかなあ的に呟く。

「幻想御手ね」

レベルアップ幻想御手。都市伝説として扱われている品物だ。どうも、能力のレベルを簡単に引き上げる事が可能だと言う。

何故、春風がそんな品物を調べてるかと言うと、最初はただ単の

気まぐれだった。春風は寝ようにも眠れないのでパソコンで、気まぐれにパソコンを立ち上げ、気まぐれに都市伝説を調べ、たまたま目に入った幻想御手レベルアップに何となく興味を持ったと言う、本当に気まぐれが重なっただけなのだ。

だが、春風はその後、調べていくうちに思った事があった。大丈夫なのだろうか？ と。

春風がそう思うのも無理はない。能力を簡単に引き上げる事が出来るアイテム。だが、それは、無理矢理に能力を引き出すと言うことじゃないのか？

そう考えたからこそ、大丈夫なのだろうか？ と思うのだ。

もしも、筋肉を一気に作り上げるアイテムがあったら。もしも、背を一気に高くするアイテムがあったら。もしも、一瞬で痩せられるアイテムがあったら。もしも、一瞬で足が速くなるアイテムがあったら。そんなアイテムが本当にあったとして、使用者は平気なのだろうか？

平気なはずがない。時間をかけていないのだから、使用者の土台が耐えられるはずない。何でもそうだ。時間をかけて作るからこそ頑丈になるのだ。速さを重視して、耐久性を考えずに作ったものが丈夫なはずがない。

仮に、土台が耐えられたとしても、何が起こるか分かったものじゃない。何度も何度も見直したものには欠点が少ない。だが、速く作れ、尚且つ耐久性があるうとも、何処かに欠点があるはずだ。見直したものに比べ、多くの欠点がある。

だからこそ、春風は調べ始めていたのだ。幻想御手レベルアップと言う、怪しい品物を。

今じゃ、興味や気まぐれは全て不安、心配などの感情に変化していた。

「せめて、どういう原理で能力を引き上げるか分かればな」  
原作知識を消されている春風が呟く。

だが、分かったからと言ってどうするんだ？

春風はそう思った。

火のない所に煙は立たないと言う。

なら、この幻想御手レベルアップと言うのも何かしらの根拠があったからこそ、都市伝説となつたのではないだろうか。

そこまで考えた所で、ある事に気づく。

「本当に存在していたとして、何故、都市伝説で止まっているんだ？」

そう。そこだ。本当に存在しているとすれば、都市伝説だけで止まるだろうか？ 否。止まるはずがない。そんな便利なものがあるならば、大体の者が使うはずだ。そして、もっと多くの者に広まるはずだ。

なのに、どうだ。幻想御手レベルアップは都市伝説の中で止まっているではないか。なら、実際には幻想御手レベルアップなんて存在していないんじゃないだろうか。

春風はしばらく考え、また違う考えを導き出す。

「もしかして、存在はしているが、特別な入手の仕方があるのか？」  
なら、存在していたとしても都市伝説だけで止まっている事に説明がつく。

そして、今度はめんどくさい考えに行きつく。

「もしも、不良共がこれを持っていたとして、欲しい奴に高値で売ってやると言っていたら？」

不良共が素直に言った通りの金を持ってきただけで、素直に渡すだろうか？ いや、渡す可能性は低い。

「誰も巻き込まれてなければいいけどな」

春風が呟くと同時に、睡魔が襲ってくる。

「ふぁ。そろそろ、寝るか」

春風はとりあえず、今は寝る事にしたのだった。

都市伝説 幻想御手へレベルアップ〜（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。  
感想などがあれば待っています。

第六話 科学と魔術が交差する日 科学SIDE (初)

七月二十日。

「何故に、俺はこんなかつたるい事をやっているのだろうか？」

春風優人は路地裏から通常の道に戻り、呟く。

春風は幻想御手の取引が行われていないか、見て回っているのだ。

「つつか、幻想御手ってマジもんだったんだな」

結局、幻想御手は存在していたのだ。しかも、結構で回ってるらしく、既に春風は5、6人潰してきたところだ。

「あ、幻想御手がどういふものかを聞いとけばよかったな」

春風は潰しただけで、それ以外は特に何もしていない。風紀委員に報告すると言うこともしていない。

まあ、風紀委員に報告どうのこうのはいいとして、幻想御手がどういふものなのか聞かなかったのはミスったな。

はあ、と春風は溜息を吐く。

今日はもう、終わりにしようとしていた所だ。これ以上やろうとはハツキリ言っ、思わない。幸い、思っていたような取引現場はなかった。なら、これ以上調べる必要はないだろう。

「まあ、今日は一日暇だからこれ以上調べてもいいんだが」

言葉通り、春風は今日一日暇だったりする。いつもだったら、上条当麻とぶらぶらしたり、まあ、とりあえず上条と何かをやるのだが、あいにくその上条は補習らしく、一緒に何かをやる事が出来ないのだ。

春風は無能力者なのに、何故ここに居るかと言うと、まあ、色々あるのだ。ホントに色々。

「まあ、とりあえず。少し、休もう」

春風は道端に座り込む。

近くには多くの建物がある。何処かの建物に入ればいいのだろうが、今の春風にとってはそれ自体めんどくさいことのようにだ。

通行人がなにごとかと春風を見る。だが、それも一瞬。特に気を止める者はいない。

なんて、薄情な。

春風は通行人を眺めるのを止め、地面に視線をやる。

「あづい。死ぬ。マジで死ぬ。それに、眠いし」

春風は幻想御手レベルアップを調べた後、寝たのだが、クーラーが使えないせいで寝付けなかったのだ。

何処かの誰かさんが雷を落としたせいだな。

春風の言う誰かさんとは、御坂美琴みさか みことの事だ。

「つつか、マジであづい。うううう。あづい」

春風が唸っていると、

「あの〜。どうかしましたか？」

不意に声が掛けられた。

春風は顔を上げる。

顔を上げた春風の視界に映し出されるのは二人の少女だ。

一人はセミロングの黒髪が特徴の女子だ。左側に花の髪飾りを付けている。声をかけてきたのはこの女子だ。

もう一人は花をかたどった髪飾りを大量に付けている。なんか、困った顔をしてこつちを見ているが、どうも、春風が倒れている事に戸惑っているらしい。

「……………」

「あの〜。本当にどうかしたんですか？」

再度セミロングの女子が問う。

「……………」

だが、当の本人である春風は熱さのあまり、意識が何処かにすっ飛んでいるようだ。

まるで、屍のように返事がない。

そんな春風を不思議に思い、セミロングの女子が覗き込む。

そして、

「あ—————ッ!!」

行き成り叫び出した。

「ッー!!」

春風も突然の出来事に驚くのだが、セミロングの女子はお構いなしにビシッ、と人差し指を突き付ける。

「貴方、この間の銀行強盗の時に助けてくれた人ですよね!？」

銀行強盗……そんな事もあったな。

思い出すが、今の春風にとってはどうでもいいことだ。

「あづい。飲み物、ないか？」

近くにコンビニやら自販機やらがあるのだから、自分で買いに行けばいいのにも関わらず、春風は尋ねる。

「持つてはいませんが……あの喫茶店に行きますか？」

セミロングの女子が近くの喫茶店を指差す。

と、何故か、行き成りセミロングが走り出し、喫茶店のガラスに張り付いた。

「……あれは、何をしてるんだ？」

頭が花畑の女子に尋ねる。

「ハッ！」

頭が花畑の女子が我に返る。

と言うか、いつから意識が飛んでいたのだろうか？

「あ、本当だ。銀行強盗の時の」

本当に、何時から意識が飛んでいたのだろうか。

春風は考えるが、それよりも今は気になる事がある。

「あいつは、何をやっているんだ？」

春風が喫茶店のガラスに張り付いているセミロングの女子を指差す。

「ん〜。ああ。御坂さん達が居るからですね」

頭が花畑の女子の言葉に春風は反応する。

「みさ、か？」

「はい。超能力者<sup>レベル5</sup>、第三位の御坂美琴さんです」

「……俺は帰る」

春風は立ち上がり、帰ろうとする。

「ちよ、待つてください！」

何故か、頭が花畑の女子が春風の裾すそを掴んだ。

「何だ？」

「この間のお礼がしたいです」

「別にお礼なんていいから、俺を自由にさせてくれ！」

「ダメです！」

どうやら、頭が花畑の女子は手を離す気がないらしい。

それでも、春風も必死に抵抗する。

昨日の今日で御坂には会いたくないからだ。

だが、本気で頭が花畑の女子は手を離す気がないらしく、どんどんと握る力を強くしていく。

男と女だ。春風が振り払おうと思えばいつでも振り払えるが、そこまでするのもかわいそうな気がして出来ないでいる。

「あー！ もう！ 分かった！ 分かったから！ 行くから！」

春風はどうにでもなれ、と思いつながら叫ぶ。

「本当ですか!?!」

頭が花畑の女子はやっと手を離す。

本当もくそもないだろうが。離さなかったんだから。そう思うが、口には出さない。

「それじゃ、行きますよ」

言いながら、再び春風の裾を掴む。

多分、逃げだすと思っているのだろう。

実際、春風は逃げだそうとしていた。

春風はぐいぐいと少しばかり強引に、頭が花畑の女子に喫茶店に連れて行かれるのだった。

第六話 科学と魔術が交差する日 科学SIDE (初) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございました。  
感想などがあれば待ってます。

第六話 科学と魔術が交差する日 科学SIDE (終) (前書き)

更新が遅れてしまいましたが、楽しく読んでもらえると幸いです。

第六話 科学と魔術が交差する日 科学SIDE (終)

七月二十日。

「何でアンタが来んのよ！」

喫茶店に入り、セミロングの黒髪が特徴な女子と頭にたくさんの花の髪飾りをしている女子に知り合いの所まで連れて行かれた春風に飛んできた最初の言葉がこれだったりする。

「隣いいですか？」

「……」

春風がめんどくさがっている傍らで、セミロングの女子は御坂美琴と白井黒子と向かい合うように座っている女性に訊ねる。

女性は整った顔立ちをしていて目が行きそうだが、それよりも目に行くのは目の下にあるクマだ。誰が考えても、寝不足気味だろう。

「ああ。構わないよ」

女性がセミロングの女子に言う。

「それじゃ、遠慮なく」

セミロングの女子は女性の隣に座る。

とりあえず、雷女子の言葉を無視しよう。つうか、これいいかも。いや、電撃女子の方がいいか？ うん。その時の気分で呼び方変えればいいか？

そんなことを考えながら、春風はセミロングヘアの隣に座り、それに続く様に美琴の隣に頭がお花畑の女子が座る。

春風は近くに居た定員を呼びとめる。

「すみません。カルピスソーダください。それと、チョコレートパフェを」

「あ、私はグレープジュースとプリンをください」

手を挙げ、強調するようにセミロングの女子が言う。

「私は、オレンジジュースで」

頭がお花畑の女子が言う。

「かしこまりました。少々、お待ちください」

店員はそう言い残し、この場を離れる。

「ちよつと、なに無視してんのよ!」

店員が離れていったためか、再び美琴が叫ぶ。

「つで、白井。行き成りで悪いが、この方と言うより、この三人の自己紹介してくんないか?」

春風は目の下にクマのある女性、セミロングの女子、頭にお花畑がある女子を順に見る。

「そうですね。初春達はお礼を言いたそうですし」

「こほん、と咳払いをしてから、手を目の下にクマがある女性に向ける。」

「きやま はのみ 大脳生理学者の木山春生先生ですわ」

手をそのままセミロングの女子に向ける。

「さくてん こい こちらは、佐天涙子さんですの」

そして、流れるようにして次は頭がお花畑の女子に向ける。

「ういはる かたり つで、こつちは初春飾利ですの」

「ふ〜ん」

自分から自己紹介をしてくれと頼んだのにも関わらず、春風は感心なさそうに返事を返し、尚且ついつの間にか来ていたチョコレートパフェを頼張る。

「うまいうまい」

今度はカルピスソーダを一気に半分ほど飲みほし、

「ふ〜。生き返る〜」

ぷはー、と息を吐き、再びチョコレートパフェを頼張る。

「うまかった」

春風は立ち上がり、

「それじゃ」

片手をあげて立ち去ろうとするが、

「ちよつと、待ってくれないかしら? 人の事を無視して、そのまま帰ろうとしないでくれる? さっきまでは自己紹介してたから黙

つてたけどさ〜」

「……なんだよ、ライトニングガール電撃女子」

「ら、らいと、にんぐ、がー、る？」

美琴は間抜けに聞き返す。

春風がなにを言っているのか分からないのだ。

「お前の新しい呼び方だが？ サンダーガール雷女子つてもあるぞ」

春風は一語一語ハッキリと聞こえるように言い放つ。

それに対して美琴は身体を震わせる。

「だ、誰が！ ライトニングガール電撃女子だあああああッ！！」

「おっと、店ん中で能力使うなよ？」

春風は美琴が能力を使うよりも早くに告げる。

「ッ！！」

春風の言葉に美琴は止まる。

ここは、店の中。そこで能力を使ったら、色々なものが破損する。へたすれば怪我人も出る。それは誰でも分かる事。だからこそ、美琴は止まったのだ。

「そんじゃ、俺は行くぞ」

「だー！ だからって行くこととするな！」

「ええ〜」

「あからさまに嫌そうな顔をするな！」

春風はとりあえず座り直し、

「そっいや、木山さんは、何故ここに？」

疑問に思っていた事を口に出す。

「ん？ ああ。ちよっと、レベルアップ幻想御手の件でね」

「ふ〜ん。ってことは、ジャックシメント風紀委員はレベルアップ幻想御手について調べてるのか？」

春風は白井の方へ視線を移す。

「ええ。そうですの」

「あ、それなら……」

佐天はそう言いながら何かを取り出そうとする。

それを春風は見逃さなかった。

「黒子が言うには、幻想御手レベルアップの所有者を保護するんだって」  
少し落ち着きを取り戻したのか、ストローで飲み物を飲んでいた美琴が話に入ってくる。

「どうしてですか？」

初春は頭の上に疑問符を浮かべ、訊ねる。

「まだ、調査中ですので、はっきりとした事は言えませんが、使用者に副作用が出る可能性があります。それに、容易に犯罪に走る傾向が見受けられています」

佐天は何かを手に持ったまま止まっている。

「どうかしました、佐天さん？」

佐天は「別に」と言いながら咄嗟に持っていたものを隠す。  
隠す時にコップに手が当たってしまい、揺れる。

落ちるか落ちないかの所で春風はコップに手を伸ばし、受け止める。

「危ないぞ、佐天」

「あ、すみません」

それよりも、と春風が白井に向き直る。

「だったら、路地裏に行ってみな。所有者……いや、使用者がいっぱい居るからよ」

「何でそんな事が分かるんですの？」

「何でって、佐天達と合う前は使用者を潰して回ってたからな。あ、つっても、命に別条はないぞ」

「潰して回って、た？」

白井は目をぱちくりさせる。

「ああ。潰して回ってた」

「どうして、潰して回ってたんですか？」

不意に、今まで黙っていた佐天が口を開いた。

「幻想御手レベルアップなんてインチキなもので能力を上げるからですか？」

ああ、そう言う事か。

春風は一人で納得した。

さつき佐天が取り出そうとしていたもの。そして今、どうして潰して回ってきたのかを聞くことから、一つの答えが導き出されたのだ。

だが、春風はここでは訊かない方がいい、と思い、質問の答えを素直に返しておく。

「いんや。違う。別に俺は幻想御手レベルアップを使うこと自体は悪い事だとは思わない。能力を使って人を傷つけるような輩だから潰した、ただそれだけだ」

「……」

佐天はしばらくの間俯き、顔を上げたかと思うと明るく言い放った。

「そ、そうですね。あたし、何聞いてるんだろ」

春風はそんな佐天の腕を掴み、

「ちよつと、来い」

「っへ？」

「悪い。ちよつとこいつと話あるから、勝手に本題に戻って話してくれ」

春風は佐天を少しばかり強引に外に連れ出した。

今、二人は喫茶店から見えない位置まで来ていた。

「は、話って何ですか？」

佐天は戸惑う。

無理もない。いきなり腕を掴まれ、強引に外に連れ出されたのだから。

春風は特に気にする様子もなく告げる。

「お前、幻想御手レベルアップ持ってるだろ？」

「ッ！！ い、一体何を……」

「誤魔化さなくていいって。さつきも言ったように、俺は別に持つ

てるからどうとか、使ったからどうとか、そんなことは言わない。別に持つてるなら持つてる、使ったなら使った、そんだけの事ではない」

ただ、と春風は佐天の目を真剣に見据え、言葉を紡ぐ。

「なんか、嫌な予感がするんだ。そのアイテム。だから、何かあったら俺に連絡しろ。すぐに駆けつける。もしくは、駆けつけなかったとしても、解決してやる。俺が全部。お前の日常を壊させやしない。いや、違う。お前達の日常は壊させやしない」

「なん、で」

佐天は不思議そうに訊ねる。

「何で、そこまで、してくれるんですか？ この間の銀行強盗の事があったとしても、今日、始めて知り合ったようなものじゃないですか。何で始めて知り合った人にそこまで出来るんですか？」

「何で、か。俺も、助けられたから、としか言いようがないかな」

「助けられた、ですか？」

ああ、と頷く。

「俺、色々あつてずっと孤独だったんだ。だが、ある奴と出会って、孤独から抜け出せた。だから、俺は、決めたんだ。俺みたいに助けを必要としてる奴が居たら、出来るだけ助けようってな。世界中の奴を助けるなんて真似、俺にはできない。けど、目の前で助けを求めている奴は助けられるからな」

そう言つて、春風はケータイを取り出す。

「ほら、交換するぞ」

「……ありがとうございます」

佐天はそう言いながらケータイを取り出す。

「礼なんていいから。まだ助けたわけじゃないし。それと、そんな他人行儀じゃなくていいぞ……よし。終了」

二人は交換し終わると、ケータイをしまう。

「そんじゃ、行こうぜ。あまり待たせるのもあれだしな」

「あ、はい」

佐天が歩き出した時、あるものが落ちた。

春風はそれを拾い、佐天へ手渡す。

「ほら。お守りが落ちたぞ」

「すみません」

「いいって。それよりも、そのお守り普段から持つてる物なのか？」

普通、一定の時しかお守りなんてものを持たない。春風に至っては、お守りなんてもの自体持っていないが。

「ええ。そうなんです」

お守りの紐に指を通して持ち上げ、

「母に、貰ったんです。お守りなんて、科学的根拠何もないのに」

佐天は懐かしむようにお守りを見る。

「姉ちゃん、超能力者になんの！？ かけー」

「へっへーん」

「涙子。お母さん、本当は今でも反対なんだからね」

「はっはっはは。母さんは心配性だからな」

「頭の中弄られるのなんて、怖いわ」

「全然そんなことないって」

「はい、お守り」

「うわー。非科学的」

「何かあったら、すぐ戻ってきていいんだからね。貴方の身が、何よりも一番大事なんだから」

「ホント、迷信深いんです。私のお母さん」

佐天は両手でお守りを包み、

「こんなもんで身が守れるわけじゃないですよね。バリアじゃないんですから」

「ふん。優しい母親なんだな」

「分かっています。でも、その期待が重い時もあるんですよ」

佐天は春風から視線をずらし、斜め下の地面を見る。

「いつまでたつても、無能力者（レベル0）のままだし」

「……だったら、そんなもん捨てちまえば？」

「え？」

佐天はありえない言葉を聞いたかのように驚く。

それはそうだ。期待なんて捨てちまえ、何て言われるとは思って  
いなかったのだから。

「期待なんて、重いだけだ。いつつも荷物を持っているかのように  
な。だったらいつその事、捨てた方が楽だろ？ そうした方が、能  
力も開花するかもしんねーぞ。ほら、リフレッシュだ。リフラッ  
シ  
ユ」

「ぶ。それを言うなら、リフレッシュですよ」

「……マジ？」

春風は真顔で聞き返す。

それによって、佐天は笑いだす。

「そうですよ。リフレッシュです」

あはははは、と楽しそうに笑いだす。

少し経った所で、春風は口を開く。

「どうだ？ スッキリしただろ。肩の荷も少しは下りたんじゃない  
か？」

「えっ？」

「とりあえず、悩んだり、気が滅入りそうになったら、誰かと笑い  
あつとけ。そんな時だけは、忘れられるからさ。肩の荷が下りる時  
もあるしな」

「……優しいんですね、春風さんって」

「いや、だから、優人でいいって。春風って名字呼びにくいだろう  
し。それよりも、今度こそ戻ろうぜ。結構時間経っちまったからな」  
「はい」

二人は喫茶店へ戻るのだった。

「あ、もう、木山さんは帰っちまったのか」

二人が戻ると、既に木山先生は帰ったあとで、三人も外へ出てい

た。

「もう、遅いですわよ」

白井が二人に言う。

「悪い悪い。話しこんじまってさ」

春風は腕時計を見て、

「俺、そろそろ帰るわ」

そう言っつて帰ろうとする、が。

「あ、そうだ。会計済ませておいてくれたんだろ？ いくらだ？」

春風は自分が食べたものと飲み物の事を思いだした。

「いいですわよ。あれぐらい」

「いや、年下に奢らせるわけにはいかないだろ？」

「年下と言っつても、わたくし達と」

「ストップ。そんな名門校がどうのこうのはどうでもいい事だ。っ

で、いくらだ？」

「520円ですわ」

「ん。ほら。んじゃ、今度こそ俺は帰るからな」

春風は片手を振りながらこの場を去った。

その後、この場では美琴が佐天に何の話をしていたのかを聞くが、春風は当然知ることにはできない。

その後の春風は寮にまっすぐ帰るのではなく、牛井屋に行くのだった。そして、そこで補習帰りの上条当麻かみじょうまに出会ったのだった。

本日、科学と魔術が交差する

そして、科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

第六話 科学と魔術が交差する日 科学SIDE (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

第七話 科学と魔術が交差する日 魔術SIDE (初)

七月二〇日。

「……いや、こんなモンだつてなア分かってんだけど、分かってんだけどさあ」

昨日、御坂美琴が雷を落とし、そのせいで電化製品の八割が殺られた。それはエアコンはもちろん、冷蔵庫も例外ではない。当然冷蔵庫が殺られていたら、その中身も殺られているわけだ。

上条当麻はしょうがなく非常食のカップやきそばを食べようとしたのだが、流し台に？を全部ぶちまけ、仕方がないから外食しようとサイフを探している内にキャッシュカードを踏み碎いてしまう。最終手段で隣人の春風優人と一緒に外食に行き、奢ってもらおうとしたが、何故か今日に限って扉に「当分帰らない」とメモが貼ってあったり。しかもふて寝の二度寝の泣き寝入りを電話で叩き起こされたと思ったら「上条ちゃん、バカだから補習ですー」との担任からの連絡網。

「……分かってんだよ。分かってんだけど独り言にしねーと消火できねーんだよう」

当たるも八卦当たらぬも八卦。占いは当たる場合も当たらない場合もあると言う。だが、上条当麻の場合は必ず当たらない。必ず外れる。それ程までに上条当麻と言う少年は、運に見放されているのだ。

そう。上条当麻は不幸なのだ。

と言つても、どこぞの不幸少年みたいに借金を抱えているわけではないが。

上条当麻が春風から言われた言葉を思い出す。

「大丈夫だ。本当に不幸なら、両手両足。目耳口。その他もろもろは付いていないって」

それはもう、人間ではないような気がするが、春風の言っている

事は間違っではないなかった。本当に不幸なら、もつと酷い目にあっているはずだから。

上条は春風の言葉を思いだしたおかげで、少し気を取り戻した。

「そうですね。上条さんはそこまで不幸じゃ」

上条は明日への一步の為に立ち上がる。

そして、ボキッ、と何かを踏ん付けてしまう。

「……」

上条は恐る恐る足元を見る。

そこには、春風から借りていたDVDがあった。壊れた状態で。

「優人。やっぱり、言わせてもらう。不幸だああああああああ

ああああああああッ！！」

今日も上条当麻は色んな意味で絶好調だった。

「とりあえず、カードは通帳さえあれば再発行できるし、朝飯はコンビニで買うとして……いい天気だし、布団でも干すかなー」

気を取り直した上条はベランダに？がる網戸を開ける。補習が終わって帰ってくる頃にはふかふかになっている事だろう。

と。七階のベランダ、そこから二メートルもない先に隣のビルが迫っていた。

「……」

ここでまた、上条は春風の言っていた事を思いだす。

『空は太陽が出ていて、快晴だ。だが、俺の中は土砂降りだ』

「優人。俺も今そんな感じだ」

はあ、とため息をついてから、ベッドの上の布団を両手で抱える。すると、足の裏がぐにゅっと柔らかいモノを踏んづけた。見れば終わった冷蔵庫に突っ込んでおいたラップでくるんだ焼きそばパンだった。

「……タ立の心配は」上条は隣人のベランダを見る。すると、自分

と同じように布団を干していた。

「ない、か」

春風はあれでも、運がいい方だ。自分がいくら運に見放されてると言っても、そこそこ運のいい春風が干してあるのだ。降ったとしても、パラパラと降る程度だろう。

上条は勝手に決めつけ、布団を干そうとして、そこで初めて気付いた。

すでに白い布団が干してあることに。

「？」

上条の頭に疑問符が浮かぶ。

「いやいや。この部屋に住んでるのは俺だけだ。俺が干していない以上、ここに布団が干してある事はない」

そう思い、良く良く見ると、それは布団などではなかった。

干してあったのは白い服を着た女の子だった。

「はあ!？」

上条は両手で抱えていた布団を落とす。

無理もない。目の前に女の子が干してあるのだから。

歳は……十四か、十五か。上条より一つ二つ年下と言う感じ。外国人らしく、肌は純白で髪の毛も白髪。じゃなくて銀髪だろう。かなり長いらしく、逆さになった頭を完全に覆い隠して顔が見えないぐらいだった。おそらく腰ぐらいまで伸びてるんじゃないだろうか？

服装は教会のシスターが着てそうなアレだ。

「一体これは何ですか？ ドッキリ企画か何かですか？」

と、そんな事を考えていると、

「オ、

女の子の、可愛らしく、ちょっと乾いた唇がゆつくりと動いた。

と言うか、考え事をしている間に顔を上げていたのか。

女の子は割と可愛らしい顔をしている。白い肌に緑色の瞳が海外スキルゼロの上条にとっては新鮮に映る。何だか、お人形みたいな

感じた。

普通なら、上条は戸惑うのだろう。『外国人』なのだから。だが、上条は今日二度目となる、春風の言葉を思い出す事によって、戸惑わずに済んでいる。

『目を見て話せば、大抵は通じる。外国人でも。正しく伝わっているかは、分からないが』

(そうですね。外国人だろうがなんだろうが、相手は人間。ベランダの手すりに引っかけたって人間。目を見て話せば伝わるんだ) そう思い、上条は話しかける。

「どうしたんでせうか？」

おかしな言葉遣いになったが、突っ込む者は誰もいない。

「おなかへった」

どうやら、この女の子は日本語が話せるらしい。

日本語だが、上条は女の子の言葉に思考が止まってしまっ

行き成りあった相手に『おなかへった』と言っつて、どうなんだろうか？ 見ず知らずの相手にいきなり食べ物要求するって……

この子は、誘拐されないだろうか？

そんな事を考えていると、

「おなかへった」

再び女の子は告げた。

「……」

「おなかへった」

「……」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

「……」

そう言えば、布団を抱えた時、焼きそばパンを踏んだな。

上条はその焼きそばパンを手に取り、女の子 焼きそばパン 女の子 焼きそばパンと何度も交互に見る。

この子が一体何なのかは分からないが、遠い所で幸せになってもらおう。

上条はこの手に持っている酸っぱい匂いのする焼きそばパンを差し出せば、帰るだろうと思い、焼きそばパンを女の子に突き出す。  
っが、

「ありがとうございます、そしていただきます」  
がつつりと喰われた。ラップ。それから、腕ごと。  
今日の上条当麻は本当に色んな意味で絶好調だ。

あの後上条は女子に名前を聞いた。

今、上条は女子の希望で食い物を作っているところだ。

「お前の名前は偽名とかでなく、本当に『インデックス』なんだな」  
上条は終わった冷蔵庫の中に入っていた食材で野菜炒め『風』を作っている。大切だからもう一度言うが、終わった冷蔵庫の食材で作っている。野菜炒め風を。

「そっだよ。もう一回言うけど、『目次』じゃなくて『インデックス禁書目録』  
の方のね。っで、魔法名は『Dedicator 545』」

「いや、魔法名ってのはどうでもいいからさ」  
「どうでもよくないんだよ」

「それよりさー、何だってお前はベランダに干してあった訳？」

上条は終わった冷蔵庫の食材で作っている野菜炒め風にしょうゆ油をブチ込みながらインデックスに向かって言う。

「干してあった訳じゃないんだよ？」

「じゃあ何なんだよ？ 風に流されて引っかけたんかお前」

「……、似たようなモノかも」  
冗談で言ったのに、と上条はフライパンを止めて思わず女子の方を振り返った。

「落ちたんだよ。屋上から屋上に跳び移ろうとして」

屋上？ 上条は天井を見る。

「この辺りは安い学生寮が建ち並ぶ一角で、八階建ての同じような

ビルがずらつと並んでいて、ベランダを見れば分かる通りビルとビルの隙間は二メートルくらいしかないが……でも、八階だぜ？ 一歩間違えれば地獄行きじゃねーか？」

「うん、自殺者にはお墓も立てられないもんね」

インデックスは良く分からない事を言う。

「けど、仕方なかったんだよ。あの時はああする他に逃げ道がなかったんだし」

「逃げ、道？」

上条は思わず眉をひそめる。

だが、インデックスは子供のように『うん』と言って、「追われてたからね」

「……」

熱したフライパンを揺らす手が止まる。

「ホントはちゃんと飛び移れるはずだったんだけど、飛んでる最中に背中を撃たれてね」

「……」

ここは学園都市だ。そう学園都市。科学が発展している学園都市。しつこいようだが、学園都市だ。

もしかしたら、テロリストでもいるんじゃないか？ それとも、

何らかの組織でも居たりするのかな？

上条はそんな物騒なことを考えてしまう。

「お前、テロリストにでも追われてるのか？」

「いや、魔術結社だよ」

「……」

上条の思考が止まる。

それもそうだ。テロリストなどなら、まだ分かる。だが、この科学が発展した学園都市の中で、非科学的な『魔術』という言葉が出たのだ。思考が止まるのは当たり前だ。

いや、それよりも！ と上条は野菜炒めもどきを盛った皿と箸をテーブルに置きながら訊ねる。

「撃たれたつてのは、どういうことだ？」

「そのままの意味だよ。でも、大丈夫なんだよ。私の着てる服は『防御結界』の役割もあるからね」

『防御結界』に『魔術結社』一体、何のことなのかさっぱりである。科学で証明出来る『超能力』は信じる。だが、科学で証明できない、非科学的な『魔術』。上条当麻は仮にも学園都市に住む人間だ。そう言った非科学的なものを信じられるはずもない。

「なあ、魔術結社何てマジでい……って！」

上条はインデックスに『魔術結社なんてマジで言ってるのか？』と言おうとしたのだが、中断する事になってしまふ。

なぜなら、皿に盛ってある野菜炒めもどきをいびつな箸の使い方をしながら、嬉しそうに食べていたからだ。

それはもう、罪悪感を覚えるほど嬉しそうに。

「ちよ、インデックス、さん？ そんな不味そうなものそんな嬉しそうに、美味しそうに食べなくても……」

「何を言ってるのかな？ 私の為に作ってくれた料理だもん。嬉しいし美味しいに決まってるよ」

満面の笑顔で答える。

「……だあー！ 地獄には俺が落ちる！」

上条は皿をインデックスから無理矢理奪い取り、インデックスに渡した箸とは別の箸を使って口の中に流し込む。

「うう」

インデックスはそんな光景を涙目で見続けているが、だからと言って食べさせるわけにはいかない。

全て自分が悪いのだから、今回はかりは不幸体質は関係なかった。何度も言うが、今日の上条当麻は色んな意味で絶好調だ。

上条はインデックスにビسケットを与え、本題に入る事にする。

「ついで、魔術結社つてのはマジで言ってたのか？」

ビスケットを食べるのを一旦止め、インデックスは答える。

「本当だよ」

「……魔術うゝ？ 魔術結社あゝ？」

上条は目をぱちくりさせる。

聞き返しといて何だが、上条は疑っていた。自分の聞き間違いではないかと。

「そつだよ。魔術<sup>マジック</sup>。魔術結社<sup>マジックキャバル</sup>とも言うね」

英語で言われると何がなんだかさっぱりである。

「新興宗教か何かか？」

「……そこはかたなく馬鹿にしてるね？」

「あー」

「……そこはかたなく馬鹿にしてるね？」

「ゴメン。無理だ。俺も色々な『異能の力』なら知ってるけど、魔術は無理だ」

「？」

インデックスは小首を傾げる。

科学者ならば、『魔術なんて非科学的なものは存在しない！』などときっぱりと否定するだろう。

だが、上条は知っている。自分の右手に備わっている『異能の力』と春風に備わっている『異能の力』を。

上条に右手に宿る幻想殺し<sup>イマジンプレイカー</sup>は、それが常識の外にある『異能の力』であるならば、学園都市の超能力者<sup>レベル5</sup>はもちろん、超能力でない春風の能力も、ましてや神話に出てくる神の奇跡<sup>システム</sup>でさえも一撃で打ち消す事が出来る。

「学園都市じゃ超能力なんて珍しくねーんだ。人間の脳なんざ静脈にエスペリン打って首に電極貼り付けて、イヤホンやリズム刻めば誰だって回線開いて『開発』できちまう。一切合財<sup>いっさいがっさい</sup>が科学で説明できちまうんじゃ誰だって認めて当然だろ？」

「……よくわかんない」

インデックスは言う。

それもそうだ。学園都市の住人じゃなければ、上条がなにを言っているのか分かるはずもない。ましてや、目の前の女子は『魔術』などと言う科学とは正反対の場所に位置するものが平然とあると言っているのだ。

上条がインデックスの言っている事が分からないのと同様に、インデックスもまた、上条の言っている事が理解できないのは当然だ。「当然なの！ 当然なんだよ当然なんですよ三段活用！」

「……。じゃあ、魔術は？ 魔術だって当然だよ？」  
インデックスはふてくされながら言う。

それもそうだ。インデックスにとっての普通と上条の普通は違う。住んできた環境が違うのだ。なのに、自分の普通を馬鹿にされたら、不機嫌にもなるだろう。

「えーつと、な。非科学的なものなんて、この世に存在しないんだ。占いだって、結局は確率の問題でしかない。コイントスもそうだ。何度コイントスで表が出ようと、確率の問題だ。そこには何の力も働いてない。だが、人間は思っちまう。そこに何らかの力が働いてると。結局、非科学的なんてもの、科学で証明できちまうんだ。まして、ここは科学が発展している学園都市。なおさら、証明できちまう」

ちなみにこれは、春風が言っていた事だ。寢言で。何の夢を見ていたか気になったので、本人に訊ねたのだが、覚えていないと言われた。

「そっぴや、睡眠にはノンレム睡眠とレム睡眠があるんだよな」

「一体、何の話をしてるの？」

「いや、何でもなし。っで、とりあえずなんだっけ？ ああ、そうだ。魔術がどうのこうのだったな。まあ、魔術どうのこうのはいいいとして、なんで追われてるんだ？」

「魔術はあるもん」

「……」

「魔術はあるもん！」  
話が進まない。

上条はため息をつき、  
「じゃあ、魔術を見せてくれよ。そうすれば、信じる事が出来るかも知らないからよ」

「私には魔力がないから使えないんだよ」

「……」

頭が痛い。

上条は額に手を持っていく。

何なんだこの子は。そう言えばこの前、どこぞのテレビでこんなやり取りをしていた。

オカルト好きの女子に男子が『なら、オカルトがあるって証拠見せるよ』と言ったら『オカルトだもん、証拠なんてあるはずないでしょ』などと言っていた。

今まさに、目の前の女子はそれと同じ事を言っているようなもの。

「魔術はあるもん」

はあ、と上条は溜息をつく。

「それじゃー、仮に魔術があるとして、だ。お前は何で狙われてんだよ？」

「それはね、私が禁書目録だからだよ」

「……はい？」

上条は間抜けに聞き返す。

無理もない。禁書目録インデックスだから狙われている。そもそも、禁書目録インデックスと言うもの自体、上条にとっては良く分からないものなのに、そのよく分からないもののせいで狙われているなんて言われたら、当然今の上条のような反応をしてしまう。

「私の持つてる、10万3000冊の魔道書。きっと、それが連中の狙いだと思う」

「……と、とりあえず。要するに、お前はその禁書目録インデックスとか言うのは魔道書。って、魔道書ってのは本って事で。その魔道書

とかいう本を持つてるから狙われているってことだよな？」

「そうだよ」

「だが、その肝心の本はどこにあるんだ？」

「ここにあるよ」

「……パルスワードを知ってるとか、倉庫のカギを持つてるとかそういうのか？」

うっん、と首を横に振る。

「違うよ。10万3000冊持つてるんだよ」

「それは、えーっと……」

上条はこの部屋を見回す。

当然、10万3000冊もの本はない。

「あれか？ 馬鹿には見えないとか？」

「馬鹿じゃなくても見えないんだよ。勝手に見られると困るもん」  
うわあ、と上条はインデックスに哀れみの視線を向ける。

もしかしてこの子、アニメと現実の違いが分からないとかか？

もしくは、現実とアニメの世界がごっちゃになってるとか？ 前どこかでグロイアニメなどをやっていて、そのやっている最中に殺人があり、加害者がそのグロイアニメを見ていたとかいうニュースを見た事がある様な気もしなくもない。そんな感じなのか？ まあ、殺人を犯す奴は元からアニメ関係なしに起こすが。

そんな事を考えるが、今は関係ないと首を振る。

そんな上条を見ていたインデックスはむうー、とまた機嫌を悪くする。

「超能力は信じるのに、魔術は信じないって変な話。と言うか、じや、逆に聞くけど、君には何が出来るのかな？」

確かに。自分だけ相手に魔術を信じさせるために何かを見せると言うのはおかしい話だ。

上条は自分の右手を見ながら、口を開く。

「えっとな。この右手には異能が備わってるんだ。つっても、作られた力じゃなくて、元から備わってる力だ。っで、だ。この右手は

イマジンプレイカー  
幻想殺しつってな。これで触れたものは『異能の力』なら、神の奇跡すら打ち消す事が出来るんだ」

「ぷっふー」

「何だその怪しい通販見てるような反応は？」

「だってー、神様を信じてもいなさそうな人に神様の奇跡すら打ち消せるって言われても」

「くっ！ むかつく！ こんなインチキ魔法少女に小馬鹿にされるとは」

「インチキじゃないもん！」

「じゃ、何か見せてみるよ！ ソイツを右手でブチ抜けば右手の事も信じるしかねーよな！」

「いいもん！ じゃ、見せてあげる！」

インデックスは立ち上がり、自分の着ている服を見せながら言う。

「これ！ この服！ これは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだから！」

「なんだ、それ？ さっきから変な専門用語ブチ込みやがって。意味わかんねーよ」

上条がそう言うつと、インデックスは台所へ入って行き、包丁を持つて戻ってきた。

「だったら、論より証拠！ この包丁で私のお腹を刺してみる！」

「な、なんだよそれ？」

「これは教会として必要最低限の要素だけを詰め込んだ服の形をした教会なんだから、包丁で刺したぐらいじゃ、傷一つ付かないんだよ」

「じゃ、ぐっさり刺してみます、なんてバカいるわけねーだろ」

「とことんバカにして！ これはトリノ聖骸布せいがいふを正確にコピーしたものだから、強度は絶対なんだよ！ 物理、魔術は問わず、全ての攻撃を受け流し、吸収しちゃうんだよ！」

上条は考える。

つまり、この服には『異能の力』が働いてるってことだよな？

なら、と上条は再び自分の右手を見る。

「お前の言っている事が本当なら、俺の右手が触れた時点で木端微塵イマジンブレイカーってわけだな」

「ふふん。君の力が本当な・ら・ね」

「やってやるうじやねーか！」

上条は立ち上がり、インデックスに近付き、『歩く教会』に右手で触れる。

「……………」

静寂が訪れる。

何も起こらなかったのだ。

「あ、あれ？」

「別に、何も起きないんだけど」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、インデックスがそう言った時だった。

インデックスの着ていた服が木端微塵になったのは。

「きゃあああああああああああああああああああああああ

っ！！！！」

学園都市に悲鳴が響き渡った。

上条はその後、あっちこっちをインデックスに噛まれた。

「つたく。あっちこち噛みつきやがって」

そう言う上条の後ろのベッドでは、インデックスが服を直している。

ただの安全ピンで。

「さっきのは俺が悪かったよ」

そう言って振り向いた上条に何か飛んできた。

「うわっ！！」

その何かは見事に上条に当たった。

インデックスは上条を睨みつけ、  
「あれだけの事があつたつてのに、何で普通に話し掛けられるんだよあ」

そう告げる。

上条は少し頬を染める。

「俺だつて大変どぎまぎしてるつて言うか、何と言うか」

「馬鹿にして」

インデックスは再び、服直しに戻る。

上条は右手を見ながら考える。

(あの修道服、俺の右手に反応したつて事は、あいつが異能の力に  
関わつてるのは間違いない)

「出来た！」

不意に後ろから声が聞こえてきた。

上条は後ろを振り返り、服の惨状をみて固まる。

「なんだ、そのアイアンメイデン？」

「日本語では針の筵むしと言う！」

明るい口調で言うが、やっぱりインデックスは落ち込んでるらしく、肩を落とす。

対して上条は『あ！ そうだ、補習』と言いながら携帯を開き、  
時間を確認する。

上条は立ち上がり、インデックスに言う。

「俺、これから学校に行かなきゃなんねーんだけど、お前どうすんの？ ここに残るなら、鍵渡すけど」

「いい。出てく」

インデックスは言うなりベッドから降りる。

「いつまでもいると、連中、ここまで来そうだし。君だつて、この部屋ごと爆破されたくはないよね？」

インデックスは玄関まで向かう。

「あ、おい、待てよ！」

上条はインデックスを追いかけて玄関へ行こうとするが、足をド

ア粹にぶつけてしまう。

「だあ！ とつとつと」

上条は必死にバランスを取り直そうと試みるが、バキッ、と何かを踏ん付けてしまう。

踏ん付けたのは携帯だった。

「……」

上条が固まっていると、

「君の右手」

インデックスが話しかけてくる。

「幸運とか、神のご加護とか、そう言うものをまとめて消してしまつてるんだと思うよ」

「はあ？」

「その右手が空気に触れてるだけで、ばんばん不幸になつてくつてわけだね」

インデックスの言葉に上条は膝を折つて、手を突いてしまう。

「ふ、不幸だ」

「何が不幸つて、そんな力を持って生れてきちゃったことが、もう不幸だよね」

「お前」

「ん？」

上条は顔を上げる。

「お前、ここを出て、どっか行くあてでもあるのかよ？」

「ここに居ると、敵が来るから」

「敵？」

「この服は魔力で動いてるからね。それを元に、サーチ掛けるみたいなんだよ。でも、大丈夫。教会まで逃げきればかくまってもらえるから」

「ちよつと待てよ。それが分かつて手放りだせるかよ」

インデックスは寂しそうに目を細め、告げる。

「じゃー、私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

それはあまりにも残酷な言葉だった。

言い方は明るかったがインデックスははっきりこう言ったのだ  
こっちにくんな、と。

「それじゃ」

インデックスはそう言うと部屋を飛び出した。

上条は追うように部屋の外へ出る。

「困った事があったら、また着ていいからな」

「うん。お腹が減ったらまた来る」

そうインデックスが言っていると、インデックスに清掃ロボット  
が集まって行く。

「ちよ、何これ！？ 使い魔<sup>アガシオン</sup>！？」

インデックスは清掃ロボットに連れて行かれるようにして消えて  
いった。

「なんだかなー」

と上条は少しの間思っていたが、補習の事を思いだし、部屋の中  
へ戻り、鞆を持って、急いで学校へ向かったのだった。

第七話 科学と魔術が交差する日 魔術SIDE (初) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございました。

第七話 科学と魔術が交差する日 魔術SIDE (終)

七月二〇日。

「はい。それじゃ先生プリントを作ってきたのでまずは配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー」

上条当麻、春風優人のクラスの担任、月詠小萌が言う。

小萌先生は身長一二五センチの学園都市七不思議に指定されるほどの幼女先生である。

そんな小萌先生は上条の方へと視線を向ける。

「そう言えば、上条ちゃん」

「はい？ なんです？」

「ユウちゃんがどうしてるか知らないですかー？ 朝、補習の連絡網で電話したんだけど、出なかったのです」

小萌先生が言うユウちゃんとは春風の事である。春風はこの呼び方を嫌がっていたが、月が経つにつれ、諦め、もとい、ユウちゃんと言う呼び方を承認した。

「あー。あいつの部屋の扉に『当分帰らない』って張り紙がしてありましたよ」

「そうですかー。それじゃ、今度、罰として一日雑用を手伝ってもらうです」

春風、一日雑用決定。

小萌先生はクラスに居る全員を見ながら言った。

「先生、気合を入れて小テストも作ってきたので点が悪かったら罰ゲーム」すけすけ見る見る『ですー」

すけすけ見る見るとは、目隠ししてポーカーをするという、ギャンブラーでもお手上げな企画である。

「まあ、上条ちゃんは記憶術の単位が足りないので強制的にすけすけ見る見るですよー」

営業スマイルで上条に告げる。

「むう。あれやね小萌ちゃんはカミヤんが可愛くて仕方がないんやね」

斜め右の席に座っている男の学級委員、青髪ピアスが言う。

「青髪。お前はあの背中に悪意は感じられんのか？」

「あないなお子様に言葉で責められるなんてカミヤん、経験値高いでー」

「ロリコンの上にMかよ。救いようがねーな」

「あはは〜ん」

青髪は両手を上に上げ、くねくねと気持ち悪い動きをし始める。

「ロリ“が”好きなんとちゃうで〜。ロリ“も”好きなんやで〜」

「はい、そこー。それ以上一言でもしゃべりやがったら『コロンプスの卵』ですよー」

コロンプスの卵。逆さにした生卵を何の支えもなく机の上に立ててみるってことだ。

「はあ、不幸だ」

上条は呟きながら左手で頬杖をつき、窓の外に目をやる。

(あいつ、どうしてるかな?)

考えているのはインデックスの事だ。

(部屋にフード忘れてったしな。でも、なんだったんだ? 10万3000冊の魔道書って。そんなもん、一体どこに。あいつ、ここにあるって言うってたけど)

上条は笑い、

(そのうち、忘れ物取りに帰ってくるかな?)

「センサー。上条君が、女子テニス部のひらひらに夢中になってます」

考え事をしていた上条の耳に、そんな声が入ってくる。

「えっ!」

青髪の言葉を聞いた小萌先生は少しの間沈黙し、そして、泣きだした。

「うっ、うっ、ひく」

『泣かした』

『泣かした』

敵意ある視線が上条へ向けられた。

夏休みの補習。上条は完全下校時刻まで拘束された。

「不幸だ」

学園都市の電車やバスはの最終便は下校時刻に合わせてある。終バスを逃した上条は、延々と続く商店街を歩いている。

「あつ、いたいた。見つけたわよ！ 今度こそ……」

上条に向けられた言葉だが、上条は気付かずに歩いて行く。

「つて、ちよつと！ アンタよ、アンタ！ 止まりなさいつてば！」

上条はやつと、それが自分に向けられたものと気付いた。

上条は声のした方へ振り返る。

そこには、御坂美琴みまが みことが居た。

どうやら、あの後、喫茶店から出て佐天涙子さてん ぬいこと話をし終わり、帰っている時かどうかは知らないが、上条の事を発見したので、三人と別れ、追いかけてきたようだ。

「あん？ ああ。またか。ビリビリ中学生」

「ビリビリ言うな！ 私には御坂美琴ってちゃんとした名前があるのよ！ あいつと言い、アンタと言い、おかしな呼び方して」

美琴が言うあいつとは、春風の事だ。

「つて、ビリビリ。お前も補習か？」

上条は華麗にスルーした。

「うっさいわね！ 今日と言う今日こそ電極刺したカエルの足みたいにひくひくさせてやるから遺言と遺産分配やつとけや、コラア！」

「やだ」

「なんですすつてえ……！」

ドン！ と御坂が勢い良く歩道のタイルを踏みつけると、周りに

居た学生の携帯は壊れ、警備ロボットは壊れ、と大変なことになった。

「どうよ。腑<sup>ふ</sup>抜けた頭のスイッチ切りかえられた？」

「ふざけんな！ 昨日テメエがド派手に雷落としたおかげで、ウチの電化製品とか冷蔵庫の中全滅だぞ！」

「アンタがム力つくから悪いのよ！」

美琴は訳の分からないキレ方をする。

「い、意味が分かんないキレ方しやがって。大体、俺はテメエに指一本触れてねーだろうが！」

「そうよ。一発も殴られてないもん。ってことは、お互いさまで引き分けてことですよ」

「んじゃ、いいよ。お前の勝ちって事で」

上条は歩き出しながら言った。

「ちよつと、アンタ！ マジメにやりなさいってば！」

美琴の言葉に足を止め、上条は振り返る。

「じゃ、マジメにやってもいいんかよ」

それだけで、美琴はひるむ。

無理もない。相手の能力が分かっているのだから。もしも、能力だけじゃなく、生身の人間そのものも消せるとしたら、そんなありもしない恐怖が美琴を襲う。

上条は鞆を担ぎ直し、

「朝はエセ魔術師。夕方はビリビリ超能力者ときたもんだ」

「魔術師？」

美琴はそう呟くが、それは『メッセージ、メッセージ。エラーN0・100231-YF。電波法に抵触する攻撃性電磁波を感知。』

システムの異常を確認。電子テロの可能性に備え、電子機器の使用を控えてください』と言う突如聞こえてきた声と、これまた突如鳴り出した警備ロボットの甲高い警報によりかき消される事になった。

上条と美琴の取る行動は一つ。

二人は同時に逃げ出した。

上条はその後、美琴と別れ、牛井屋に行った。

そこで、先に牛井屋に行き、牛井を食べていた春風と出会ったのだ。

本日、科学と魔術が交差する。

そして、科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

第七話 科学と魔術が交差する日 魔術SIDE (終) (後書き)

読んでくれたから、ありがとうございました。

## 第八話 ステイル「マゲヌス

七月二〇日。

「いやー食った食った。悪いな、優人。奢ってもらって」

「気にすんなって」

はるかぜ ゆうと 春風優人は かみじょうとつしま 上条当麻に牛井大盛を奢ってあげたのだ。

「にしても、朝から大変だったんだな」

「そうなんです。上条さんは大変だったんですよ」

「おまえの不幸体質も相変わらずだな。朝からキャッシュカードや携帯は壊すし、エセ魔術師に遭い、帰りは御坂美琴みさか みことに合うなんてな」

「まあ、お前も不幸だがな」

春風は首を傾げる。

「何故？」

「小萌先生が補習に来なかった罰として一日雑用をやらせるって言うってたからだ」

「な！ マジかよ!？」

「ああ。マジだマジだ大マジだ」

二人でそんな話をしていると、電子レンジみたいな音が鳴り響いた。

どうやら上条達の部屋がある七階に到着したようだ。

エレベーターの扉が開く。

「ん？ 当麻。お前の部屋の前に清掃ロボットが集まってるんだが。三台も」

「はあ!?! 一体何が……」

上条は春風の前に出て、自分の部屋の前へと歩いて行く。

と、数歩歩いて清掃ロボットの間からうつぶせに倒れている安全ピンの服を着た人物が見えた。

「あー」

その人物は三台もの清掃ロボットにがつんがつん、と体当たりさ

れてもピクリとも動かない。

「なんていうか、不幸だ」

そう言う上条だが、どう考えても笑顔だった。

春風はちなみに置き去り状態だが、上条から話を聞いていた為、朝会ったインデックスと言う人物だということが分かった。

「おい！ こんな所でナニやってんだよ？」

上条が声をかけるがインデックスから反応はない。それどころか、ピクリとも動かない。

おかしい、と春風は思った。

空腹で倒れていたとしても、声をかければ何らかの反応をするはずだ。いや、清掃ロボットに体当たりをされて、動いていない時点で妙だ。深い眠りに陥っているなら、もしかしたらピクリとも反応をしないかもしれない。けれど、追いかけられている身でこんな所で寝るバカはいないはずだ。

上条がフードを忘れていったというのを思いますが、普通、部屋が空いていなかったら違う場所で待つだろう。

（と言うことは、もしかして、襲われたのか？）

春風がそんな事を考えていると、

「や、めろ。やめろっ！ くそ！！」

上条がいきなりそんな事を叫び出しながら、清掃ロボットを退かそうとしていた。

「どうした、ん、だ……」

春風は近付き、言葉を失った。

インデックスから血が溢れ出していたのだ。

「くそ！ くそッ！！ 何だよ、一体何なんだよこれは！？」

上条は混乱していた。

だからこそ、上条は気付かない。

だが、春風は違った。気付いた。

「ぶざけやがって！ 一体どこのどいつにやられたんだ！ お前！  
」！

「うん？ ぼ「お前だろ？」」

春風は振り返り、言った。

「「ッ！！」」

上条だけでなく、声をかけてきた人物までもが驚いた。

それも当然だ。まさか、気付いてると思っていなかったのだから。

「何で分かった？」

煙草、黒い修道服、赤い髪、右まぶたの下にはバーコードのような刺青タトゥー、そんな特徴満載の男が訊ねる。

「何でって言われても、感、としか言いようがないが」

「鋭い勘だね。確かに、やったのは僕達『魔術師』さ」

二人がそんな会話をしている中、上条は固まっていた。

男の異常な雰囲気。

男の周りはまるで、別世界だ。実際に別世界なわけではないが、

雰囲気がそういう異世界を……いや、違う。『魔術師』だからこそ、そう言った『異世界』を作り出しているのだ。

だが、春風は雰囲気なんてものには呑まれない。逆に、呑み込もうとする。

右目の眼帯を外し、その異様な目が現れる。赤い瞳に、数字が書かれた眼が。

初めてみる者からしたらその目はまさしく異様だった。見ているだけで、引きずり込まれそうな眼だ。魔術師も例外ではない。一瞬、魔術師の目が見開かれた。

「俺の質問に答えるよ、魔術師。どうやたら、この子を治せる？」

「それを僕が答えると思うのかい？」

「思うね」

「何故？」

「簡単だ、と春風は告げる。」

「このまま放置しといてもきつと、その子は死ぬ。なのに、アンタは今ここに現れた。つまり、だ。死なれたら困るんだろ？」

「止めを刺しに来たとは思わないのかい？」

「思わない。止めを刺すなら、普通なら傷つけた時に刺すはずだ。なのに、そうしていない。死体を処理しに来たつてのものなした。傷つけた時に殺し、その時に持ち去ればいいんだからな」

男は思った。この少年は頭がキレル、と。それだけじゃなく、冷静だとも。

実際、春風は冷静で頭がキレた。春風が取り乱すことなんてそうそうなかった。ましてや、倒れてるのは自分とは何の関わり合いない人物だ。余計に取りみだすことはない。ただ、怒りは覚えていたが。

「さー、答える。どうやってたら、治せる？ 俺の考えが正しければ、その子もお前も学園都市の人間じゃない。学園都市の人間じゃない以上、迂闊うかつに病院なんて行けないだろ。なら、どうやってその子を治すつもりだった？」

「言つと思つかい？」

「言わずにこのまま放置しといたら、その子が死ぬが、それでもいいのか？」

「くっ！ 魔術で治すつもりだったんだ」

男は口を割った。

「そう、か。その魔術はどう使う？ 誰でも使えるのか？」

「超能力者には使えない。それと、その魔術は僕の専門外だ」  
なるほど、と春風は頷く。

超能力者に使えない。魔術の方については、インデックスが持つてるって言っていた魔道書とかでどうにかなるだろう。後は、誰が使うか。

春風は頭を悩ませる。

(当麻？ いや、あいつにはイマジンプレイカー右手がある。じゃあ、俺がやるか……いや、俺も一応能力を使える。副作用とかがあつたら大変だ。となると……小萌先生に頼むのが最善だろう)

上条達の担任である月詠小萌つくよみこもえは超能力開発を受けていない一般人だ。

「……何で、ここまで戻ってきたんだ？」

上条はポツリ、と漏らす。

「ん？ それは、あれだよ。多分、忘れ物をしたんじゃないのかな。被り物フードが無いから、それを探していたか、取りに来たかだろうね」  
つまり、被り物フードを忘れていなければ、こんな傷を負わなくて済んだ事だろうか。

「いや、忘れてなくても別の場所でやられていた可能性は高い。なら、逆に。ここで、上条の部屋で忘れた事は不幸中の幸いだったかもしれない。」

「ばっかやろう」

上条が吐き捨てた。

だが、そんな言葉春風は気に留めない。いや、気に留めるときじゃないのだ。

「おい、魔術師。この子が言ってたって言う『インデックス禁書目録』の中には治す魔術もあるんだろ？」

「確かにある」

「っで、それはどこにある？」

「ソレの頭の中にね」

春風はそれを聞くと、上条に振り返り告げた。

「当麻。お前、小萌先生のところに行って来い。こいつは、俺が食いとめとく」

「ちよ、待てよ！ なら、お前が連れてってくれ。俺が食いとめとくから。お前、ここじゃ戦いにくいだろ」

「確かにここは、やりにくい。だが、そいつは、お前の事は知ってる。もしも、途中で目を覚ましたらどうする？ 知らない奴が運んでるより知ってる奴が運んでる方がいいだろ。分かったら、早く行け」

「……ああ。分かった。死ぬんじゃないぞ」

上条はインデックスを両手でしっかりと抱え上げ、男の横をすり抜けていく。

上条はいらだつように何度もエレベーターのボタンを押している。エレベーターが来ると凄い勢いで乗り込む。

「行かせてくれるんだな」

「ああ。ここで戦って、その間に死んだら困るしね。それに、君を倒した後で回収に向かえばいい事だしね」

「回収？」

「そう。『インデックス禁書目録』の回収。保護とも言うかな」

「ふーん。つうか、今更だけどお前、誰だ？ 魔術師って事は話の流れから分かるが」

「僕かい？ 僕はステイル」マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortiss931と言っておこうか？」

Fortiss931？ と首を傾げている春風にステイルは告げる。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな？ 僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使う時には真名まなを名乗ってはいけないそうさ。古い因習だから僕には理解ができないんだけどね」

春風とステイルまでの距離は約15メートル。

走れば今すぐにでも殴れそうな距離だが、春風は動かない。迂闊に動く痛い目を見る可能性があるからだ。

「Fortiss 日本語では強者と言った所か。ま、語源はどうだって良い。重要なのはこの名を名乗り上げた事だね、僕達の間では、魔術を使う魔法名と言うよりも、むしろ」ステイルは煙草を手に取り、横合いへと投げ捨てる。「殺し名、かな」

火のついた煙草は水平に飛んで行き、隣のビルの壁に当たる。

残像のようにオレンジ色の軌跡ラインが煙草の後を追う。煙草は壁に当たると、火の粉を散らした。

「炎よKenaz」

ステイルが何かを呟いた瞬間、オレンジ色の軌跡ラインが爆発した。それ見ていた春風は考える。

（あいつは、何かをするつもりだ。だが、どうする？ ここで幻術

を使う訳にはいかない)

そう。春風はここで幻術を使う事が出来ないのだ。やろうと思えばやれるのだろうが、幻術をかけ、相手がパニックになり、能力を辺り構わず使われたら学生寮が無くなる可能性もあるし、何より、いないとは思うが、部屋で寝ている住人が居て、この騒動に気付いていなかったら大変なことになるからだ。

(幻術を使えない以上、格闘能力を上げる『修羅道』か『人間道』を使うか……いや、修羅道はまだしも、人間道は使いたくない。家庭教師ヒットマンREBORN!のキャラであり、『六道輪廻』を使う六道骸も言っていたように、人間道はもつとも醜く、危険なスキルだからな)

そんな事を考えている間に、ステイルは続きを口にしようとしていた。

しかも、一直線に炎の剣が生み出されている。

「Purrisaazaaupriz Geddoo 巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは灼熱の炎剣を横殴りに春風へ叩きつけた。

「ツチ。まにあってくれ」

春風の目の数字が『修羅道』の『四』に変わる。それと同時に、右目から闘気オーラが出る。

春風は七階から飛び降りた。

瞬間。爆発した。

「やりすぎたかな?」

爆発事件を前にして、ステイルは頭を掻きながら言う。

「それじゃ、あのインデックスを治しに行った少年を追うかな」

ステイルはエレベーターのある方へ振り返り、

「ご苦労様、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ一〇〇〇

〇回やっても勝てないって事だよ」

消し飛んだと思っっている春風に言い捨てる。

ステイルはエレベーターを待つ。

そして、開いたエレベーターの中から春風が現れた。

「なッ!？」

ステイルは驚き、後ずさった。

無理もない。死んだと思っていた人間がエレベーターの中から出てきたのだから。

だが、驚くステイルを気にも留めず、春風は眼帯をつけ直しながらステイルの後ろに広がる光景を見て言う。

「おいおい。やり過ぎだろ。馬鹿じゃねーのか、お前？ つうか、これじゃ、直るまで暮らせそうにねーし」

「い、一体、どうやって!？」

ステイルが叫ぶ。

「どうやってって、爆発する前に飛び降りて、その後は普通にエレベーターに乗ってきた」

「と、飛び降り、た、だと？」

ステイルはチラリ、と右下を見る。

とてつもなく高かった。

「ここは、七階、だぞ」

「ん？ まあ、七階だな。だからどうした？」

「くっ!」

ステイルは飛び退き、

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」  
MTWO TFFTO IIGOOIOF

再び何かを言い出す。

ふん、と春風は鼻で笑う。

「言い終わるまで待つとか思ってたんなよな」

春風は走り出す。

「ッ!」

「今のお前は、能力なしでも十分だ」

春風は力一杯に拳を握る。

そして、勢い良くステイルの顔面に拳を叩き込んだ。

ステイルの体は回転し、そのまま倒れる。

「終わった終わった。つうか、今回は演技しなくても良かったか？」

春風は呟く。

そう。春風は場合にもよるが、大抵の場合は戦闘バトルの時は演技をしている。相手にもよるが、大抵の場合キャラと口調まで変わる。

「こいつ、打たれ弱かったな。一発で伸びるってどうよ。……の前に、スプリングラーを起動しておこう」

春風は火災報知機を起動させた。

それによって、スプリングラーが人口の雨を巻き散らし、火を消していく。

「当麻に電話するか」

春風がそう思い、携帯を取り出そうとした時だった。

「あなたがステイルをやったのですか？」

不意にそんな声が聞こえたのは。

春風は声の聞こえた方向、ステイルの方へと振り返る。

すると、そこには倒れたステイルだけじゃなく、Tシャツに片足だけ大胆に切ったジーンズを穿いていて、腰から長さ二メートル以上もの日本刀を持っている女性が居た。

その姿を確認した瞬間、春風は変わる。

「アンタは、誰だ？」

「神裂火織かんざき かおり、と申します。ステイルは連れていかせてもらいます」

「どうぞ」

一言。春風はたった一言言った。

「……それでは」

女性はそれだけを言うと、ステイルと共に一瞬で消え去った。

「すー！」

春風は素直な感想を漏らした。

「一瞬で消えるとか、ヤバくないか？ ……いや、今は当麻に電話する方が先だ。啞然としてる場合じゃない」

そう思った春風の所に、電話が入った。

春風は携帯を取り出し、開く。画面には『当麻』と書かれていた。春風は電話に出る。

「もしもし。どうなった？」

【あ、ああ。小萌先生に任せてきた。どうも、イマジンブレイカー右手があると、ダメらしいんだ。電話に出られてるって事は、そっちは大丈夫なんだろ？】

「ああ。もう、終わった」

【……】

「……」

少しの間沈黙が訪れる。

【くそっ！ 何で俺は何にも出来ないんだよ！？ 神の奇跡システムすらぶち殺せんに！ なんて、一人の少女を救う事が出来ないんだよ！？】

「落ち着け。当麻。お前は、ちゃんとインデックスの事を救ったから」

【は？】

上条は春風の言っている意味が分からないのか、間抜けに返事を返す。

「お前が居なかったら、インデックスを小萌先生の所まで早急に連れていく事は出来なかった。もしも、俺が居なかったら。もしも、お前が居なかったら。インデックスは助からなかったかもしれない。だから、今回は俺とお前、そして小萌先生が居たから、助けられたんだ。だから、そう自分を責めるなって」

【だ、だけど……俺は……】

はあ、と春風は溜息をつく。

「だったら、お前はあいつの傍に付いてる。っで、魔術師が現れたら追い払え。もしも一人じゃ無理なら、俺を呼べ。分かったな？ つつか、これ、決定事項な」

春風は勝手に話を進める。

【……ありがとう、な】

上条が言う。

春風はだああああああああ、と行き成り叫び、

「いつものお前に戻れ！ 俺の調子が狂う！ だから、戻れ！ これも決定事項！」

そう上条に言い放つ。

「じゃ、俺、寝床探すしかないから、切る」

そして、春風は強制的に電話を切った。

最後に、上条が『ああ。分かった。サンキュー』と言っていたのを聞かずに。

「た、たいへんだった」

春風はあの後、野次馬や風紀委員に見つからないようにして寮から出たのだ。

そして、今はコンビニに居たりする。

「いやー、マジで大変だった」

そう呟きながら缶コーヒーを取ろうとした時だった。

同じように缶コーヒーを取ろうしていた誰かの手が先に、缶コーヒーを取ってしまったのだ。最後の一本を。

「……」

春風は隣を見る。

缶コーヒーを取った人物は同じ缶コーヒーをカゴにいっぱいに入れていた。

誰だよ、こんなにコーヒー買ってる奴は、と春風は思い、顔を上げ、人物の顔を見る。

そこには、白い髪、白い肌、赤い瞳をもった人物が居た。

「一方通行！」  
アクセラレータ

学園都市の中に七人しかいない超能力者の第一位、一方通行だった。

「ん？ ああ。お前かア。優人。久しぶりだなア。てっきり、学園都市を去ったと思ってたがなア」

言っておくと、春風と一方通行アクセラレータは知り合いで、結構仲が良かったりする。

「まあ、最初はそうしようとしてたけど、色々あって出ていかない事にしたんだ」

「ふくん。まア、いいか。それよりも、どうだ？ 久々に一緒に食事に行かねーか？ 今度だが」

「お前の奢りならいいぞ」

「なア」

「ん？」

「触れていいか？」

「ごめんなさい！ と春風は頭を下げた。

「まア、冗談だ」

こいつも冗談言うんだ、とか思ったのは内緒だ。

「久々に会ったからなア。まア、行く時は奢ってやるよ」

「よっ！ 太っ腹！」

春風は両手をイヤホン代わりにして叫ぶ。

「やかましい。奢るの止めにするぞ」

「すいません」

春風はまたまた頭を下げる。

「まア、今度メールするわ。俺は、『実験』があるから、行くわ。

いつ予定が変わるか分かんないからなア」

「ああ。またな」

春風は手を振りながら、思った。

『実験』って何だ？ と。

そして、しばらくコンビニで本を立ち読みしてから、ある事に気づいた。

一方通行アクセラレータの所に泊めてもらえばよかったと。

この日、春風は寝ないでコンビニで立ち読みをし続けるのだった。店員におかしな目で見られていた事は言うまでもない。

## 第八話 ステイル「マゲヌス（後書き）」

読んでくれた方、ありがとうございます。

一方通行と春風が知り合いなのについては、今度春風の過去と一  
緒に触れようと思います。（あくまで予定です）

## 第九話 取引現場

七月二十一日。

一七七支部。

「どうですか?」

「暗号や仲間内の言葉が多くてよく分からないんですけど……幻想<sup>レベル</sup>御手の取引場所と思われる地点はいくつか判明しました」

「さつすが初春ですわ」

初春<sup>ついはる</sup>飾利<sup>かざり</sup>は白井<sup>しらい</sup>黒子<sup>くろこ</sup>に推測地点のリストを渡す。

「こんなにたくさんあるんです?」

白井は出ていこうとする。

「白井さん?」

「この中に必ずあるんでしょ? だったら、一つ一つ潰していくだけですよ」

「誰でもいいから潰して」

しよっぱなから物騒なことをつぶやいているのは春風<sup>はるかぜ</sup>優人<sup>ゆうと</sup>だ。

「眠い。苛々する。誰でもいいから潰したい」

今の春風は言葉の通り、苛々している。理由は簡単で、寝れなかったからだ。その証拠に目が虚ろだ。

「……ん? あれは、佐天か?」

春風の少し先で、何かを思うように何かを握っている佐天が居た。「何考えて何やってんだ? 声かけてみるか」

「よー、さ」まで言った所で、佐天は気付いていないのか、何処かに行ってしまった。

近くの金属の手すりの向こうを見ると、佐天が走って来た。しかも、その先では三人の不良にどこぞの誰か分からない男子が殴られ、

蹴られ、二人にそれぞれ腕を掴まれたりしていた。

「おいおい。確かに誰かを潰したいとか訳の分からない事を呟いてたかも知れないけど、まさか、知り合いが巻き込まれる事になるなんて……いや、そもそも、本当に潰したいとは思ってなかったわけで、ただ単に軽い気持ちで思っただけなんだが」

そんな事を一人で呟いていると、

「止めなさいよ！」

佐天が注意した！

「おいおいおいおいおいおいおいおい。これはないって。インデックスとかいう奴と当麻が魔術師に襲われた時、怪我してたら魔術師を追い返せないって……んなこと、どうでもいいか」

(こんぐらいの高さなら、能力使うまでもないな)

春風は飛び降り、佐天の後ろにある壁に(ギリギリ佐天に当たるか当たらないとこに)蹴りを入れている不良の肩をたたく。

「あ？」

不良がこつちを向いた所で、思いっきり拳を顔面に叩き込む。不良は吹っ飛び、倒れる。ちなみに、他の不良二人と殴られたりけられたりしていた奴は啞然としている。

春風は目を瞑っている佐天に声をかける。

「おい、大丈夫だぞ」

「……あ、優人、さん」

「よ。佐天、お前、勇氣「優人さん！ 危ない！」っへ？」

春風は間抜けに返事をし、後ろを振り返る。

瞬間。回し蹴りが春風にぶち当たった。

「グッ！」

春風は油断していた事もあり、もろに入ってしまう。

「テメエ、舐めた真似してくれんじゃんかよ」

吹っ飛ばされた不良はいつの間にか復活していて、膝を折り、蹴られた部分を抑えている春風に言う。回し蹴りを春風に食らわせたのもこいつだ。

(ちくしょう。普段なら、こんなにもろに入らないのによ。つうか、こいつ、マジで潰してやる)

「おい、聞いてんのかよ、オイ！」

不良は春風の髪の毛を掴み、無理矢理顔を上げさせる。

「や、止めて！」

佐天が不良の手を掴む。

「うるせー。弱い奴にごちゃごちゃ指図する権利はねーんだよ」

不良が佐天に告げた瞬間、佐天の目は見開かれ、手を掴む力も弱くなる。

「ツハ。あとで相手してやつから、すつ込んでな」

そう言つて不良は佐天を振り払う。

「さーつて。テメエ、舐めた真似してくれたんだタダで済むと

「黙れよ、三下」

春風は呟く。

「アア？ 今、なんつった？」

「お前は、日本語も理解できねーのか？ 黙れつったんだよ、三下野郎」

春風は自分の髪を掴んでいた不良の手首を握る。

「ツー!!」

不良は驚く。そのあまりの力に。

「ツチ!!」

不良は春風を蹴り飛ばし、固まっていた二人の不良に言った。

「おい、そいつで能力を試せ。いつまでもそつちの奴に構ってなくていいからよ」

二人の不良は互いに顔を見やり、

「「ああ」」

同時に頷く。

二人は春風に近付いて行き、春風も立ち上がる。さつき春風を蹴り飛ばした不良も春風に近付いて行く。佐天はどうしたらいいのか分からずに戸惑う。被害者の男子は逃げて行く。

「そこまですわよ」

不意に、そんな声が聞こえてきて、全員、そちらに振り返る。

そこには、ジャッジメント風紀委員だと言うことを現す腕章を付けている白井が居た。

「ジャッジメント風紀委員ですの。暴行傷害の現行犯で拘束します」

一人の不良が空き缶を踏み潰し、白井の方へと歩いて行く。

「っは。何かと思えば、ガキが一匹増えただけじゃねーか」

「お気をつけあそばせ」

言っているのにも拘らず、不良が白井の肩に手を置く。

「ただでさ無駄足が続いた揚句、ようやく辿り着いた取引現場で友達が暴行されていたのですから」

（ああ。俺、友達になつてたんだ）

春風は心の中でそんな事を思っていたりする。

そんな春風を置き去りにするかのように、

「なに言ってたんだ！」

白井の肩に手を置いていた不良が叫ぶ。

「ぐはっ！」

レポート不良は空間移動を使われ、地面に落ち、伸びた。

（伸びるの早！ と言うか、白井すご！ これなら、白井一人で倒せるんじゃないか？）

「今日の黒子は危ないですよ」

春風を蹴った不良とは別のもう一人の不良が白井に走り出す。

不良は走っている途中に手を右から左に振る。すると、鉄パイプ

やらが白井に向かって勝手に飛んでいった。

（テレキネシス念動能力か何か？ まあ、どんな能力でもどうでもいいが）

白井はレポート空間移動でそれを避けるだけでなく、不良の近くに移動し、レポート鞆で不良の顔を殴った。

「おもしれえ能力だな。空間移動ってやつか？ 初めてみたぜ」

不良は春風から白井に標的を変えた。

「人ごとのように仰いますけど、次はあなたの番ですよ」

「俺達はよー。レヘルアップバー 幻想御手手に入れる前は、お前達ジャッジメント風紀委員にビクビクしてたんだ。だから」

不良は走り出す。

「でけー能力が手に入ったら、お前らをギタギタにしてやりてーと思つてたんだぜ」

不良は手をクロスさせる様にして白井を捕まえようとするが、当然白井は空間移動で回り込むようにして飛ぶ。レポート

「……白井！ 後ろだ！」

「っへ？」

春風の言葉で白井は後ろを向く。

そこには不良が居て、行き成り蹴りを放つ。

白井は咄嗟に自分と不良の足との間に鞆を持っていく。

鞆がガードとなり、姿勢を立て直すのは容易だった。

（あいつの能力は、なんだ？ あいつの見えない位置に何かいると感が働いたからよかつたが、見えている位置と本体が居る場所が違うんじゃ……見えている位置が違う？ って事は、周囲の光を捻じ曲げ、見える位置をずらしてるのか？）

そう考えていると、目が白井に向かって走っている不良を視界の端でとらえた。

「考えが当たってれば、やばいぞ！」

そう呟くと同時に、春風の体は勝手に動いていた。

白井達の元へと走り、白井を突き飛ばす。

瞬間。春風のわき腹を回し蹴りが襲った。

「グッ！！」

白井を突き飛ばし、それと同時に回し蹴りが来た為、足に力を入れる間が無かつた春風は横に合ったガラスへぶつかり、ガラスはバリン、と言う甲高い音を発しながら割れた。

春風は廃ビルの床に叩きつけられる。

そして、何かがわき腹に刺さった。

（ガラスの破片、か）

それを強引に抜き取る。

「いつ！」

その部分から血が出て、服を血の色に染める。

「とあえず、絆創膏を貼つとけばいいか。そんなに深くはなさそうだし、切り口も広くはなさそうだからな」

春風はポケットに入っていた絆創膏を取り出し、切り口に貼る。

何故、春風が絆創膏を持っているのかと言うと、いつ不幸少年のかみじょうとじゅんま上条当麻が傷を作るか分からないからだ。そして、それに巻き込まれる自分自身もいつ傷を作るか分からないからである。

「だ、大丈夫ですよ！？」

白井が絆創膏を貼り終わつた春風に駆け寄つて来る。

「ああ。大丈夫だ」

ズキツ、と痛みが襲つ。

「お前、結構タフだな」

不良が廃ビルに入ってくる。

入ってくる時にガラスの破片を踏み、ばりばり、とガラスが音を奏でる。

「白井。お前は、下がってる」

春風は右手を出し、これ以上は行かせないと言つ意思を見せる。

「それは出来ないご相談ですの」

白井は右手を退かすようにして前へ出る。

「ちよ！ 白井、下がってるって」

「わたくしは風紀委員シヤツジメンですよ。一般人が目の前で危ない目にあつてるのに、無視なんて出来ないですの」

「……だったら、佐天の傍に居ろって。いつ、他の不良が目覚ますか分からないからな」

「で、ですが！」

白井がそう叫んだ時だ。

「俺の事忘れてんじゃねーぞー！」

不良が走り出したのは。

残り、三、四歩で不良は春風を殴れる位置まで来る。

「白井」

春風は一步前へ出て、白井の方へ向き直る。  
後ろで不良は腕を振り上げる。

「あ、危ないですよ！」

白井は春風の後ろを指差す。

だが、春風は慌てない。

不良は拳を春風向かって振り下ろす。

「聞いてますの！ 危ないとい……」

春風は白井に笑いかける。

「大丈夫だつて。本体は」

春風は一步前へ踏み出す。

この瞬間、白井からは不良と春風が重なって見えた。

「そこだろうからな」

春風はもう一步前へ踏み出し、何も無い場所で回し蹴りをする。

「ッ……！」

だが、何も無い場所での回し蹴りは何かに当たった。

「な、何で分かった！？」

不良が姿を現す。

どうやら、咄嗟の事に能力を解いてしまったようだ。

「何で、と言われても。感、としか言いようがない」

「くそ野郎が！」

不良はナイフを取り出し、数歩後ろへ下がってから再び能力を使う。

不良の姿は春風の隣へ現われる。

だが、春風はそんなことを気にせず、白井に向き直る。

「つな、大丈夫だろ？」

「は、はあ」

白井は間抜けに返事を返した。

何が起こったのか分かっていないのだ。

「おい、お前の方が大丈夫か？ あいつの能力はただ単に光を捻じ曲げてるだけなんだよ」

白井にそう告げる。

「だから、目に頼らなきゃいい話なんだって」

そう言つと、春風は何もない……いや、何も見えない場所を殴りつけた。

だが、何も見えない場所には不良が居た。

バキツ、と骨と骨とがぶつかり合う独特の音が響き、春風にはその感触も伝わる。

不良は再び能力を解いてしまい、姿を現す。

「くっそがあ！」

不良は立ち上がり、もう一本ナイフを取り出す。

「ちょ、おい！ もう、能力関係なくなつてんじゃねーか！」

春風が叫ぶと、

「能力なんて関係ねー！」

逆切れされた。

「わたくしの事を忘れてもらつては困りますの」

いつの間にか不良の背後に空間移動した白井が言いながら不良の肩を掴み、能力を発動させた。

天井近くまで不良は移動する。

そして、重力によってパンツ、と不良は背中から床に強打する。

「ぐッ！！」

不良は痛さのあまりにナイフを落とす。

「ほいっ」と

春風はナイフを蹴り飛ばす。

「暴れると今度は、もっと高くから落としますわよ」

白井は逃げないように不良の襟を掴み、告げる。

「サンキュー、白井。下手したら刺されてたから助かった。っで、

こいつどうすんだ？」

春風は無抵抗の不良を指差す。

「ん？ そうですね。さっき、アンチスキル警備員には連絡しましたので、もうじき来ると思います。なので、この方たちはアンチスキル警備員に渡せばいいんですけど、その前に、頂きたいものがあるんですの」

「頂きたいものって何だ？」

レベルアップ「幻想御手ですわ」

「そうか。おい、お前、渡せ」

「だ、誰がテメエらなんかに渡すか」

不良は強がる。

「白井、こいつ、更に高い所から落とされたいらしいぞ」

春風は白井に告げる。

「い、言う！ だから、止してくれ！」

必死に不良は止めに来る。効果はてきめんだった。

「では、レベルアップ幻想御手を渡してくださいな」

「あ、ああ」

怯えたような声を出しながら、不良は音楽プレイヤーを手渡してくる。

「ただの音楽プレイヤーではありませんの。ふざけないでくださいな」

レベルアップ「幻想御手は、曲なんだよ」

「何ですって？」

ウィーウィーとやかましい音が響き渡ってきた。

「どうやら、アンチスキル警備員が到着したみたいですね」

「そうみたいだな」

春風と白井は不良を連れ、外に出た。

白井は不良を引き渡しに行く為、アンチスキル警備員の元へ行き、春風は物陰で様子を見ていた佐天の元へ近づいて行く。

「佐天。お前、凄い勇氣だな」

「っへ？」

突如声をかけられた事によって、佐天は間抜けに返事を返す。

「いや、っへ？ じゃなくて、凄い勇氣だなんて。不良三人に注意

しに行くのには凄い勇気が必要じゃねーか」

「そ、それを言うなら、白井さんと、優人さんの方が……」

「いやいやいや。状況が違うだろ？ お前の時は周りに俺や白井は居なかった。だが、俺ん時はお前が居た。最悪、お前と被害者の男子を逃がしてから俺も逃げればよかったしな。白井の場合も同様だ。最悪の場合、逃げればよかった。あいつは空間移動テレポート使えるから、逃げやすいだろう。俺は俺で結構タフだし。よって、お前の方が勇気があったと言える」

「そ、そんな事無いですって」

両手を左右に振りだした。

「いや、そんな事あるっての。なあ、白井」

春風は空間移動テレポートで近くに移動した白井に話を振る。

「ええ。確かに、佐天さんの取った行動は勇気が要りますわ」

「本当に、そんなことないですって……本当に」

最後に言った言葉は、あまりにも小さすぎて春風達には何を言ったのか分からなかった。

「わ、私はもう、行きますね」

佐天はそれだけ言うと、この場から去ってってしまう。

「行っちまったな」

「そうですね……って、そのわき腹の傷、どうしたんですの!？」

白井がわき腹の傷に気づいた。

「ん？ ああ。さっき、ガラスの破片が刺さっただけだ」

「それ、だけってレベルじゃないですの」

「いや、ただだって。実際、戦ってる時はもうすでに俺、傷の事忘れてたし。それに、もう、絆創膏は貼ってあるから」

「消毒はどうしたんですの?」

「いや、してない」

きつぱりと春風は言った。

「ダメじゃないですの!」

「いや、こんぐらいなら大丈夫だろ」

「ダメですわ。風紀委員一七七支部に行きますわよ」

「なんでそうなるんだよ？」

「支部で消毒するんですの」

「……それぐえっ！」

走り出そうとした春風の襟を白井は掴む。

その為、服が喉に食い込んだ。

「ゲホツゲホツ。おい、マジ今のはないだろ」

「それについては謝りますの。ですが、逃げようとしたあなたも悪いんですのよ？」

「だって、マジでいいし」

「ダメですの。それに、消毒だけじゃなく、聞きたいこととかもありますし」

「聞きたい事？」

「そうですの。ですから、一緒に来てもらいますわよ」

その後、春風は支部に連れて行かれた。無理矢理。

#### 佐天SIDE

佐天の周りには誰もいない。まるで、佐天の今の気持ちのように、同じ世界に居るのに違う世界に居るような気持ちになる。

「二人とも、褒めてくれたけど……結局、何も出来なかったのは事実なんだよね……嫌だな、この気持ち」

佐天はポツリ、と呟く。

（白井さんは私と同じ中学生で。あたしと同じ年齢で。あたしと同じ女の子なのに。あたしと違う世界に住んでいる人が居る。能力者と無能力者では、何もかもが違う）

佐天は立ち止まる。

（優人さんはいつもあたしを助けてくれる。優しいし、頼りになる……あれ？）

そう言えば、と何かを佐天は思い出す。

「優人さん、能力使ってたっけ？」

そう。春風は能力を使っていなかった。

「何で、使わなかったんだろ？　て言うかそもそも、優人さんの能力ってなんなのかな？」

そんな事を考えていると、

「涙子ー」

誰かに名前を呼ばれた。

「涙子ー。おい、やっほー」

佐天は声のした方へ振り返る。そこには三人の女子が居た。

「アケミ、むーちゃん、マコちゃんも」

どれも見知った顔だった。

「一人で何してたの？　買い物？」

アケミが訊ねる。

「まあ、そんなとこ。アケミ達は？」

アケミはプールバックを佐天に見せる。

「プール……って言っても、人が多すぎでろくに入れなかったんだけどね」

夏休み。プールが込んでるのは必然と言っていいだろう。

「もう、くたくただよ」

むーちゃんが心底疲れたような表情をする。

「明日は涼しい図書館でも勉強する？」

「確かにね。能力はどうにもならないけど、勉強ぐらいがんばらなきゃ」

むーちゃんの提案にアケミは賛成する。

「私もいいよ」

続けてマコちゃんも賛成した。

「涙子はどうする？」

「あたしは……考えとく」

「そう？　にしても、ホント、能力ほしいな」

はあ、とアケミはため息をついた。

だが、何かを思いだしたのか、「あ、そうだ」と言います。

「どうしたのアケミ？」

「いや、幻想御手レベルアップバーつてのがあったなって」

「何、それ？」

マコちゃんが話に加わった。

「あ、知ってる。能力が上がるとかいうやつでしょ？」

「噂じゃー今、高値で取引されてるらしいよ」

「お金なんかないよ」

むー、と言った感じでムーちゃんが言った。

「あ、あのさ。あたし、それ持つてるんだけど」

佐天が言いにくそうに告げた。

その後、四人は公園に移動した。そして、誰も使う事に対しての危険性を感じなかったのか、全員が幻想御手レベルアップバーを使い、超能力のレベルが上がったのだ。

「あ、白井さん……に、春風さん？」

一七七支部に行くなり、初春が驚いた。

「よ、初春。座らせてもらっぞ」

春風は言っつて、ソファアに座った。

「初春。救急箱を取ってくださいな」

「あ、はい」

初春は救急箱を取りながら訊ねる。

「誰か怪我したんですか？」

「春か」

「ストップ！」

春風は白井の言葉を遮った。

「な、なんですの？」

「俺の事は名前で呼んでくれ。春風って呼びにくいし、なんか嫌だ」

「からな。初春もそうしてくれ」

「は、はあ」

二人して間抜けに返事をした。

「……っで、白井さん。結局、優人さんが怪我したって事でいいんですか？」

「そ「違う」」

春風は言葉の途中なものにも関わらず、即答した。

「違わくないでしょう。初春。救急箱を貸して下さいな」

「いや、だからいいっての。これぐらいの怪我慣れてるし」

「良くないですわ」

そう言つと、白井は初春から救急箱を受け取った。

「……はあ、分かった」

春風は観念し、服を上げて怪我をしたわき腹を見せる。

貼った絆創膏は血の色で染まっており、そこから漏れたものが服を血の色に染めていたようだ。

白井は綿に消毒液を染み込ませる。

「絆創膏取りまわすわよ」

白井は貼つてあつた絆創膏をはがし、消毒液を染み込ませた綿で消毒をする。

綿を捨て、絆創膏を取り出す。

「そんなに酷い傷じゃありませんわね」

「だからそう言つてんじゃん」

「それでも、消毒はした方がいいですよ」  
「会話しながら白井は絆創膏を貼る。」

「終わりですよ」

「ばん、と傷口をたたく。」

「ッ！！ おま、それは酷い」

「お決まりの展開ですよ」

「いや、意味分からねーし」

白井は救急箱から出したものを救急箱に戻し、初春に救急箱を渡

す。

白井は春風の向かいに座る。

「っで、お話ですけど」

「ん？ ああ。なんか聞きたい事があつたんだっけか？」

「そうですね。単刀直入に聞きますが、何故、能力を使わなかったんですの？」

「ああ。そのことか。何でって、無能力者だから」

「嘘をつかないでくださいな。この間、幻を見せた的な事を言っていましたでしょう」

あー、覚えてたんだ、と心の中で呟く。

「忘れた」

さらりと嘘をついた。

「嘘ですの」

「いや、嘘じゃないって。書庫を調べる」

「……初春」

「はいはい」

向こうの方でカタカタと音が聞こえてくる。

(マジで調べんのかよ)

「白井さん。優人さんの言っている事は本当ですよ。優人さんは無能力者です」

「調べるのはやっ!」

「それは本当ですよ、初春」

「嘘ついてどうするんですか」

「確かにその通りですわね」

白井は顎に手を持って行き、何かを考える。

「ん〜」

しばらく悩んでから、ところで、と口を開いた。

「前から思っていましたけど、なんで眼帯を付けてるんですの?」

「何でって……」

春風は考える。

(言つべきか、言わざるべきか。つつか、一回白井達の前で眼帯取つたよな。暗かったから見えてなかったのか?)

「なんか、怪しいですわね」

怪しいものを見るような目で春風を見る。

「……しようがない。見せてやるよ。別に隠す気ないし」

春風は眼帯を取る。よつて、眼帯に隠されていた赤く、数字の書いてある異様な眼が現れる。

「ッ!!」

白井の眼が見開かれた。

「な、なんですか、それ……?」

「眼」

「ふざけていますの?」

ピクピク、と白井の眉が動き始める。

「すいません! と春風は頭を下げた。

「えーつと、だな……おい、初春。聞きたいならこつち来いよ」

春風はさつきから顔を覗かしている初春に言う。

「い、いえ! 私は別にそんなつもりじゃ!」

「誤魔化さないでいいから」

「気になるなら来る事ですの」

白井にまで言われ、初春は恥ずかしそうに来る。そして、白井の隣へ座つた。

それを横目で確認し、口を開く。

「この眼には数字が書かれてるだろ? この眼の数字は変えられるんだ」

「か、変えられますの?」

「ああ。一〜六まで自分の意思で変えられる。つで、書かれてる数字によって使えるスキルが変わる」

「つ、つまり、優人さんは六つの異能が使えるって事ですか?」

「ん〜。そうなるのか?」

春風自身あまり良く分かっていなかったりする。これを一つの異

能として扱うのか、六つの異能として扱うのか。

だが、結局は六つ扱うのだから、そうと言えばそうだろう。

「それでは優人さんは多重能力者デュアルスキルって事ですよ!？」

「いや、白井。さっきも言ったろ？ この眼は『異能』だって。俺のは『異能』であって『超能力』じゃないんだ。だから、多重能力デュアルスキル者じゃないし、書庫バンクでも無能力者レベル0って事になってるんだ。ちなみに言うと、俺は能力開発なんて受けてない」

「う、受けて、ないって、どういうことですよ?」

「そのまんまの意味だ。俺は研究者を欺いてるからな」

「欺くってどうやってですよ?」

「こうやって」

春風は右目に書かれている数字を『一』の『地獄道』に変える。

「ッ!！」

本当に数字が変わった事に二人は驚く。

「今から、もっと驚く事になるぞ」

「っへ?」

「ど、どういうことですよ?」

春風が言った瞬間。この部屋が凍りついた。

「白井さん。寒いです」

初春は自分を抱きしめるように体を擦る。

「こ、これは一体なんですよ?」

「幻覚だ。これで、研究者達も騙してる。俺が受けてる、と言う幻覚を見せてな」

(まあ、あの野郎は幻術だって分かってるくせに口出してこないがな)

春風は眼帯をつけ直す。

「俺の能力は分かったろ? もう、帰っていいか?」

「ちよ、まだ話は終わってないですよ」

「何だよ?」

「何で、さっきは能力使わなかったんですの?」

「ん？ 簡単だ。あの不良はこう言った。『うるせー。弱い奴にこちやごちや指図する権利はねーんだよ』ってな。だから、能力使わずにギタギタにしたかった。ただ、それだけ。じゃあな」

春風は立ち上がり、帰ろうとする。

「ちよ、待ってくださいですよ」

白井は立ち上がって春風の腕を掴む。

「何だ？ 早く帰りたいんだが。眠いし」

「優人さん。風紀委員ジャッジメントに入ってくださいですよ」

「あ、私からもお願いします」

初春も立ち上がる。

「断る」

何の迷いもなく断る。

「どうしてですか？」

「どうして？ 別に俺は正義ヒーローじゃないしな。確かに、目の前で誰かが助けを求めてたら助ける」

「でしたら」

だが、と白井の言葉を遮る。

「遠くで助けを求めている奴が居たとしても、そいつが知り合いじゃければ俺は助けに行かない。逆に。知り合いなら遠くでも駆けつける」

「なんで、ですか」

初春は肩を震わせながら口を開く。

「誰かを守る力があるのに、何でそう言う考え方しかできないんですか！？ 中には風紀委員ジャッジメントに入りたくても入れない人もいますよ！ 人を守りたいのに守れない人もいます！ なのに、何で…」

（前、どっかの不良に似たような事言ったな。つっても、あん時はただの時間稼ぎだったし）

春風は目を細める。それによって、いつもとは全然違う眼に変わる。目付きは悪く、鋭く。そして、憎しみ。恨み。そう言ったもの

を含んだ眼に変わる。

その眼で初春を見る。

「ッ!!!」

初春は睨んだように思ったのか驚く。

「初春。もしも、助けに行つて、助けようとした奴が裏切つたらどうする？ もしも、助けようとした奴がたちの悪い連中と組んでい

て、ジャッジメント風紀委員をおびき出す為に演技してたらどうする？」

「そ、そんなことあ

「あり得ないって言えるのか？ そう言つた可能性がないわけじゃない。お前はその時耐えられるのか？」

「わたくし達ジャッジメント風紀委員は信じるだけですの

白井が口を挟んだ。

「本当に裏切られたら、そう言う事は言えないぞ

「もしかして、優人さん。誰かに裏切られた事あるんですか？」

初春が訊ねる。

細めていた目をいつもと同じ目に戻し、明るく言う。

「いんや。俺はねえ。裏切られた事“は”ないぞ

「そ、それなら、何であんな事を……」

初春は頭の上に疑問符を浮かべる。

「何でもいいだろ。それよりも、俺は行くぞ

春風は白井の手を振りほどき、支部を後にした。

「優人さんにはまだまだ秘密がありそうですの

「でも、私は納得いきません。あんな凄い力があるのに……」

だが、いくら言つても春風が居ない以上は二人の会話は無意味である。

## 第九話 取引現場（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。

## 第十話 窓のないビル（前書き）

今回から原作とは違った設定や展開が入ってきます。そう言うのが苦手な方は戻ってください。大丈夫な方は読んでください。

もしかしたら、垣根とアレイスターの喋り方がおかしいかもしれません。

## 第十話 窓のないビル

七月二十二日。

「一方通行どこだつてんだよー。メアドと番号欲しいのに」  
「ふらふらふらとおぼつかない足取りで春風優人は一方通行を探していた。親友のメアドを聞きたいのだ。」

「あん時、携帯壊しちゃったからな。て言うか、消滅？」

昔春風は喧嘩の最中に携帯を落とし、その携帯に能力がブチ当たり、そのまま使用不可能な状態になってしまった事があるのだ。アドレス帳に入っている相手のメアドやら番号やは覚えてるはずもなく、それ以来一方通行やもう一人の親友とも連絡が取れなくなっていたのだ。

「ん？ お！ もう一人の親友見つけ」

一方通行から見つけようと思ったが、目の前に居るのだからメアドと番号を聞かない手はない。

「おーい。垣根！ 垣根 帝督！」

春風は茶髪で長身の男に声をかける。

「……」  
長身の垣根は気付いていないのか、歩みを止めない。

「おい、垣根。止まれって」

「……」  
垣根を歩みを止めない。

「……いい加減にしろ！」  
春風は痺れを切らせ、いきなり後ろからドロップキックを炸裂させる。

垣根は前に吹っ飛び、倒れた。

「ム力ついた」

垣根はそう呟きながら立ち上がり、春風を睨みつける。殺気の籠った眼で。

戦う意思はありません。と言うか戦いたくありません。なので落ち着いてくださいと両手と首を振る。

「ん？ お前、優人か？」

「やっと気付いたか」

「つつかお前、この都市から出ていったんじゃなかったのか？」

「いや、色々と合って止めたんだ」

「なら、電話かメールぐらいくれればいいじゃんか」

「あー。んーと。携帯がな。不良と喧嘩した時に消し飛んだ。能力で」

「なるほどな。つで、アドレス帳に登録してある相手の番号やメールアドレスを覚えてるはずもなく、連絡できなくなったと」

なるほどな、と頷く。

「当麻まじの方も同じように壊しちまって二人とも分からなかったんだよ。あー、青髪もか」

「なんだ？ お前、あの二人と同じとこに通ってんのか？」

「ああ。後、土御門つちみかども同じとこだし。一方通行アクセラレタとはこの間会った。

まあ、一方通行アクセラレタのメアドや番号聞くの忘れてて、聞きそびれたが」

「相変わらずどっか抜けてるよな。……思ったんだが、土御門つちみかどと同じとこに通ってるなら、土御門に番号とメアド聞けばいいんじゃないのか？ つつか、青髪と当麻はそうしてると思うぞ」

「……」

おお、と手と手を打って見せる。

「本当にお前、どっか抜けてるよな」

「うるせー！ 人間の脳なんか万能に出来てねーんだよ！ 大体人間の脳なんざ楽しい事をする為にあんだよ！」

「いや、それ間違いだから。つつか、キャラと口調が崩れてるぞ」

二人の会話から分かる通り、上条当麻、青髪ピアス、土御門元春、垣根帝督アクセラレタ、一方通行、春風優人は全員知りあいだ。

この全員が知り合いなのは春風の過去が大きく関係している。だが、今は触れないでおこう。

「まあ、一方通行アクセラレータは他の三人に聞くとして、だ。お前は目の前に居るんだから教えてちょ」

「気持ちわりーから。うせる」

垣根は春風に冷たい視線を向けて言い放つ。

「……いや、まあ。なんだ。暑さで頭が壊れたと思ってくれ」

「別に頭が壊れんのはいいが、能力は暴走させんじゃねーぞ。お前の暴走状態止めるのはめんどくせーし大変なんだからよ」

「いや〜。悪いが、あん時の事は覚えてないんだよ」

「そりゃー、理性事ぶつ飛んでたしな。あそこまで厄介な相手はこれからこの先もお前だけで十分だつて程に厄介だつたぜ」

「悪かつたつて。にしても、確かお前と一方通行アクセラレータ、それから当麻が止めてくれたんだっけか？ いや〜。マジで大変だつたんだな〜」

「大変なんてもんじゃなかったつての。俺ら幻覚なんて初めてだったしよ。当麻も右手で頭に触れるまで気付かなかつたし。ホント、めんどくさかつたつての。つま、今暴走したとしてももう、幻覚だつて分かるから前ほど大変じゃないだろうがな」

「ふ〜ん。て言うか、どうやって止めたんだ？」

「簡単だ。止め方はな。誰かがお前の眼帯をつけ直せばよかつただけだからよ。だが、つけ直すまでが大変だつたんだよ。めつちや暴れるし。近付けるの一方通行アクセラレータだけだつたんだぞ。身体能力上げてる状態じゃ、俺と当麻は迂闊に手が出せなかつたからな。一方通行アクセラレータが居なかつたらヤバかつたぞ」

言いながら垣根は携帯を取り出す。春風も同様に取り出す。

「そんじゃ、俺はお前の知ってるから送信するぞ」

「ほいほい。こっちは受信な」

二人はその後、別れた。

そして、春風は『あ、そうだ』と何かを思いだし、ある場所へ向かう。窓のないビルへ。

窓もドアもないビル内で、春風は、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっている人間を見据えていた。人間は緑色の手術衣を着ている。

人物の名はアレキスター・クローリー。学園都市統括理事長。普通の人間ではない。

「君の顔を見るのは久しぶりだな」

春風は当分ここには来ていなかった。いや、来たくなかったのだが、今回ばかりはそうも言っではいられなかった。

「アレキスター。この間アクセラレータ一方通行がボソツ、と『実験がある』って言った。今度は何をやらせてるんだ？」

普通とは違うアレキスター。だが、春風もまた、いつもの春風とは違っていた。雰囲気。表情。双眸。あらゆるものが違う。雰囲気はいつものように優しく、穏やかではない。双眸は鋭く、表情は冷徹。

そして、普通の人間とは思えないほどの闘気オーラを眼に宿していた。どす黒い闘気オーラを。

これは春風の六道輪廻によるものだ。春風の右眼には今、四の数字が書かれている。右眼から闘気オーラを出し格闘能力を上昇させる能力の修羅道だ。

だが、そんな春風を見てもアレキスターの口元には笑みが浮かんでいる。

「私が言うつても？」

「言わないなら、お前をぶっ潰すだけだ」

「ほう。それは面白い」

まるでやってみると言わんばかりに春風を見据える。

春風は右眼の数字を四から一に変える。相手に永遠の悪夢を見せる、地獄道だ。

「なら、やってやるよ」

ガンッ！ ものすごい音が響き渡る。春風が巨大な円筒器を殴っ

ただ。

ビシッ！ ビシシッ！ ビシビシッ！ 殴った部分にひびが入る。ひびは自らの存在を知らしめるように広がって行く。

アレイスターが肩をすくめるようなしぐさをする。

「幻覚。そんなもので、私が騙せると思ったか」

春風もそんなアレイスターに対して笑みを浮かべる。

「流石はアレイスター、と言った所か」

取っていた眼帯をつけ直し、

「アレイスター。お前に教えてやる。俺にはまだ、切り札が残ってる」

まるでその切り札を使えばアレイスター、お前でも倒せる。そう言うかのようにアレイスターを見る。

「ほう。なら今ここで、使えばいい」

アレイスターは不敵な笑みを浮かべて告げる。

だがその通りだ。後々切り札を使うのも、今使うのもそんなに大差ないのである。春風の目的は一方通行の、アクセラレータ親友の実験を止める事だった。逆に。早めに切り札を使って実験を止めた方が良く決まっている。

「あいにくだが、今は使わない。切り札ってのはそう言うもんだ」  
それに、と言葉を紡ぐ。

「お前がどうしても実験の事を話さないなら、俺は研究所を壊すだけだ。手当たりしだいにな」

「それは困る。……いいだろう。教えてやる」

その後、春風はアレイスターから一方通行が行っている実験の事を聞いた。その実験は「一方通行を絶対能力にする」と言ったものだった。

世界で一番賢いコンピューターで究極の予測装置『シミュレータ樹形図の設計プログラマー』を用いて演算した結果、一二八種類の戦場を用意し、レベル6超電磁砲レベル6御坂美琴を一二八回殺害することで一方通行は絶対能力へ進化することが判明した。

だが、御坂美琴レベルガンは一二八人も居ない。それは必然。用意できるはずがない。そこで、同時期に進められていた超電磁砲レベル5の量産計画『妹達』シスターズに着目した。量産型の実力は多めに見積もっても強能力者程度。レベル3

その為、『樹形図の設計者』ツリーダイアグラムに再演算させる事にした。その結果、二万通り戦場を用意し、二万人の妹達シスターズを用意することで御坂美琴オリジナルを一二八回殺すのと同じ結果を得られる事が判明した。

つまり、一方通行アクセラレータが行っている実験と言うのは、二万種の戦場と戦闘シナリオを用意し、妹達シスターズを二万回殺害すると言うものなのだ。

「ふざ、けんな」

それを聞いた春風の怒りが頂点に達した。

「テメエらの勝手な都合で俺の親友に人殺しをさせてるだと。ふざけんじゃねー！ テメエら、ぶつ潰すぞ！ これ以上実験を続けさせるってんなら、学園都市ごと潰すぞ！」

まるで火山が噴火した時のように、感情が溢れ出した。

「……学園都市ごと潰す、か。それをやられては困る。君の場合、本当にやりそうだからね。しょうがない。実験は中止するでしょう。明けにあっさりとアレキスターは実験を止めると告げた。

（こいつ、一体何を考えてる？ いつもだったら、こんなにあっさり引き下がらないはず）

考えるが、春風は首を横に振り、考えを振り払う。

止めると言うのなら、止めてもらうに越したことはないのだから。

「なら、止めてくれるんだな？」

「ああ。今、連絡を取った。君の希望通り、『今回の実験』“は”止めさせた」

「……」

春風はアレキスターの言い方に眉を動かす。

（今回の実験は、か。こいつ、まだ他に何かを企んでるな。まあ、いいか。また何か違う実験に親友を巻き込むような事があるなら、

その時に食い止めればいいだけの話だし)

「礼は言わない。もうすでに、あいつは何人、いや、何千人、何万人と殺してる可能性があるからな」

そう言い捨て、窓のないビルの『案内人』である結標淡希むすじめ あわき へ出してもらった。

春風が居なくなる。タイミングを見計らったように今度は金髪にサングラスをかけた人物、土御門元春つちみかど もとはるが窓のないビルの中に姿を現した。

「一体、何の話をしていたんだ？」

「一方通行の実験についてだ。私に止めないなら学園都市ごと潰すと脅してきた。流石、と言ったところだ」

「それで、お前はどうしたんだ？」

「望みどおり、中止にしてやった。まだ、アレには利用価値があるからな」

「幻想殺しだけでなく、六道輪廻も利用するか。あの二つを利用するなら覚悟しておけ。生半可な信念で立ち向かえば、あの右手、幻想殺しはお前の幻想を喰い殺す。そして、あの右眼、六道輪廻は幻想を造り替え、書き換えてくるぞ」

「私の信じる幻想など、とうの昔に壊れているさ」

#### 一方通行SIDE

「それは、本当かア？」

一方通行は電話越しに『実験は中止になった』と言う報告を受けた。

「一体、何がどうなったってんだア？」

一方通行は通話を切り、ベッドに横になる。

(まア、実験が中止になったのは俺にとってはいいいが……本当に何がどうなってんだア?)

いくら考えても分からない。親友が止めてくれたと言うことを。

(つつても、もう、手遅れってほど殺しちゃまったんだがな)  
この日、一方通行は殺した妹達シスターズの事、そしてなぜ中止になったの  
かを考えた。

## 第十話 窓のないビル（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます。  
感想などがあれば待っています。

第十一話 気分転換 (初) (前書き)

これからは原作キャラの性格や展開と大きく異なって行きます。  
それでも良い方は読んでいってください。

## 第十一話 気分転換（初）

七月二十三日。

「小萌先生。お邪魔しまーす」

春風優人は月詠小萌先生はるかぜ ゆづと つくよみ こもえの部屋に事前の連絡もなしに扉を開け、入り込もうとする。

「ちょ、ユウちゃん！ 何を勝手に入り込もうとしてるんですかー！」「いいからいいから。遠慮しないで」

「よくないです！ それと、遠慮しなきゃいけないのはユウちゃんの方ですよ！」

小萌先生は必死に玄関で食い止めようとする。

だが、春風は問答無用で入って行く。

そして。

「よ、当麻」

インデックスの傍に居る上条当麻かみじょうとつみに言いつつ、隣に座る。小萌先生も諦めたのか、春風の隣に座った。

「よう、優人。どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「いや、お前に気分転換してもらおうと思って」

春風は懐から紙を取り出した。真っ白の紙を。

「何だ、それ？」

当麻は首を傾げながら紙に触れようとする。

春風は立ち上がり、当麻の手が届かないようにする。

「右手でこれに触るのは止してくれよ。効果がぶち殺されちまうから」

「効果？」

「ああ。この紙には特殊な力が込められてるんだ。まあ、見た目はただの紙だがな。だが、効果は本物だぜ（なんせ、神から貰ったアイテムだし）」

春風は言っと、インデックスの額に一つ、身体にまた一つ張る。

だが、何も起きない。

「おい、優人。一体、何がしたいんだ？」

「何って、インデックスの姿を見えなくしたただけだ」

「……」

上条は無言でインデックスを見た。

インデックスはすーすー、と穏やかな寝息を立てている。

「いや、普通に見えるが」

「そりゃー、そうだ。見えなくなるのは俺が紙を張ったのを見ていなかった奴だけだからな。だから、俺はもちろん、当麻と小萌先生には見える」

「ほへへ。便利ですー」

小萌先生はマジマジとインデックスを見る。

「小萌先生」

「はい。なんです？」

小萌先生は春風に向き直る。

「この紙を渡しておくんで、はがれたら張ってください。これ、一回張ってはがれたら効果が無くなっちゃう使い捨て物なんで。後この一枚しか無いんで大事に使ってくださいよ。あ、張る時はのりとかは付けなくていいんで。そんじゃ、当麻。行くぞ」

「っは？ おい、どこに」

「いいからいいから。行ってからのお楽しみ」

春風は腕を掴み、無理矢理立たせる。

「そんじゃ、当麻に気分転換させてきますね」

小萌先生にそう言って、上条を部屋から連れ出した。

「行ってらっしゃいですよー」

小萌先生は小さく手を振りながら二人を送り出した。

「っで、そろそろ教えてくれよ。どこに行くんだ？」

「ん〜つと。ちょっと待ってくれ」

春風は視線を巡らせ始める。何かを探してるようだ。

「ん〜」

しばらく巡らせた所で、

「お！ 居た居た」

何かを……いや、誰かを見つけた。

上条は春風の視線を追う。  
すると。

「あれって、ビリビリか？」

みさか みごと  
御坂美琴ともう一人、さてん るいこ  
佐天涙子が居た。

「ああ。つで、もう一人は佐天涙子。後二人誘ってもらったはずだが、まだ来てないのか、来れないのか……まあ、それは聞くとして行くぞ」

「ちょ、待て。もしかして貴方はビリビリと佐天つて言う女子と一緒に店を回るなんて言いだすつもりでございますか？」

「その通りだ。いい気分転換になると思うからな」

「ま、まあ、優人と佐天つて子がいれば流石に勝負しなさいなんて言い出さないだろうからな」

大丈夫だ大丈夫だ。うんうん。大丈夫に決まってる一人で顔き始める。

そんな上条の腕を取り、勝手に二人のどこまで連れて行く。

「ホントはインデックスも誘おうと思っただが、寝てたからな。起こすのはかわいそうだろ？」

二人のどこに向かいながら言うが、

「大丈夫だ。大丈夫なんだ」

上条は何やら一人でぶつくさ言っただけ聞いてちゃいなかった。

「おい。佐天にライトニングガール電撃女子」

手を振りながら名前を叫ぶ。

「あ！ 優人さーん」

佐天は手を振り変えし、

「誰が電撃女子なのよ!」

ライトニングガール

美琴は髪からバチバチバチと火花を散らす。

「おいおい。今日は楽しむのが目的だろうっての。電撃放つのは止せ」

「だったら、ちゃんと名前呼びなさいよ!」

「分かったよ。当麻も今日だけは名前で呼べよ」

春風は上条に振る。

だが、肝心の上条は、

「大丈夫大丈夫。いざとなれば逃げればいいんだし」

「お前いつまでやってんだよ」

ボカツ、と拳骨を食らわせる。

「いつてー! なにすんだよ!」

「いつまでもお前が同じことやってるのがいけないんだろ」

「だからって拳骨はないだろ!」

「何だよ。ヤンのか?」

「ああ。やってやろうじゃねーか」

二人は自分の右拳を左手で握る。

「ちょ、アンタら何しようとしてるのよ!? 今日は楽しむんでしょ!」

「け、喧嘩はいけませんってば!」

佐天と美琴は必死で止めようとするが、二人は気にしない。

「当麻。行くぞ!」

「ああ。来い!」

「優人さん! 行っちゃダメですってば!」

「こら、アンタも止めなさい!」

佐天と美琴は飛びかかるようにして止めようとするが、時はすでに遅し。

「さいしょはぐー! ジャンケンポン!」

上条、グー。春風、パー。

ズザーッ! 佐天と美琴がヘッドスライディングのようにこけた。

「っしやー！ 今日の飯代はお前が払う番だな」

「くっそ。今度は負けないからな」

二人がそんな会話をしている中で佐天と美琴は立ち上がり、汚れを叩いて落とす。

「アンタら、何やってるのよ」

美琴はおかしなものを見るような目で二人を見る。

「何って、勝負だが？」

「ああ。生死がかかった勝負だ」

春風はさらりと言い、それに続く様に上条も言う。上条のは明らかに生活費の問題だ。

「いやー。優人さん。あれはちょっと。あたし、殴りかかると思いましたし」

佐天は額に冷や汗を浮かべていた。

「つつか、今頃だが、お前、私服なのな」

春風は佐天の姿に今更ながら気づく。

佐天はジーパンとTシャツの上にキャミソールを重ねた格好をしていて、暑い為かジーパンの裾が捲まくられている。

ジーパンの裾を捲るぐらいなら、ハーフパンツかショートパンツ穿けばいいのにな。

春風は佐天の私服を見ながらそんな事を考えた。

「そう言う優人さんも私服なんですな」

春風はハーフパンツにTシャツと言った簡単な私服姿だ。右目に眼帯を付けている為、変わってると言えなくもないが。

「まあ、制服で行くと目立つからな」

キラン、と春風の眼が光る。

「ってなわけで、当麻に美琴！ 先ずはお前らの服を買いに行くぞ  
！」

ビシッ、と近くに合ったブティックを指差す。

「「はあ？」」

なに言ってるのこイツ。馬鹿じゃないの。行き成りおかしなこと

を言いだしてどうしたんだ？ と何を言っているのか分からないかのように息を吐いた。打ち合わせをしたのかと思うほどタイミング良く。

「いや、だから。お前らの服を買いに行こうと」

「だから、なんでそうなるんだ？」

「制服じゃ目立つからって言ったじゃんか。何だそれともあれか？ お前はクラスの連中。例えば青髪とか土御門つちみかどとかに見つかってもいいって言うのか？ 女子が居るんだぞ。女子と出かけてんだぞ」  
どうなんだ、このやるーとでも言いたげに上条に詰め寄る。

「うー！ そ、それはマズイかも」

「だろ？ だから、買いに行くんだよ」

と。口では言うが、実際はまあ、制服着てなくてもツンツン頭ですぐに分かるんだがな。などと思っっていたりする。

「そ、そうだな。美坂に、佐天だっけか？」

「あ、はい。佐天涙子です」

「俺は上条当麻。よろしくな……ってことで、早速服を買いに行こうー！」

上条は近くに居た美琴の手を取り、ブティックに走って行ってしまった。

佐天と春風はブティックに消えて行く二人の後ろ姿を見ながら、

「そう言えば、初春と白井はどうしたんだ？」

「風紀委員の仕事が忙しいとかで来れないって言ってました」

「ふーん。じゃ、あいつらの分も楽しむか」

ニコっ、と笑って見せるが内心では、そう言えばこの間、風紀委員シヤッジメの支部に行った時、言い過ぎたよな、と考え、

（今度謝っとくかな）

結局今度謝る事にした。

だが、今日は楽しみに来たのでその事はこれ以上考えないようにする。

「さーって。今日は楽しむ事にするか。（主な目的は当麻の気分転

換だが、佐天、行こうぜ」

「あ、はい」

二人の姿もブティックに消えて行く。

「カツキー。コンビニ寄ろうや〜」

「その呼び方何回止めろって言わせる気だ？」

垣根かきね帝督は青髪ピアスを横目で見ると

「いいやないの〜。ボクとカツキーの仲やねん」

はあ、とため息をつく。

「仲がいいってことな」

「そうや〜」

両手を上げ、気持ち悪いぐらいくねくねしだす。

「あー！ もう！ 気持ち悪い！ ムカつくぐらい鬱陶うっとうしい！」

「そんな事言わへんと」

「エセ関西人、ちよつと黙れ。一円やるから」

「エセ言うな！ ボクはホンマに大阪人やねんな！ それと、一円

で何を買えって言うねん」

「あー。俺、用事があるから帰る」

垣根は手を振りながら立ち去ろうとする。

「ちよ！ 待ち」

青髪ピアスの言葉を無視してすたすたと歩いて行く。そして、何

故か行き成り全力疾走を شدした。

「……………」

青髪ピアスは呆然と垣根の後ろ姿を見続けた。と言っか、青髪ピアスの時が止まっていた。

「……………ッ！！ カツキーが逃げた！」

青髪ピアスが叫ぶ。

周りの通行人は何事かと青髪ピアスに一斉に振り返った。携帯で

通話していた人も、話しながら歩いてきた人もたちどまり、なにごとかと青髪ピアスを見るので、今まで聞こえてこなかった声が聞こえてくる。

「風紀委員ですの」  
ジャッジメント

止まった通行人が歩き出すのに対して、青髪ピアスはなんやなんや、と声のした方へ向かった。

行ってみると、ツインテールの女子が数人の男と対峙していた。

青髪ピアスは大の女好きである。だからか、女子が風紀委員ジャッジメントと云うことを忘れていた。

青髪ピアスの体は勝手に動き出し、

「女の子一人に対して大人数はあかんて〜」

青髪ピアスは一人の男の手首を掴んだ。

「何だテメエ！」

手首を掴まれた男は怒鳴る。他の男達とツインテール女子は何が起きたか分かかっていない。困惑しているのだ。

「舐めてんのか、エエ!？」

「ちやいますちやいます」

パツ、とすかさず手首を解放する。

「正義の味方気取りかア！」

男は青髪ピアスの手を掴もうとするが、

「わはははははーっ!」

青髪ピアスはバレリーナのようにくるくる回転しながら逃亡したので掴めなくなる。

「テメエ! 逃げんな! お前ら、行くぞー!」

「「「あ、ああ」」」

男達は青髪ピアスを追いかける。

「……な、なんだっただんですの?」

ツインテールの女子、白井黒子しろいこくろこは何が起こったのか理解できていなかった。

しばらくしてから正気に戻った白井は青髪ピアスと男達を追っこ

とにした。

「はあ、はあ。追ってきてないみたいだな」

垣根は後ろを振り返りながら呟く。

「ふー。疲れた」

そう思っただけで歩き出そうとした所で、ドンッ！と何かにぶつかる。なんだよ、と思いつつ前を向くと、如何にもな連中が三人居た。

「……悪い」

垣根は謝り、歩き出そうとする。

「つが、当然如何にもな人達はい貸してくれるはずもなく。

「おい、待てよ」

肩を掴んできた。

（つつか、マジでこの都市治安悪いな。いや、悪過ぎだ。裏ではなんか組織もあるみたいだしよ）

垣根は心の中で呟く。

そして、今の垣根の心の中の呟きで分かる通り、原作のような『スクール』のリーダー、と言うことはない。研究はされているが、学園都市の『闇』の部分に詳しくないのだ。

「ちよつとお前、来いよ」

垣根は言われるがまま男達に付いて行く。

連れてこられたのは路地裏だった。

「テメエ、慰謝料として金出せや」

「……」

「しかとしてんじゃねーぞ！」

一人の男が垣根に殴りかかる。

「しばらくお待ちください」

「あーあ。疲れた」

垣根は如何にもな連中を振り返り討ちにして、路地裏から出る。

流石は学園都市に七人しかいない超能力者の第二位だ。

「ちょ、待つてください！」

と、少し歩いた所で声をかけられた。

「ん？」

垣根は声のした方に振り返る。

すると、そこには花飾りを付けた女子が居た。

「誰だお前？」

「じゃ、風紀委員です！ジャッジメント 向こうの路地裏で倒れている人に付いて聞かせてもらいます！」

どうやら、通報をきっかけしてきたようだ。つで、駆けつけたはいものの、如何にもな連中は倒れていた為、周りの通行人に聞いたら、垣根が一緒に入っていたのを見ていた人物が居て、それを聞いた女子が垣根を呼びとめたのだ。

「あー。あー。あー。知らない」

「ちょ、待つてください！」

腕を掴まれてしまう。

「事情を聞かせてもらいます！」

風紀委員に逆らうとめんどくさい事になるので、垣根はおとなしく従うことにした。

言っておくと、春風と出会った超能力者は原作のように『性格が破綻しすぎ』てはいないのだ。

第十一話 気分転換 (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

## 第十一話 気分転換（終）

七月二十三日。

御坂美琴。みさか みこと 佐天涙子。さてん るいこ 上条当麻。かみじょうとくま 春風優人。はるかぜ ゆうと 四人は今、ブテイックに居る。

「御坂さん。これ、可愛いですよ」

佐天は美琴が好きそうな服を手に取り、美琴に見せる。

「あ、いや、私はそう言うの……」

「えー絶対に合いますよー。あたし、御坂さんがこれ着てるの見てみたいなー」

「そ、そう？　じゃ、じゃー着てみようかな」

楽しそうに服を選ぶ女子に対して、男子二人はと言うと、

「なあ、優人。これでいいよな……って、寝てるし！」

上条は適当に選んでいた。春風に至っては店内にある椅子に座って寝ている。

「こいつ、ホントに自由奔放だな」

と、上条は気付く。春風が握っている紙を。

「何だこれ？」

上条は春風が握っている紙を手取る。

紙にはこう書かれていた。【買い物終わったら起こして】と。

「おーーーーーい！」

思わず上条は叫んでしまった。

女子二人は驚いて肩を跳ねあがらせる。他の客もなんだなんだ、と上条の方へ振り返る。肝心の春風は起きる気配を見せずに眠り続けているが。

「ちよ、どうしたのよ」

「どうしたんですか？」

女子二人が上条の元へ来る。

「こいつ、寝てんだよ。自分からお前らの服を買いに行くとか言っ

たのに、終わったら起こせって」

「それはないでしょ！」

美琴が叫ぶ。

佐天は隣で数秒何かを考えたかと思うと、ニヤツ、と笑う。

「悪戯しちゃいましょー」

佐天はどこから取り出したのかマジックを持っていた。

「お、それいいな」

「それいいわね」

上条と美琴もノリ気だ。

「じゃ、俺からやらせてくれ」

「いいですよ」

上条は佐天からマジックを受け取る。キャップを外し、ペン先を春風の顔に近付けていく。

後数センチでペン先で当たると言う所で、ガシッ！ と上条の首が掴まれた。

「ッ……！」

上条は眼を見開き、寝ているはずの人物の顔を改めてみる。  
すると。

「何やってんだ、お前？ もしかして、悪戯しようとしてたわけじゃないよな？」

春風は起きていた。と言うか、危険を察知して起きたのだ。

春風はマジックを強引に奪い、

「上条君。このマジックは何かな？」

びくびくと眉が動いている。

「い、いや。上条さんはですね、何もしようとはしていなかったのですよ。つな、御坂に佐天」

そばに居る二人に話を振るが、

「あー、これもいいですね」

「そうね。たまにはこういうのも……」

既に二人は服選びに戻っていた。正確には服選びと言う名を借り

て逃げていた。

「ちょ、それはないですよね！？ 上条さん、ピンチですよ！ 助けてください！」

「上条君、さうって。俺にやろうとしてた事を教えてくださいよ。上条君がやるうとしてた事をやってあげますから。上条君に」

春風はペン先を上条に近付けていく。

「あ、あの、すみません！ ホント、すみません。悪戯しようとしてました。ごめんなさい。許して下さい」

上条は土下座モードに移行した。

ふぁ、と春風は欠伸をする。

「まあ、行こうって言いだして寝てた俺も悪いからな。今回はお互いさまって事で」

春風は落ちているキャップを拾ってマジックにキャップをする。

「ほい」

春風は未だに土下座をしている上条にマジックを渡す。

「ゆ、許してくれるのか!？」

「さっきそう言っただろうが。ほら、服選ぶぞ」

春風は上条を立たせる。

上条は佐天から借りたマジックをとりあえずポケットに仕舞う。

「下はジーパンでいいとして、上だな。……これなんかいいんじゃないか？」

春風が近くに合ったTシャツを取る。

「ん？ どれどれ」

上条はそれを見る。

背中の部分に『爆走！ 世界一！ ナンバーワン！』と書かれていた。

「いや、上条さんはそんな気さらさらないんで」

「あっそ」

春風はつまらなそうにTシャツを元あった場所へ戻す。

「なら、これ何かどうだ？」

今度は赤と黒の派手な色合いのＴシャツを取る。

「ん〜。ちよっと、派手すぎないか？」

「ならこつち」

今度は赤色で髑髏むくろが描かれていて、それ以外の部分は黒一色のＴシャツを取る。

「さつきより派手じゃねーか！」

「ぶ〜。なら、どんなのがいいんだよ？」

「ん〜。これでいいんじゃないか？」

上条は近くに合ったＴシャツを取る。

Ｔシャツには小さい十字架が描かれている。十字架は白で描かれていて、それ以外は黒一色というシンプルなものだった。

「ん、そういや、優人。お前口ザリオはどうしたんだ？ 結構前から付けてないみたいだが」

「ああ。あれな。ちゃんとあるのはあるぞ。箱の中に大事に取っておいてある」

「ぶ〜ん」

上条は返事を返しながら自分の前に服を持って行き、大きさと長さを確かめている。

「ん。これでいいわ」

「そうか？ そんじゃ、下は……このジーパンで良いよな」  
春風は近くに合ったジーパンを取る。

ジーパンは黒色だが、ちよっと青味がかかっている。霧のようにして白色も混ざっている。

「そうだな。これでいいか。ちよっと、試着してくる」

「ほいほい」

上条はＴシャツとジーパンを持って試着室に入って行った。

「ん〜。俺はどうするかな〜」

と。何をするか考えていると、

「優人さん。この後どこ行きます？」

佐天がやってきた。

「あれ？ 美琴はどうしたんだ？」

「試着してます」

「そうなんだ。っで、どんな服選んだんだ？」

「可愛い服ですよ」

ふくん。と興味なさそうに返事をする。

「あれ？ 興味ないんですか？」

「いや、ないわけじゃないぞ。ただ、こういう性格なだけだ……ア  
クセサリーいるか？」

春風はレジのすぐそばにあるアクセサリーを指差す。

「っへ？」

「いや、だから、買ってやるからいるか？」

「いやいや。買ってもらうなんて……」

「いいからいいから。お守りとしてもっつけ」

「お守り？」

「ああ。お守り。お前、銀行強盗に遭遇してみたり不良の取引現場  
に遭遇してみたりと、危ない場面に遭遇する事が多いようだから」

春風は十字架が付いたブレスレットを手に取るが、

「あ。そう言えば、女子って可愛い系のものの方がいいんだよな？  
そう思いなおし、ブレスレットを元に戻して、花型の髪飾りを取  
ろうとするが、やっぱり、十字架の方が守ってくれそうないメージ  
があるよなと思い、十字架が付いているブレスレットも取る。

(どっちにするかな)

結局、めんどくさいので両方買うことにした。

レジに出すと、店員は一回佐天の方を見て、品物も見てから何故  
か笑みを浮かべ、品物をラッピングし始める。それを袋に入れ、満  
面の笑顔で渡してくる。

「ほい」

春風は特に気にする様子もなく佐天に袋ごと渡す。

「ほ、ホントにいいんですか？」

「いいっていいって。そんな高くないし」

春風はニシシ、と笑う。

「ありがとうございます。大事にしますね」

佐天は袋を大事そうに抱えた。

「いいっていいって。そんな高くないし」

そう言う春風を上条は後ろで見ていた。佐天からは春風が前に居るので見えていないが。

(……これは俺も、御坂に買ってやった方がいいのか?)

そんな事を上条は考える。

御坂も女子だ。しかも、セブンスミストの時、あいつは結構可愛いモノが好きだと分かった。だから、尚更欲しいはず。可愛いものは。だが、御坂の分まで春風に買わせるわけにはいかない。

上条は考え、考え抜いた末、買ってやる事にした。

「と言っても、どれがいいんだろうか。ん〜。星型の髪飾りで良いか」

上条は星型の髪飾りを取り、ジーパンとTシャツと一緒にレジに置く。

と、また店員は何故か品物を見た瞬間に笑みを浮かべた。またまた品物をラッピングし、袋に入れる。ジーパンとTシャツは普通に袋に入れた。

(……何でラッピングするんだ? これがこの店のやり方なのか?)  
いくら考えても鈍感な上条が気付くはずもなく。

「何やってるのよ、アンタ?」

後ろから試着が終わった美琴が声をかける。

「あ、丁度良い。ほら、プレゼント」

「え、え?」

美琴は眼をぱちくりさせる。

「星型の髪飾りだが……気に入らないか?」

「わ、私に？」

「お前以外に誰がいんだよ。つうか、現在進行形で袋差し出してるし」

「な、何で？」

「いや」

流石に春風が佐天に買ってたから買ったんだぜ。感謝しろよ。なんて言ったらキレそうなので、何でキレるかは分からないが。

「な、なんとなくだ」

そう答えられた美琴の気持ちは、

（あ、アンタはなんとなくで人にプレゼントを送るのか！）

まあ、当然そうなるわけで。

「……あ、アンタがどうしてもって言うなら貰ってやっても良いけど」

「ん？ 別にどうし」

上条は考える。

もしもここで、御坂が貰ってくれなかったら、星型の髪飾りだけ残る。返品すればいいが、なんかあの定員は誤解しそうだ。て言うか、プレゼントを返しに来るなんてそれはもう、寂しい人兼哀れな人っぽい。部屋に保管しといたら、遊びに来た青髪や土御門つちみかどに見つかる可能性がある。ねぼりはぼり聞かれそうで嫌だ。小萌先生にあげる。これも却下だ。あの先生の事だ。学校につけてくる可能性がある。つで、夏休みが明けて小萌先生の付けてる髪飾りにクラスラスの連中が気付くかもしれない。特に青髪が。『センサー、その髪飾りどうしたん？』的なノリで。もしもそうになったら、あの先生は『上条ちゃんに貰ったのですよ』とか言いそうだ。となると。

「 どうしてもだ。貰ってくれ」

他校の生徒にあげた方がいいわけだ。

『 ぐい、と美琴に押し付ける。』

「そ、それなら、貰ってあげても」

美琴は口ではそう言っているが、明らかに嬉しそうだ。

(こいつ、素直じゃないな。そんなに欲しいなら欲しいって言えば良いのによ)

だが、その表情から鈍感な上条が何で嬉しそうなのか分かるはずもなかった。

「 どうしてもだ。貰ってくれ」

「 ……あいつ、何でプレゼントあげてるんだ?」

春風は呟く。春風の場合、お守りとして佐天にプレゼントしたのだ。それを知らずに上条は「俺も御坂に買ってやった方がいいのか?」と感じてプレゼントを買ってあげたのだ。逆に。そんな上条の心情も春風に分からない訳で。

「 つつか、結構お似合いだなあの二人」

おかしな事を言っていた。

「 おーい。当麻に美琴。着替えて早く次行こうぜ」

「 ああ。御坂、お前も早く買って着替えろよ」

「 ちょ、私、外出時は制服の着用が義務付けられてるんだけど」

「 別に、帰るときに制服に着替えれば良いだろ?」

上条はそれだけ言うと、定員に試着室で着替える事を告げ、定員が笑顔でうなづくと、試着室に入って行った。

美琴はなるようになれ、と言わんばかりに服を買って上条と同じように試着室に行った。

「 佐天、俺先に出てるから」

「 あ、はい」

春風は三人を残して、一人で外へ出る。

外に出た春風はポケットからぐしゃぐしゃになった紙を取り出した。

「 結局、これはどういう意味なんだ?」

どうやら紙は手紙らしく、春風は手紙を見ると首を傾げる。

【一、出来るだけ、強い能力者と関われ。

二、上条当麻を連れ、御坂美琴、佐天涙子と遊びに行け。出来るようなら、インデックスも一緒にだ。インデックスが無理な時は、調整する為に後々手紙を送る。

三、明日から付けなくても良いから、常に切り札ロザリオを持ち歩け

四、今日、青髪ピアスと白井黒子しらいくろこを接触させる。同様に垣根帝督かきねていとくと初春飾利ついはる かざりも接触させる。

五、これからその世界で良くない事が起こる可能性がある】  
と。手紙にはこう書いてある。

「いや、意味分らないから。つま、とりあえず、言われたとおり  
に当麻、佐天、美琴と遊びに来たからいいだろ。一はとうの昔に達  
成してるし。神なら分かってると思うが、多分、重要性を高めるた  
めに書いたんだろう。つうか、切り札を使わなくちゃいけなくなる  
事態なんて来るのか？ あの禁忌と言って良いものをよ」

春風は手紙ビリビリビリ、と破き、ぐしゃぐしゃぐしゃと丸め、  
ポイ、と捨てる。

数秒でそこら辺にいた清掃ロボットがきて手紙を回収して行った。

「この都市はマジで楽だな。治安は悪いが、環境にはいいよな。：

…多分」

そんな事を言っていると、

「優人、終わったぞ」

「私も終わったわよ」

「次、どこに行くんですか？」

上条達が店から出てきた。

春風は振り返る。

「……は？」

美琴の服装に驚いた。

美琴はミニの巻きスカートにTシャツと言う格好なのだが、ミニ  
の巻きスカートは赤と黒で見る者によってはかっこよくもあるし、  
かわいくもある柄だ。

(ここまでではいい。ここまでではいいんだ)

そう。ここまででは良いのだ。問題は。

(Tシャツだよな)

美琴の着てるTシャツには子犬が描かれていた。めちゃくちゃ可愛い子犬が。しかも、寝ている子犬だ。子犬は中央に描いてあり、その周りは白と水色の二色でうまい具合に柄を出していた。

(いや、似合ってる。似合ってるんだが、どう考えても目立つだろそれ！)

春風は心の中で突っ込んだ。

だが、それを顔や行動に出さないのが春風だ。

「じゃー、次はゲーセンでも行くか」

そう言っただけでゲームセンターを指差す。

確かに美琴の服装については顔や行動に出してはいないのだが、どう考えても自分の行きたいところである。

結局、どこか抜けてるのもまた、春風だった。

「いいわね」

「アタシもいいですよ」

「俺も良いぞ」

四人はゲームセンターへ向かった。

「御坂。お前、いい加減諦めろって。金なくなるぞ」

「御坂さん、ホントに止めた方がいいですよって」

上条と佐天はクレレンゲームの前で唸ってる美琴に忠告する。

クレレンゲームの景品は『ゲコ太』と言うカエルのキャラクターだ。

「べ、別に欲しいわけじゃないのよ」

既に八〇〇円も使ってしまったっている美琴の言葉には説得力なんてなかった。

「お前ら、さっきから何やってんだ？ ずっと同じクレレンゲームの

前に居て」

何処かに行っていた春風が戻って来て、三人に訊ねる。

「ん？ いや、な。御坂がそのカエルを……って、お前が持つてるその大量の景品はなんなんですか!？」

上条はビシツ、と春風が持つている袋を指差す。袋の中には大量の景品が入っている。

「ん？ この景品の大半はクレンゲームの景品だぞ。他のはだな。

さつき、コインのゲームやってたんだが、めちやくちゃ増えたんだよ。っで、このコインをどうしようかと思った所、コインを一定の枚数集めれば交換してくれるって書いてある紙を発見し、とりあえずコイン持ってもしょうがないから交換してきたんだ。つっても、余計に邪魔になったが」

はぁ、とため息をつく。

「当麻。全部やる」

春風は景品の入った袋を上条に押し付けた。

こんなのいらねー、と袋を押し返そうとした時、それに気づいた。袋から出ている緑色の手に。

「……」

上条は無言でそれを取り出す。

袋から出てきたのは間違いなく、美琴が取るうとしているゲコ太そのものだった。

「なあ、御坂」

「何よ」

美琴は不機嫌そうに振り返る。

「これ、いるか？」

上条は出てきたゲコ太を美琴に見せる。

その瞬間、美琴の眼が輝きだした。

「い、いいの!？」

「あ、ああ」

目を輝かせている美琴の勢いに圧倒されたのか、上条はたじろぐ。

「ありがとう！」

美琴は上条からゲコ太を受け取り、抱き抱えた。

全員の視線が美琴に集中する。

「ッ！！」

全員の視線に気づいたのか、美琴は咳払いをする。顔は真っ赤だ。

「こ、こんなの貰ったって、ちつとも嬉しくなんかいいわよ。だって、ただの両生類じゃない」

ハッキリ言っつて、何を言っつても手遅れだ。

「なー。俺、腹減ったんだが、そろそろ飯食いにっこうぜ」

春風が助け船を出す。

「そ、そうだな。俺もそろそろ腹減ってきたし」

「あたしも、お腹ぺこぺこです」

二人も乗ってきた。

「そうそう。少女趣味な一面があつても、気にしないのが優しさだしな」

だが、その船が安全という保証がなかった。

春風の船は言うならば、見かけは豪華客船だが、いつの間にか見えないうちに穴が開いている危ない船である。いつも頼りになる分、余計にたちが悪い。

美琴の顔は見る見るうちに赤くなっていく。

「べ、別に、わ、私は、しょ、少女趣味なんて……」

今の美琴は誰が見てもテンパっている。

そんな美琴の背中を押すようにして佐天が外へと連れ出す。上条は景品を近くの定員に渡し、春風の口を抑えながら外へ出た。

四人は今、食べ放題に来ていた。

「むぐむぐむぐぐ」

佐天と美琴が先に取りに行った為、残りの二人は座って待ってい

る。

二人も待つ必要はないが、何故か二人で待っていた。そして、春風はもがいていた。

「むぐ、むぐ！ むぐぐ！ むぐぐぐぐ！」

春風の口は上条の右手で抑えられているのだ。

あの後、一回解放されたのだが、食べ放題に来てからまた春風がやらかしてしまったのだ。

落ち着いた美琴に『普段は正義感が強くて負けず嫌いなお前に少女趣味があつたなんてな』と言ってしまったのだ。

一応その後、上条と佐天に言われた為、謝つたのだが、またおかしなことを口走らないようにと上条に口を抑えられたのだ。

「むぐ！ むぐぐぐぐ！ むーぐ！」

「おとなしくしろって。またおかしなことを口走られたら困る」

春風は右手で携帯を取り出し、開く。

「ん？ 何やってるんだ？」

上条を無視して、カタカタカタ、と何かを打ち込み始める。

そして、打ちこみ終わると画面を上条に見せた。

「なになに。『手を放さない、美琴にプレゼントを買ってた事を土御門と青髪に言う』……って、そしたらお前だって佐天になんか買ってたじゃん」

「……むぐ！ むーぐ！ むぐぐぐぐぐぐ！」

（くそ、こうなったら、力尽くだ）

春風が上条の右手首を握ろうとした所で、

「アンタら、行って来ていいわよ」

「上条さんに優人さん、行って来ていいですよ」

二人が戻ってきた。

「優人どうするんだ？」

「別にもういいわよ。そこまで気にしてないから」

美琴がそう言った為、上条が右手を離す。

「もがいてたせいで疲れた」

春風は肩を落とした。

「でも、この後、回る所全部アンタの奢りね」

美琴が春風を睨みつけながら言い放った。

一瞬にして春風の血の気が引いて行く。

「……さらば！」

春風は全力で自動ドアまで走る。

もうすぐ。もうすぐで、逃げられる。

そう思った時だ。足に何か当たる。何か当たった為、春風は

バランスは崩し、

「ぬわ！」

転んだ。

「冗談よ、冗談」

頭上から声が降り下りてくる。声の主は見なくても分かる。美琴だ。

「ほ、ホントに？」

「ホントよ。だから、戻ってくる」

「はい」

春風は立ち上がり、席へ戻った。

その後、四人は制限時間まで食べて喋って、楽しく食事をした。

#### 垣根SIDE

ジャケット  
風紀委員第一七七支部。ここに、垣根は居た。

「だ〜か〜ら〜。喧嘩売ってきたから返り討ちにした。正当防衛なんだ」

垣根はテーブルを挿<sup>はさ</sup>んで座っている花飾りの女子、初春に言う。

「で、ですけど、もっとやり方はなかったんですか？」

「ない」

きっぱりと言い放った。

「な、ないって、もっと考えてくださいよ」

「ないものはない」  
垣根は正当防衛で押し通すつもりだ。

青髪ピアスSIDE

「これに懲りたら、女子に手ーだしたらあかんよ」  
青髪ピアスは倒れている如何にもな連中に告げた。

「は、はい」  
ピクピク、と痙攣けいれんでもしてるかのように指を動かしながら返事をする。

「さーって。帰りましょ」  
青髪ピアスが立ち去ろうとした時、  
「ま、待ってくださいな。風紀委員ジャッジメントですのー！」  
追いついた白井が腕章を見せる。

「この倒れてる方たちについて詳しく聞かせてくださいな」  
そう言えば、助けた女の子、風紀委員ジャッジメント言ってたな。もしかして、  
助けなくても平気だったんとちゃう？

今頃そう思った所で、意味はない。  
だからこそ。

「正当防衛やねん」  
ここにもう一人、正当防衛で通そうとする者が居た。  
この後、青髪は第一七七支部に連れて行かれる事になった。

第十一話 気分転換 (終) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございます。

## 第十二話 神裂火織（初）

七月二十三日。

小萌先生のアパートから六百メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、ステイルは双眼鏡から目を離れた。

「インデックス  
禁書目録に同伴していた少年達の身元を探りました。……禁書目録は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方へ振り返らずに答える。女はこの間ステイルを連れて消えた二メートル以上もある日本刀を持っていてる女だ。

「生きてるよ。でも、気になる点は現時点で二つあるね」

気になる点？ と女は首を傾げる。

相変わらず振り返らずに続けた。

「ああ。一つは、禁書目録かのじよが生きていると言うことは、向こうにも魔術の使い手がいる可能性が高い事。もう一つは、僕が目を離している隙に僕を倒した少年が何かをやったのか、禁書目録かのじよの姿が消えた事だ。ホントに一瞬。目を離れた時間は数秒もなかったはずなんだけどね」

「消えた？ それは、大丈夫なんですか？」

「多分大丈夫だと思うよ。あの少年は頭がキレるからね。多分、条件を満たした者しか見えなくしてあるんだと思うよ。なんせ、看病してた女の子の姿も見えなくなってるからね」

「魔術、ですか？」

「いいや。違うと思う。あの少年からは魔力が感じられなかったからね。それよりも、あの二人は一体何者なんだい？ ただの少年がこんな危ない事に首を突っ込むとは思えないからね」

それですが、と女は言いづらそうに口を開いた。

「インデックスを治療しに行った少年の方はまだ情報がそんなに集まっていないので、ハッキリとした事は言えません。ですから多分、

問題はないでしょう。ですが、交友関係は厄介でしょうね」

「どういうことだい？ とやっとステイルは女に振り返った。

「あの少年と、もう一人の少年もそうですが、学園都市に七人しかいない超能力者シキルの第一位、第二位、第三位、と関わりがあるのです。特に、第一位と第二位とは親しい仲ですね」

「つまり、下手に手を出せば、学園都市に居る超能力者のトップ3が出てくるかもしれない、と」

ええ、と頷く。

「あの二人の交友関係は分かった。禁書目録カノシキを連れていった少年の方がとりあえず危険じゃないと言ったことも。つで、だ。僕を倒した、あの少年の方はどうなんだい？」

「……」

女は口を閉じた。

「何も分からなかったのか？」

いえ、と首を横に振る。

「あの少年の異能は分かりました。ただ」

「ただなんだい？」

「信じられないんです。あの少年の異能を」

「信じられない異能？」

「あの少年の異能は『六道輪廻』と言うものらしいのです」

六道輪廻、とステイルは首を傾げる。

「全ての生物が死ぬと生まれ変わって、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天界道のいずれかに行くと言う奴かい？」

「そうですね。多分、あの少年の『六道輪廻』は六道を廻った時に授かるスキルだと思われます」

ステイルは驚愕し、口から煙草を落とした。

「そ、それじゃ、六つの冥界を廻っただけでも言うつもりかい！？」

「いえ、廻ってはいないでしょう。ただ、本来廻った時に授かるはずのスキルが使える、と言うだけで」

「どちらにしても、化け物じゃないか！」

その通りだ。六道全てを廻った時に授かるスキルが使えるなんて人間、普通じゃない。普通であるはずがないのだ。

「ええ。確かに化け物じみた異能です。ですが、ない話ではないでしょう。私のような聖人も居るのですからね」

女は言うが、ステイルは少年と戦った時の事を思いだしていた。

あの少年は七階から飛び降りたと言っていた。あの時はありえないと思っただが、今思えばスキルを使ったのかもしれない。そうなら、あり得る話だ。

そうだとして、だ。とステイルは頭をフル回転させる。

あの少年はその飛び降りるときにしかスキルを使っけてない！

「あり得ない」

そう呟く。

「何がですか？」

「もしも、君の言うことが本当だとしたら、アレは六つのうちのたった一つのスキルで僕を倒した事になるじゃないか。しかも、飛び降りるときにしか使っけていない」

「そ、それは本当ですか!？」

「ああ。多分だけどね」

ステイルは煙草を取り出し、火をつけ、口に運ぶ。

「ねーちん。何やってるんだにゃー？」

と、二人の耳に声が届いた。

「あなたこそ、何をやってるんですか？」

女は振り返る。

振り返るとそこには、金髪にサングラスをした人物、土御門が居た。

「ねーちんの姿が見えたから来たんだにゃー」

「神裂<sup>かんざき</sup>。ちよつど良いじゃないか。あの少年に付いて聞かせてもら

おう」

神裂は少し考える。

「……そうですね。土御門。あの少年はいつたい何者なんですか？」

「あの少年じゃ分からないにやー」

「あの赤い瞳をもった少年だ」

ふー、と煙を吐き出しながらスタイルが言う。

「優人の事だな」

土御門は軽い口調から一変し、マジメに話します。

「あの少年は一体、何者なのですか？」

神裂は土御門を見る。

「それが、俺でも良く分かっていないんだ」

「分かっている、とは？」

「言葉のままの意味だ。多分、アレイスターもあいつの全てを分かっちゃいない。優人はまだ何かを隠してる可能性がある」

まあ、と。土御門はいつもの調子に戻り、

「優人に手を出すなら気を付けた方がいいって事だにやー。特に幻術にはにやー」

それだけを言うと、土御門は去って行った。

「気を付けた方が言い、ですか」

神裂はまるで自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

「つで、青髪。何でお前はこんなところに来てんだ？」

「そう言うカッキーは何で居るん？」

「いや、なんか見るからに不良じみた奴に絡まれ、返り討ちにしたんだ。そしたらなんか連れてこられた。正当防衛だと言ってんのに」

青髪。ピアスと垣根かきねは二人の風紀委員ジャッジメントの正面に座っている。

「えーつと。白井いしさん。どうしたんですか？」

「正当防衛みたいですわよ」

「こちらの方もですか」

「なあ、なあ。白井ちゃん。僕は親切で助けてあげただけやねん。

返してくれへん？」

「まあ、そんなんですよ。でも、一応」

【緊急速報です。衛星にてサハラ砂漠に巨大な黒い何かが存在しているのが確認されました】

付けてあったテレビからそんな声が流れてきた。

「へ〜。なんかすごそうですね〜」

「初春。事情聴取をしてくださいな」

「あ、はい!!」

【な、何と！ 巨大な黒い何かは徐々に大きくなっていつているようです】

「ほへ〜」

「初春。日本語が分かりませんか？」

そんな会話をする二人の反対側に座っている青髪ピアスと垣根は顔を見合わせ、頷く。

「さよならやね」

「じゃーな」

いきなり二人は立ち上がり、窓に向かって走り出す。

「ッッ!!」

白井と初春も立ち上がるが、その時にはもう、二人は窓から飛び降りた後だった。

はあ、と白井は溜息をつく。

「なんで優人さんと言い、皆窓から逃げるんですの」  
心底疲れたように言う。

「それは、白井さんが怖いからですよ」

ニッコリ笑って何気に酷い事を言った。

白井は初春の後ろに移動し、両拳で頭を挟み、ぐりぐりと動かす。

「い、痛いですよ！ こんな事するより追いかけてくださいよ!」

「ハッ！ 忘れてましたの」

白井は窓に近寄り、窓から顔を出す。だが、二人の姿はもうなか

った。

「まあ、いいですの。今回は二人とも正当防衛ってことなので」

「でも、それじゃ」

「初春。テレビを見てたのは誰でしたっけ？」

「そうですね。二人とも正当防衛って事で今回は見逃しましょう」

結局、青髪ピアスと垣根は正当防衛って事で終わった。

「「じゃーな」」

日が完全に沈んだ暗い夜道。上条と春風は佐天と美琴に手を振る。

「今日は楽しかったぜ。また今度どっか行こうな」

上条はホントに楽しかったのだろう。笑顔でそう言った。

「佐天に美琴。俺も楽しかった。ありがとな」

春風も上条に続いて言う。

「あたしも楽しかったですよ。また今度どっか行きましょうね」

「私も楽しかったわ」

佐天と美琴も言う。

春風と上条は佐天と美琴の姿が見えなくなったのを確認して、歩き出そうとする。

だが、

「この間の奴と言い、ばればれだ」

春風は行き成り言い捨てた言葉によって、春風はもちろん、上条も立ち止まった。

「どうしたんだ、優人？」

「どうしたもこうしたもねえよ。あからさまなやり方してよ。おかしいだろ、今は午後八時三〇分。まだまだ人が居ていい時間だ。なのに、周りには人が居ない。どうせ、また魔術がどうのこうのなんだろ？」

「流石ですね。ステイルが人払いの<sup>Opia</sup>ル<sup>ルン</sup>印を刻んでいるんですよ」

一〇メートルほど先の滑走路のように広い三車線の車道の真ん中にそれは居た。二メートル以上もある日本刀を持った女が。

上条はステイル？ と首を傾げる。

「この間の寮に現れた赤髪の事だ」

春風が言った瞬間、上条は女を睨みつけた。

だが、女は関係なさそうに続ける。

「この一带にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配なさらずに」

ヤバい。そう上条は感じた。いつの間にか熱くなっていた頭が冷える。今目の前に立っているそれは、次元が違つたと。本能が語っていた。

だが、春風は違つた。全然動じていない。相手の出方を窺っているのだ。本当なら、こんなに冷静ではいられないはず。けど、今の春風はこの間のステイルと戦つた時よりも冷静でいられた。

目の前の敵の方が明らかに次元が違つてもだ。その理由は簡単だった。周りに人が居ないからだ。周りに人がいなければ、幻術を使つて相手が暴走した時も大丈夫だと考えたのだ。

「神浄の討魔、ですか　良い真名です」

けれど、それは目の前のそれも同じだった。絶対的な何かを持っているのか、冷静だ。

冷静な女が平然に口を開いた事に、流石に春風もヤバいと思う。もしも、目の前の敵が眼を瞑つて戦えたとしたら、幻術など意味が無くなる。そして、そんな事が出来るとしたら、戦闘経験も強さも自分などとは比べ物にならないだろう。

確かに俺春風もこの間不良相手に眼に頼らずに戦つた。だが、あの不良と目の前のそれとは次元が違つた。

だからこそ、春風もヤバいと思つたのだ。

「……、テメエは」

今まで黙っていた上条が口を開いた。

「神裂火織かんだき かわり、と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないです」

神裂は本当にもう一つの名を名乗りたくないのだろう。だが、そんな事は春風には関係なかった。今自分がするのは眼の前のそれと会話をすることじゃない。どうやったら、この状況を打開出来るか。ただ、それだけだ。

「もう一つ?」

上条は訊ねる。

「魔法名、ですよ。ステイルが言ってたように『殺し名』です」

上条は突然の言葉に後ずさる。

殺し名。本当にそんな物があるのか、そう訴えるようだ。

「率直に言って、魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」  
ゾクツ！ と得体のしれない何かに当てられたかの様に背中から全身に掛けて寒さを覚える。

自分の右手には全ての異能を打ち消せる力がある。だが、それが魔術なんてものに効くとは限らない。この間のステイル戦では上条は戦わなかった。だから分からないのだ。

いや、と首を振る。インデックスが言ってたじゃないか。魔術を使って治療をするときに『この場における最良の選択肢は、あなたがここから立ち去る事です』と。つまり、あの場に自分が居た時、魔術がぶち殺されてしまっていたんだと考えられる。

上条は右手を見てから神裂に視線を戻した。

「……嫌だ、と言ったら?」

「仕方ありません。名乗ってから、彼女を保護するまで」

そう神裂が言った時、春風の中で勝利への道が出来上がる。

「どうやって」

そんな声に二人が一斉に振り向く。

「どうやって、保護するつもりだ?」

「どうやって、とは?」

「そのまんまの意味だ。俺達が出かけてる間、お前らがいつ襲って

くるか分からない。そんな状態で俺が何もしないとでも思ったのか？」

ふん、と鼻で笑う。

「今、インデックスの姿は俺と当麻。それから、小萌って言う教師にしか見えない。そんな状態で、どうやって連れ出す気だ？」

「それなら魔」

「魔術で見つけられるはずないだろ」

神裂の言葉を遮り、言い捨てる。

「魔術で見つけられるような中途半端な事はしない。そして、姿が見えない以上、へたに攻撃を仕掛けることはできない。間違って攻撃でもして、インデックスを巻き込んで殺してしまうかもしれないからな」

「なら、貴方がその小萌とかいう教師に聞くだけです」

なるほど、と春風は頷く。

「所詮、その程度の連中ってことか」

「何を言っているのですか？」

「さっき言ったはずだ。中途半端な事はしないと。残念だが、小萌先生にもこっそりと同じ事をしといた。小萌先生も俺と当麻にしか見えない。そして、俺と当麻は答える気が無い。もう一回訊く。どうやって、保護するつもりだ？」

なるほど、と今度は神裂が頷く。

「本当に厄介みたいですね」

神裂の言葉に、上条も心の中で同意していた。

眼の前に居るそれも確かに次元が違う。だが、春風も春風で何かが違う。次元が違う訳じゃない。だが、何かが違うのだ。

だが、実際は違う。春風はただ、演じているだけだ。眼の前の次元が違うそれに吞まれる前に呑み込んでしまっただけなのだ。

だから、春風は続ける。このまま、一気に呑み込んでしまいたいから。

「どうやら、ないみたいだな」

今度は肩で笑う。

そして、神裂を睨みつける。

「ないようなら、消える。この学園都市は鬼ごっここの会場じゃない」  
普通ならばここで立ち去るか逆切れするだろう。それか、春風の  
したように呑まれる前に逆に呑み込んでくるか。

なのに、眼の前のそれは違った。

「残念ですが、そうはいきません」

神裂は冷静だった。まるで、言われた事全てを気に留めていない  
ように。

春風は心の中で舌打ちする。

失敗だ。春風は失敗したのだ。それは、春風の中で出来上がって  
いた勝利への道が突如上から降ってきた隕石に邪魔されるほど想定  
外の出来事だった。

次の方法を考えている春風を置いてくかのように上条が走りだし  
た。

「おい！」

春風は叫ぶ。だが、上条は止まらない。

上条と神裂との距離は八メートルにまで縮む。

神裂の持っている日本刀の長さは二メートル以上。その長さは女  
が振り回すにはでかすぎる。仮に扱えたとして、接近してしまえば  
そのでかさが裏目に出る。なら、簡単な話だ。接近戦に持ち込んで  
しまえばいいのだから。

けれど、それは間違いだとすぐに思い知らされることになる。神  
裂は一瞬にして刀を振り抜いた。振り抜いたのだ。それだけのはず  
なのに、ただ、刀を振り抜いただけのはずなのに。上条の斜め右後  
ろにあった風力発電のプロペラが音もなく斜めに遮断された。

上条の足は止まっていた。いや、上条だけではない。春風も思考  
を停止していた。

見えなかった。あまりに速すぎて、何が起きたか分かっていない  
のだ。

二人の時を動かすように飛ばされたプロペラが地面に落下する。  
上条と春風の額に冷や汗が浮かんだ。

「もう一度、問います。魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいの  
ですが」

「な、なに、言つて やがる」

上条は必死に口を開くが、声が震えている。それだけでなく、足  
も震えだしていた。

無理もない。まさに、眼の前のそれは次元が違うのだから。

春風は右眼の眼帯を外す。眼に書かれている数字が四に変わる。

右眼から闘気オーラを出して格闘能力を上げる修羅道だ。

「それは一体、何ですか？」

神裂は春風の右眼から出ている黒いに闘気オーラに気づき、訊ねる。

「異能。そうとしか言いようがない！」

春風は地面を勢い良く蹴る。

弾丸と言えるほどではないが、普通ではありえない速度で神裂に  
近付いて行く。

「なるほど。確かに速いですね。ですが、私にしたら遅い方です」

神裂の右手一瞬ブレて消える。

轟轟！ ありえない速度で何か春風に襲い掛かった。

「ッ！！」

春風の体は吹っ飛ぶ。

咄嗟に上条が動いた。春風を受け止められる位置に移動する。吹  
き飛ばされてきた春風の体を抱く様にして受け止めた。

「た、助かった。サンキュー」

「あ、ああ」

上条は驚いていた。飛ばされた本人である春風よりも。

上条は春風の右目に闘気オーラ時に戦闘能力が上がるのを知っていた。

なのに、それなのに、春風は簡単に吹き飛ばされてきたのだ。驚か  
ないはずがない。

「ちよっと、ヤバいかもな」

春風は自らの足で立ち、呟く。

上条は春風と並ぶように前が出る。

「一体、何が起きたんだ？」

「分からない。だが、分かる事が一つだけある。あいつはマジでヤバイ」

「ごくり、と唾を飲む。

「今度は、俺が行く」

上条が一步前に出た。

「いや、当麻。下がれ」

「何でだよ」

「あいつが暴走しないとは限らないからだ」

春風の右眼に書かれている数字が四から一に変わる。相手に幻を見せて永遠の悪夢により精神を破壊する事が出来る能力、地獄道だ。

上条は頷き、数歩後ろへ下がる。

「一体何をやる気か知」

言い掛けた神裂が口を閉じた。

それはそうだ。さっきまで何の変わり映えもなかったはずの車道なのに、今では別世界に飛び込んだと言われても不思議でないぐらゐに変わっていたのだ。あたり一面が、凍りついていたのだ！

「な、なんですかこれは！？」

流石に慌てたのか、先程まで冷静だった神裂が叫ぶ。

その叫びを無視するかのようには春風は手の平を神裂に向ける。向けられた手の平に鋭く上がった氷が出来上がる。言うならば氷のナイフだ。

「避けないと、怪我するぞ」

春風が言った瞬間、氷のナイフが神裂に向かって発射した。

「ッ！！」

またもや神裂の右手がブレて消える。

だが、何も起きない。氷のナイフは神裂に向かって進んでいる。けれど、それで神裂はなんとなく気付いた。

(切れないと言うことは、実態を持っていない?)

気付けばなんと言うことはなかった。神裂は再び冷静になる。

だが、右肩に氷のナイフが当たる直前で思ってしまう。『やはり、本物ではないか?』と。そう思ってしまったら、それは存在していないが存在している事になる。

服が破れ、その部分から血が垂れた。

「今度は、かするだけじゃ済まないぞ」

春風は言い捨てた。まるで、今のはわざと外したんだと言うかのよう。

神裂はそんな春風の言葉よりも気になっている事があった。一瞬眼にただけだが、明らかに車道が凍りつく寸前に春風の眼の数字が変わっていた。

神裂は思い出す。春風という人物の能力について。春風の持つ異能の名は『六道輪廻』。右眼に書かれた数字によって能力が変わることを。

いや、それよりも、と。神裂は土御門の言っていた事をひっぱりだす。

(確か、最後に幻術かどうのこうのと言っていた気が……)

神裂は考える。行き成り車道が凍りついた事。切れなかったはずの氷のナイフが自分の肩に当たった時、服を切り、皮を切って行った事。幻術……いや、幻覚と言うものが、あったとして。その幻覚にリアリティを感じた時に、幻覚を脳が存在すると認識してしまうのだとしたら……全てが繋がる!

神裂は両目を瞑り、そして開く。

「本当に厄介ですね。ですが、分かっただけじゃなんでもありません。幻覚、ですね」

春風はため息をつく。

「氷のナイフを消滅させなかったとはいえ、こんなに早く気付かれるなんてな」

春風は殺すつもりはない。その為、手を抜いていたのだ。とは言

つても、ここまで早く気付かれるのは予想外だったのだろう。さまざま数字を変えた。四の修羅道に戻したのだ。

マジでヤバイ、と春風は後ずさる。もう、幻術は通用しない。また、修羅道も神裂に取っては何の脅威にもならない。

となると、残っているのは後四つ。だが、残りの四つは使わないようにしている。一つはもつとも醜く危険なスキルの為。一つは地獄道とは別の意味で強すぎる能力だから。一つは相手の能力を把握していないとどうしようもない為。一つは最悪の手段だからだ。そもそも、人間道以外は使う気が無い。まだ、この都市で知る者は居ないのだ。わざわざ教えるようなことはしたくない。

つまり、もう春風には後がないのだ。

はあ、とため息をつき、当麻にだけ聞こえるように言う。

「しょうがねえ。当麻。俺が突っ込むから、お前は俺の後ろに隠れるようにして走って来い。お前が思いつきりぶん殴ってやれ。どんな魔術がこようとお前の右手なら平気だ」

「ああ。分かった」

春風は思いつ切る地面を蹴る。その後ろに隠れるようにして上条も走り出す。

「何度やっても、無駄です」

神裂の右手がブレて、消える。

何度見ても分からない衝撃が春風を襲う。

春風は前で両手を交差させ、来るべき攻撃に備える。

「ッ！！」

春風の交差した部分は切れ、そして吹き飛ばされる。

上条に当たらないようになんとか体を捻る。

上条は右手を前に突き出す。

イマジンプレイカー

だが、得体のしれない攻撃は右手で消すことはできなかった！

消す速度を上回って再生している場合は処理しきれないかもしれない。けれど、これは根本から違うような気がした。

上条の右手の平が切れ、腕も数か所切れ、そして吹っ飛ばされた。

先に吹っ飛ばされていた春風の横に上条がゴロンゴロンと飛ばされてきた。

「くー！」

春風は立ち上がる。

「こうなったら、使うしかない、か」

春風自分に言い聞かせるように呟く。

「当麻。多分、この勝負、俺一人じゃ勝つことは無理だ。まだ俺はうまく使いきれないからな」

「お前、やるのか？」

「そうするしかないだろ。このままじゃ、負けるからな。大丈夫だ。冷静な時は暴走しないからな」

そう言った春風の雰囲気が変わる。

それを感じ取ったのか、神裂は様子を見る為に一步下がる。

「見せてやる。第五のスキル、人間道を」

瞬間。春風の右に書かれている数字が五へ変わる。

轟！ と闘気が溢れ出した。どす黒い闘気が。まるで、今の春風の姿は闇を纏っているかのようだ。

だが、まだ終わらない。春風の持っている六道輪廻は原作よりも強力になっているのだ。スキルによっては使い勝手も良くなっている。特に、人間道は。危険だが、使いこなせば強力だ。

春風の使う地獄道は闘気を自由に操る事が出来るのだ。闘気で武器を作ることでも立てを作ることでもできるし、衝撃を和らげるクツシヨン代わりにすることもできる。そして、翼も作れる。

どす黒い闘気が春風の背中に集まって行き、一瞬で巨大な翼を完成させた……かと思うと、一瞬で弾けた。

「まだ、うまく操れないか」

そう呟く春風に対して、

「天使、ですか？」

神裂はそう訊ねた。

「いや、と春風は首を横に振る。

「ぜんぜん別物だ。ただのまねごと、かな。つっても、うまく作れないんだがな。だが、作れなくてもそんな問題はない！」

春風が地面を蹴る。すると、修羅道の時とは比べ物にならない速さで神裂に近付いて行く。

良く見ると、靴の底からどす黒い闘気が噴射していた。まるで、ブースターのように。

上条も春風に続く様にして走り出した。

「何度やっても無駄です」近づいてくる二人を見据え、「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを瞬殺と呼びます。あるいは必殺でも間違ありませんが」

言われても、二人は止まらない。

「何があなたたちをそこまで駆り立てるのは分かりませんが……」先に近づいた春風が拳を握り、殴りかかる。

だが、神裂は数歩横にずれるだけで回避した。春風は身体を捻って無理に殴りに行こうとするが、それよりも早くに神裂が蹴りを入れる。

「ガッ！」

春風が吹き飛ばされる。

ダンッ！ と上条の斜め後ろで春風が身体を地面に打ち付けた。

春風は咄嗟に蹴られる時と地面に身体を打ち付ける際にどす黒い闘気を操り、衝撃を和らげたが、身体は動けそうもなかった。そもそも、和らげてなかったら下手をすれば死んでいたのだ。生きているだけで褒めてほしい。

（ち、違いすぎる。ダメだ）

ここで、春風の悪い癖、負け癖が出てきてしまう。

（勝てるわけがない）

所詮、六道輪廻と言う異能を手に入れても、勝てない相手が居る。それは当たり前だった。なのに、それなのに、いざという時は人間

道を使えばいいと思ってしまった。勝てると思ってしまった。

（無理なんだ。所詮、一度死んだ俺が、誰かを救おうなんて馬鹿げてたんだ。仲間の日常を壊させやしない？ そんなの、出来っこない。俺は神じゃないんだ）

春風は顔だけを上げる。

見ると、上条も吹き飛ばされていた。

だが、上条は立ち上がった。

「やっぱりアンタ、魔術を使っただけじゃなかったのか」

その言葉に春風は驚愕する。

（あんだだけ強くて、まだ魔術を使っただけじゃなかったのかよ。マジで、勝てるわけねーんだ。俺なんてただの負け犬だ。一度死んで、転生させる際に強力な異能<sup>ちから</sup>を得ようが、所詮は負け犬。負け犬が勝てるはずないんだ。正義の味方ならともかく……）

いや、と春風は首を横に振る。

（正義の味方だろうがなんだだろうが、今の俺のように負け犬思考じゃ負ける。負け犬思考を持ってる時点で戦う前から俺は負けている。たとえ正義の味方だろうが、英雄だろうが、勇者だろうが変わらない。まずは負け犬思考を捨てなきゃ、変われない）

そう思うが、人はそう簡単に変わりはしない。負け癖を捨てようと思っても捨てられない。

（そうだ。思えば、転生前から何も変わってなかったじゃないか。孤独孤独言ってるが、結局は変えようとしなかった俺が悪いんだ。何も周りだけが悪かったんじゃないんだ）

ズキッ！ 蹴られた部分から全身に痛みが走り続けている。痛くて動ける気がしない。

「うるせえつつつたんだよ、ロボット野郎！！」

そんな叫び声が、春風の耳に届いた。

春風は上条の方を見る。上条は血まみれの拳を握り、神裂を殴ろうとしていた。

が、殴るよりも先に神裂のブーツの爪先が上条の水月<sup>みづおち</sup>に突き刺さ



まるで言葉になっていないような咆哮を上げる。

春風は力を入れる為に叫んだのだろっが、逆にそれはあだとなつた。神裂に気づかれたのだ。

神裂は春風に身体ごと向ける。

（多分、また良く分らない攻撃が来る。だが、眼を凝らせれば見えるはずだ。怖がるな。瞬きするな。息さえするな。今は相手を殴ることだけ考えてればいいんだ！）

春風はそう自分に誓い、拳を振り上げる。

だが、そんな風ふうに誓った所で、何の意味もなさなかつた。春風が拳を振り下ろすよりも先に、神裂は黒鞘で春風を殴つたのだ。

春風は勢い良く地面にたたきつけられる。

先程同様に春風は殴られる瞬間と地面にたたきつけられる瞬間に闘オーラ気を操つて衝撃を和らげる。

今の春風はボロボロだつた。いや、春風だけじゃない。上条ももうボロボロだ。

そんなボロボロの二人を見下ろすように神裂は見る

「もう、いいでしょう？」

神裂の声は痛々しく小さかつた。

（なんで、そんなに痛々しそなんだ？）

痛々しく小さな声で神裂は続ける。

「あなた達が彼女にそこまでする理由はないはずです。ロンドンでも十指に入る魔術師を相手に三〇秒も生き残れば上等です、それだけやれば彼女もあなたを責めることはしないでしよう」

春風は神裂の言葉に心の中で笑っていた。

上条がどうかは知らない。けれど、春風は『インデックスの為に戦っていない』のだ。なら、誰の為に戦つてるのか。そんなの分からない。もしかしたら、上条の為かもしれない。もしかしたら、自分が気付いてないだけでインデックスの為かもしれない。もしかしたら、自分の為かもしれない。もしかしたら、自分でも上条でもインデックスでもない誰かの日常を魔術師なんて連中に壊されたくない

いから戦ってるのかもしれない。

いくら考えても分からない。一体、誰の為に戦ってるのか。何のために戦ってるのか。だが、一つだけ分かる事がある。言える事がある。

（俺は今、守る為に戦ってるんだ。それが何なのかは分からない。人なのか人じゃないのか。けど、分からないからどうしたって言うんだ。結局、どうしようが神裂とか言う魔術師を倒すんだろうが）

春風は冷静になって考える。どうすれば勝てるのか。

春風は勝つ方法を考えるはずなのに、違うことを考えてしまった。（こんなに強いくせに、インデックスを未だに保護できてないってどういうことだ？ それに、こんなに強いなら背中に傷を負わせなくても良かったはずだ。なのに、どうして）

これほどまでに強いのに女の子一人捕まえられていない。しかも、保護する為に背中を傷つけた。それはなぜか。そんなの分かるはずもない。

だから、口を開く。

「何で、そんなに強いのに未だに保護できてないんだよ。それに、そんなに強いなら背中を斬らなくても強引に連れてけるだろ。なのになんで、背中を斬ったんだ？」

「……私だって、何も背中を斬るつもりはありませんでしたよ」

その言葉に上条と春風は顔を見合わせる。

「どういうことだよ？」

上条が訊ねる。

「彼女の着ている修道服は『歩く教会』と言って本当なら絶対に傷つくはずなのです。だから斬ったのに……」

二人は神裂の言っている意味が分からなかった。

春風は膝に手を突き、立ち上がる。

春風にはもう一つ疑問に思っていた事がある。

「て言うか、何で、インデックスを保護しようとしてんだ？ 悪用されるかもしれないってのは聞いた。だが、まだ納得できない。確

かに今日、俺はインデックスの姿をみえなくした。けど、昨日は違  
つたはずだ。まだ姿が見えていた。悪用される事を恐れるなら、普  
通は怪我をしていても連れていくだろ。なのに、お前らはそうしな  
かった。何でだ？」

神裂は俯く様にして口を開く。

「私達の目的は、悪用される事を恐れて保護するのではないんです。  
勿論、上の方ではそう考えてる者もいるかもしれませんが。けれど、  
私達は、あの子を殺さない為に保護をするんです」

は？ とまた上条と春風は再び顔を見合わせる。

「私だつて、好きでこんな事をしている訳ではありません。けど、  
こうしないと彼女は生きていけないんですよ。彼女は一年置きに記  
憶を消さなければ死んでしまうんです」

瞬間。上条と春風の時が止まった。

「私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリスイギリス教  
会の中にある ネセサリウス 必要悪の教会」

今にも泣き出しそうな声で言った。

「彼女は、私の同僚にして

大切な親友、なんですよ」

小さいはずの声は何故か響き渡るほど大きくしつかりと耳に残っ  
た。

第十二話 神裂火織 (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございます。

中には神裂火織と上条当麻が戦うのは二十四日じゃなかったっけ？ と考える人もいると思いますが、ちゃんと考えがあるので突っ込まないでもらえると助かります。

第十二話 神裂火織 (終) (前書き)

更新遅くなりましたが、その割に文字数は少ないです。

## 第十二話 神裂火織（終）

七月二十三日。

「彼女は、私の同僚にして

大切な親友、なんですよ」

言っている意味が分からなかった。何を言っているのか言葉の意味が理解できない。

「完全記憶能力、と言う言葉に聞き覚えはありますか？」  
神裂の問いに上条が答える。

「ああ、一〇万三〇〇〇冊の正体、だろ」

上条の言った事に対して春風は頷いた。

（なるほど。完全記憶能力があるから十〇万三〇〇〇冊を覚えられたのか。魔術でも使ってるのかと思ってた）

上条は切れた唇を動かし、続ける。

「全部、頭の中に入ってたってな。言われたって信じられねーよ、一度見たモノを残さず覚える能力なんて。だって、バカだろアイツとてもじゃねーけど、そんな天才には見えねーよ」

「……あなたには、彼女がどんな風に見えますか？」

「た

上条が答えようとするが、それは立ち上がった春風によって制された。

もう、今の春風は負け犬思考なんて持っていない。いつもの春風に戻っている。演じきることだけを考えている。

「いま重要なのは当麻からどう見えるかじゃない。ただ一つ。何で、

『一年置きに記憶を消さなければ死ぬのか』ただ、その一点だけだ」  
「彼女の性能は凡人とほぼ変わりません。彼女の八五%以上は、禁書目録の一〇三〇〇〇冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。

つまり、ですよ。彼女は常人の一五%しか脳を使えません。並の人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまうんですよ」

「そ、んな……」

上条は嘘だ、と言うように口を開く。

その一方で、春風は考える。

（つまり、コイツはこう言いたいのか？ 常人が一〇〇%の所、インデックスは一五%しか使えない。それに加え、インデックスには完全記憶能力がある。よって、一年置きに記憶を消さなければいけない、と）

本当にそうだった場合、確かに一年おきに記憶を消すしかないだろう。だが、そんな事がありえるのか。

（否。ありえない。あり得るはずがない。世界にはインデックス以外にも完全記憶能力を持つ者もいるはずだ。その持っている者たちも皆、早くに死ぬ事になったとしたら、大騒ぎになっているはずだ。だが、こんなに必死になっていると言うことは、何らかの症状が出ているはずだ。その症状は一体何だ）

春風が一人で考えてる中、上条と神裂は何かを話し始めていた。

「だって、だって、おかしい。お前、だって、残る一五%でも、俺達と同じだって……」

「はい。ですが、彼女には私たちと違うモノがあります。完全記憶能力です。そもそも、完全記憶能力とはなんですか？」

春風は考えながら話しを聞く。

「一度見たモノを、絶対に忘れない、能力。だろ？」

「では、『忘れる』と言う行動は、そんなに悪い事ですか？ 人間の脳の容量は、意外に小さい。人間がそれでも一〇〇年も脳を動かしていられるのは、『<sup>スベック</sup>いらぬ記憶』を忘れる事で脳を整理しているからです。あなただって、一週間前の晩ご飯なんて覚えてないでしょう？ 誰だって、知らない内に脳を整理させる。そう

しなければ、生きていけないからです」

ところが、と続ける。

「彼女にはそれが出来ない。街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴の形

まで……『忘れる』事の出来ない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ装置であつという間に埋め尽くされる。元々、残る一五%しか脳を使えない彼女にとって、それは致命的なんです。自分で『忘れる』事の出来ない彼女が生きていくには、誰かの力を借りて『忘れる』以外に道はないんです。だから、私達は彼女の記憶を一年置きに消してきました」

神裂は口を閉じた。

(新しい情報はない。これじゃ、救えないじゃないか。いや、考える。考えるんだ。見落としている点があるはずだ。いや、だが。見落としている点があつたとしても、インデックスは魔術の世界で生きている。科学の世界で生きている俺に気づけるのか？ ……ん？

魔術？)

そこで春風は何か気づいた。

(そうだ。魔術。魔術で脳に細工していて、尚且つ神裂達に嘘をついているとしたら、どうだ。そもそも、一五%なんて数字が出てくること自体がおかしいんだ)

春風の中で道が出来る。レッドカーペットのようには轆かれたそれは奇跡への道。奇跡を起こす為の道筋だ。

春風は道を歩き始める。先にある奇跡と言う名の光を掴む為に。

「神裂。奇跡が起きるのは奇跡じゃない。必然！俺が、俺達が奇跡を起こしてやる！インデックスを助けてやるよ！」

その言葉に神裂だけでなく、上条までもが春風に視線を向ける。

「彼女を助けるなんてこと本当に出来るのですか？」

神裂は見据え、訊ねる。まるで、本当かどうかを確かめるように。これは賭けでしかない。正直、本当に助けられるかどうかは分からない。だが、それでも、泊まるわけにはいかない。歩みを止めるわけにはいかないのだ。

もうすぐだ。もうすぐで奇跡と言う名の光を掴みとれるんだ。こんな所で止まってたまるものか。

春風は力強く頷く。

「ああ。出来る。奇跡は起こせるんだ」

「……本当に、そう思ってるんですか？」

一瞬間が空いた事に春風は歩みを止めてしまう。

これ以上は踏み込むな、と心のどこかで思ってしまったのだ。

だが、口を閉じた春風の代わりに神裂が口を開いた。

「それが正解なんです。奇跡なんてそんなに簡単に起こせるものじゃないんですよ。軽々しく奇跡を起こせるなんて言わないでください」

（いや違う。神裂の言っている事は間違ってる。確かに奇跡なんて軽々しく口にしていい言葉じゃない。だが、もう、道は出来てるんだ）

春風が口を開こうとするが、先の上条が口を開いた。

「ふざけんなよ！ 軽々しく口にするな、だと。奇跡は簡単に起こせないだど。ああ！ 確かに奇跡は簡単に起こせないかもしれない！ だがな！ 必死にあがいて、もがいて、奇跡は掴み取る事が出来んだよ！」

「……」

神裂は黙って聞いているが、春風は小さく呟く。

「止める」

だが、その呟きは上条の耳には届いていなかった。

「テメエらはあがいたのか！ もがいたのかよ！？ 必死にあがいて、必死にもがかなきゃ奇跡なんて起こるはずねーだろうが！ どうなん

「うるっせんだよ、ド素人が！！」

時が、止まった。同時に、春風の奇跡と言う名の光を掴み取る為の道が動き出す。何もせずに春風は奇跡から遠のく。

「知ったような口を利くな！！ 分かるんですか、あなたなんかに一体何が！ 私達だって頑張ったよ、がんばったんですよ！ 春を

過ごし夏を過ごし秋を過ごし！ 思い出を作って忘れないようにたつた一つの約束をして日記や写真アルバムを胸に抱かして！」

七天七刀しちてんしちとうの鞘が上条の腕を踏み潰す。

けれど上条は悲鳴を上げない。いや、悲鳴を上げられない。

上条は怖いのだ。これほどまでの感情を真つ向からぶつけられる事が。

「止める」

春風はまたもや小さく言うが、これもまた神裂の耳には届いていない。

神裂は腕、脚、腹、胸、顔と次々と上条の体のあちこちを潰していく。

「それでも、ダメだったんですよ」  
神裂は手を止める。

「日記を見ても、アルバムの写真を眺めても……あの子はね、ゴメンなさいって言うんですよ。それでも、一から思い出を作り直しても、何度繰り返しても、家族も、親友も、恋人も、全て……ゼロに還る」

「止める。いい加減にしる」

春風は呟く。何回目の呟きだか分からない。

けど、何度目でも神裂には、いや、二人には届かない。

「私達は、もう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です」

そうだ。あがいて、もがいていないはずなのだ。親友であるのならなおさら、必死に探したはずだ。記憶を消さなくてもすむ方法を。だが、結局見つからなかったのだ。

見つからなかったから、親友を敵として追い回していたのだ。出来るだけ悲しみを和らげるために。神裂とステイルは彼女の為に自分たちが傷つく道を選んだ。

「ふ、ざけんな……」

上条は歯を噛み締める。

「んなモンは、テメエらの勝手な理屈だろうが！ インデックスの事なんざ一瞬も考えてねえじゃねえか！ 笑わせんじゃねえ、テメエの臆病のツケをインデックスに押し付けてんじゃねえぞ！！」

「いい、加減に、しろ」

春風は肩を震わせながら呟く。

ここで自分たちが言い合っているのもインデックスの事は何にも解決しないのだ。

だが、二人は止まらない。

「じゃあ。他に……どんな道があったと言っんですかッ！」

神裂は、七天七刀の鞘を掴むと、上条の顔面目がけて思いつき振り下ろそうとする。

だが、

「いい加減にしろって言っただよ！」

春風の咆哮が再び時を止めた。

春風はそんな中、ため息をつく。

「ここで言い合っても、インデックスは助からないだろうっての。春風は神崎に視線を移して見据える。

心の中、いや、本能ではまだそれ以上は踏み込むなと警報を鳴らしているが、関係ない。そうだ。当麻が、仲間が助けたがってる奴を助けられるのなら、踏み込め。可能性に向かって走り、本当に奇跡を掴みとれば問題ないのだから。

だが、だからと言って親友に何も言わずに行動に移すのは流石にまずいだろう。

つまり。決めるのは、目の前に居るインデックスの親友、神裂なのだ。

「神裂。奇跡を起こすことは可能だ。どうする？ 可能性に欠けるか。それとも、今までのように記憶を消すか。選ぶのはお前だ」

「……、」

神裂は数秒口を閉ざすと、奥歯を噛み締め、やっとの思いでそれを口にした。

「起こせるのなら、起こしたいですよ。ですが！ どうやってインデックスを助けると言っんですか！？ どうやって奇跡を起こすと言っんですか！！」

それは当然の叫びだ。今まで、様々な方法を探しても見つかる事のなかった奇跡。インデックスを助ける方法。それをつい先日まで無関係だった人間が助けだせる方法があると言っても信じられないだろう。

春風は上条の右手を掴み、神裂に見せるように持ち上げる。

「コイツの右手は『幻想殺し』<sup>イマジナリーキラー</sup>と言って、異能の力なら神様の奇跡<sup>システム</sup>だって打ち消せるんだ」

「……なるほど。『歩く教会』を壊したのはその右手ですね。ですが、それが一体、奇跡と何が関係あるのですか？」

「慌てるなよ！ 今から奇跡を起こしてやるからよ！」

先ず、なんにしるインデックスがこの場に居ないと無理だ。そう思った春風は神と連絡を取る事にする。

「お、おい、優人。一体、どうやって助けるんだよ」

上条が問うのだが、春風はそれどころではない。

神と連絡を取る方法は二つある。携帯で連絡を取るか、強く思っか。この二つだ。

状況に応じて使い分けるが、今は後者だ。

（神。聞こえてるんだろ）

【ああ。聞こえてるぞ。どうした？】

春風の脳内に神の声が響き渡る。

（どうしたって、見てなかったのか？）

【世界なんて無数にあるんだ。お前みたいな転生者も大勢いる。常に全部の世界を見てると思うな】

（まあ、事情なんて知らなくて良いから、インデックスを俺の目の前に出してくれ。と言っか、移動させてくれ）

【……待て。お前、一体何をやってんだ？ 何故インデックスを移動させる】

(インデックスを救うためだ)

そう言った瞬間、神が黙りだした。

(おい、何やってるんだ?)

そんな問いかけにも返事が返ってこない。

数秒後、やっと神が口を開いた。

【お前の記憶の中を覗いたんだが……その世界は異常だ】

(は？ 異常？ 何が?)

【原作世界が壊れ過ぎてるんだ。嫌な予感とかそう言ったレベルじゃない。確実に嫌な事が起こる】

(待てよ。原作が壊れたって、それは俺が介入したからじゃないのか?)

【違う。一人が加入したぐらいでそこまで世界は壊れない。その世界にはもっとと巨大な何かが入り込める可能性がある】

巨大な何か？ と聞き返そうとしたが、今はインデックス助ける方が先決だ。

(とにかく、今は俺の前にインデックスを移動させてくれ)

【ああ。分かった。貼った紙は俺が処分しとく。それじゃ、移動させるぞ】

そう神が言うと、春風達の目の前に未だに眠っているインデックスが現れた。

「ッ！！」

突然の出来事に上条と神裂が驚く。

(サンキュー)

【別に礼はいらない。それと、教えてやる。インデックスの喉の奥そこを『イメージプレイヤー幻想殺し』で触れる。そうすれば救える。俺は調べ物があるから、当分は連絡を取らない】

そう言うと、その後は本当に何も言っただけだった。

「い、一体、何をしたのですか!? な、何故、彼女がここに！」

神裂は眠っているインデックスを指差す。

春風は不気味な笑みを浮かべる。

「言っただろ。インデックスを助けてやるってな」

春風は未だに固まっている上条に視線を向ける。

「おい、当麻。こっからが本番だ。右手でインデックスの喉の奥に触れる」

「な、なに言ってるんだよ？」

上条は何が何だか分かってない様子だ。

それも当然のこと。神と春風のやり取りは心の中で独り言を呟くようなものなのだから。

「お前の右手でインデックスの喉の奥に触れれば、インデックスを助ける事が出来るんだ」

第十二話 神裂火織 (終) (後書き)

読んでくれた方、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4312p/>

---

とある異能の六道輪廻

2011年9月10日03時16分発行